

もし、一日前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

—『いちにちまえ
一日前プロジェクト』報告書—

平成20年3月

内閣府

はじめに

我が国は、世界的にまれなほど自然災害に見舞われやすい国です。いつどこでも起こりうる大災害に対して十分な備えをするためには、行政による災害対策を強化し「公助」を充実させることはもとより、国民一人一人や企業等が自ら取り組む「自助」、地域の人々や企業、団体が力を合わせて助け合う「共助」が不可欠であります。しかしながら、「のど元過ぎれば熱さを忘れる」や「災害は忘れたころにやってくる」の例えどおり、自分の身にふりかかるものとして、日ごろから地震や洪水などに備えている人は、まだまだ少ないというのが現状です。

そこで、災害の恐ろしさ、事前に備えておくことの大切さを国民のみなさんに気づいてもらう一つの手段として、この「一日前プロジェクト」が誕生しました。「もし、災害の一日前に戻れたら、あなたは何をしますか？」の問いをきっかけに、災害対応の経験や被災体験を失敗談を含めて語っていただく本プロジェクトは、平成18年度にスタートして以来、人々の「気づき」につながる小さな「物語」を数多く生み出しています。

これらの物語は、国民運動のホームページからダウンロードできます。物語の中には、必ずしも正しい行動とは言えない場合もありますが、失敗談も含めて、地域の集まりや職場で、あるいは個人で、防災について考える際のたたき台として活用していただければ幸いです。

巻末に、「一日前プロジェクト」の簡単な手順を載せています。今後、みなさんが物語の「読み手」から「作り手」へと変化し、全国各地にそれぞれの「一日前プロジェクト」が拡がり、根づくことを期待しています。

目 次

I. 一日前プロジェクトの概要	P 1
II. 一日前プロジェクトの実施要領	P 2
III. 一日前プロジェクトのエピソードについて	P 4
「一日前プロジェクト」 エピソード一覧	P 5
平成18年度「一日前プロジェクト」 エピソード集	P 15
平成19年度「一日前プロジェクト」 エピソード集	P 99
【編集後記】一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？	P 261

I. 一日前プロジェクトの概要

「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただき、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があると言えます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「災害被害を軽減する国民運動」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

Ⅱ. 一日前プロジェクトの実施要領

平成18年度

	対象災害	ヒアリング実施地区		ヒアリング 対象者	ヒアリング 実施時期
1	福岡県西方沖地震 (平成17年3月) 福岡水害 (平成15年6月)	福岡県	福岡市	住民 企業経営者 企業従業員	平成18年12月
2	新潟県中越地震 (平成16年10月)	新潟県	小千谷市	住民	平成19年1月
3	新潟県三条市水害 (平成16年7月)	新潟県	三条市	住民	平成19年1月

平成19年度

	対象災害	ヒアリング実施地区		ヒアリング 対象者	ヒアリング 実施時期
1	能登半島地震 (平成19年3月)	石川県	穴水町 輪島市	住民	平成19年6月
2	台風23号 (平成16年10月)	京都府	福知山市 宮津市	住民 市役所職員	平成19年7月
3	台風14号 (平成17年9月)	東京都	杉並区	住民 消防団員	平成19年7月 8月
4	宮城県北部地震 (平成15年7月)	宮城県	松島市 石巻市 東松島市 松島町	住民 商店主 行政職員	平成19年9月 10月
5	台風23号 (平成16年10月) 南海地震 (昭和21年12月)	徳島県	美波町	住民 消防団員	平成19年12月
6	新潟県中越沖地震 (平成19年7月)	新潟県	柏崎市	企業従業員	平成19年11月
		東京都	港区	企業従業員	平成20年1月
7	雲仙岳噴火 (平成2年11月～平成8年6月)	長崎県	島原市	住民 企業従業員 市役所職員 商店主	平成20年2月

Ⅲ. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

平成18年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	
18	15	地震・津波	高い食器を二度割った	九州	家庭	福岡県西方沖地震 (平成17年3月)	
	16		「寝るときは、少しでもカーテンを開けておくことにした」				
	17		市内の娘にまずメール -お父さんはゴルフ場-				
	18		なぜか先行く大型車、割り込み続き大渋滞				
	19		仏壇が3メートルも飛んできた -買ったばかりの大型テレビもタンスの下敷き-				
	20		あれっ、バンク?車に乗って地震に気づかず				
	21		ビル傾き、いつ倒れるかとマスコミ張り付く				
	22		つくりつけの家具で救われる -倒れるかと思った高層マンション-				
	23		床一面の赤ワイン -これからは釣り糸で落下防止-				
	24		安否は市役所より近くの公民館 -いつものところに問い合わせ-				
	25		悩んだ差し入れ -「お店の残り」とママがお酒-				
	26		初の防災訓練は3日間 -被災を機に自主防災-				
	27		「やっぱり帰ります」 -バリアフリートイレやベッドなく-				
	28		顔みしりだと、「助けて」と言いやすい				
	29		めじるしになった黄色いヘルメット				地域・ご近所
	30		すぐ役に立った防災訓練				
	31		実は無かった非常食の備蓄 -自分たちで最低のものは備えておかなきゃ-				
	32		最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所				
	33		最初の避難食はホテルのフルコース				
	34		地震のあとにみんなで無線免許を取得 -一日ごろのおしゃべりが訓練に-				
	35		地震後に「店開けてくれ」と70軒 -デパートの客追い出して人あふれ-				
	36		1校区に100万人が避難!? -実情に合った表示やマニュアル必要-				
	37		無傷の店見て我に返る -ヘルメットかぶっていざ出動-				
	38		デマ防止に、消防車や校内放送でラジオ流す				
	39		役だった「災害時要援護者台帳」 -「民生委員さんが来たよ!」との声に役割を実感-				
	40		地震きっかけに増えた自治会員 -行事参加も増え、地域にまとまり-				
	41		どうすりゃいいの?帰宅難民				
	42		避難所のリーダーさんは中学生 -校庭キャンプの経験生かす-		学校		
	43		子どもたちの力をのばす地域防災				

平成18年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害		
18	44	地震・津波	災害でわかるコミュニティのありがたさ -地元記者の視点-	九州	企業・職場	福岡県西方沖地震 (平成17年3月)		
	45		繁華街のビル見て地震の怖さ実感 -オフィスの中もバラバラ-					
	46		生協も地域の一員					
	47		不動産会社は遠方の大家さんにも情報提供					
	48		やっときゃよかったメーリングリスト -仲間の安否確認に四苦八苦-					
	49		青年会議所のネットワークで体育館に布団200組 -お年寄りの避難生活を助け-					
	50		欲しかった災害直後の小口融資					
	51		社長が始めたあとかたづけ -泣いてる社員も我に返る-					
	52		披露宴はどうなりますか? -必死に集めた食材で二次会盛況-					
	53		大工の私が一番後悔 -家具の転倒防止を勧めておけば…-					
	54		タテゆれの怖さ痛感				家庭	新潟県中越地震 (平成16年10月)
	55		被災直後の気分で来るのは「ちょっと待って」					
	56		灯りがなければ逃げられない					
	57		集落全員、交差点で野宿					
	58	ボランティアとの世間話が元気の素						
	59	仮設住宅に新鮮な風運ぶボランティア						
	60	国道寸断で村孤立 -自分たちで仮復旧日-						
	61	欲しかった通信手段						
	62	姉妹都市のありがたさ、仮設トイレで実感						
	63	地震のショックで思考停止 -声出す人がリーダーシップ-	中部	地域・ご近所				
	64	朝食を一緒に配りませんか? -被災者も立派な働き手-						
	65	進入禁止のお願い聞いてもらえず -大切な「土のう」運びも渋滞に-			九州	福岡水害 (平成15年6月)		
66	川をはさんで天国・地獄	中部			家庭	新潟県三条市水害 (平成16年7月)		
67	あきれほど危機感なく -難を逃れ申し訳ないきもち-							
68	水は山からやってきた							
69	冷蔵庫いっぱい買い物がフイに							
70	生のカップラーメンで空腹満たす							
71	入っておけば良かった損害保険							
72	早かったですよ、水がきてからは -たった一時間で自宅が水没-							
			風水害					

平成18年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
18	73	風水害	聞いて良かったアドバイス -水害でも必要な水のくみ置き-	中部	家庭	新潟県三条市水害 (平成16年7月)
	74		親の教えを思い出す -枕元に翌日着る服を用意-			
	75		お母さん、足がグニュっとする -水が畳を押し上げた-			
	76		冷蔵庫も洗濯機も浮いていた			
	77		「堤防が切れた」の意味分からず			
	78		「2階の窓から出たんだよ」 -小学校で一晩「キャンプみたい」-			
	79		窓や戸をはすして水圧から店を守る			
	80		非常持出袋より避難が優先			
	81		社員旅行で被災地支援			
	82		100万本のタオル届いて目を回す			
	83		「模造紙とマジック持ってきて」 -ボランティアセンターの運営がスムーズに-			
	84		バイク見つけたら手を挙げて -現場に水や物資運ぶボランティア-			
	85		災害直後はツケで買わせて!			
	86		「水飲め」「休め」のサンドイッチマン -「熱中症注意!」とねり歩く-			
	87	土のうを積めない悔しさ教訓に土備蓄				
	88	こんなにも多かった地域のお年寄り				
	89	土のう積みにも限界 -ときには避難を優先することも-				
	90	レポーターはタクシードライバー -コミュニティFMが大活躍-				
	91	災害共通	公民館のサークルは地域の先生	九州	地域・ご近所	福岡県西方沖地震 (平成17年3月)
	92		やる気引き出す4年間 -任期を決めて地域の役員-			
93	働き盛りの男性を地域デビューさせるには?					
94	うるさいと言われても鳴らすサイレン					
95	ふだんからの声かけが災害時に生きる					
96	地区の防災体制は二重化対応	中部	地域・ご近所	新潟県三条市水害 (平成16年7月)		
97	要援護者の枕元に手作りタンカ					

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	99	地震・津波	津波の「つ」の字も知らなかった	四国	家庭	南海地震 (昭和21年12月)
	100		おばあさんを背負って山の中腹へ ー津波を見に行つて、危機一髪ー			
	101		早く逃げれば良かった			
	102		水の中をぐるぐる転がった			
	103		津波の第2波が来る前に逃げた			
	104		人の心の温かさに感激			
	105		とにかく逃げるが勝ち ー強欲な人みな流れ、欲を捨てた人逃げおおせたりー			
	106		ドレッサーが3mも吹っ飛んだ ーかっこう悪いと言われても、サイドボードにはガムテープー			
	107		地震のおそろしさ体感 ータオルや下着はいつもそばに置くようにしていますー	東北	家庭	宮城県北部地震 (平成15年7月)
	108		家の修理は保険で足りず ー孫に借金申し訳なくー			
	109		おっかねがった ー二階の座敷も下に落ちたー			
	110		あの世の人もこわかったろう ーお墓の修理に70万円ー			
	111		やっぱりみんな倒れてしまった ー物が散乱して前に進めずー			
	112		梅酒、マムシ酒も上からガシャン ー重いものは高いところにおかないようにしましたー			
	113		大型テレビが3回飛んだ			
	114		孫を助けなきゃと無我夢中			
	115		お風呂で体験、大地震			
	116		家がゆがんで、サッシ戸飛び出す			
	117		水が使えず、お皿にラップ			
	118		「倒れたらあぶないな」と家具固定 ー前の地震が教訓にー			
	119		非常食はバースデーケーキ			
	120		いきなりドーンと来た ー直下型だと何もできないー			
	121		油断大敵! ー屋根うらのボルトのゆるみも確認をー			
	122		建物はバランスが大事			
	123		寝室の蛍光灯にもご注意を			
	124		家具の整理で被害少なく			
	125		家具は倒れず ー役立った転倒防止グッズー			
126	やっぱりやっておけば良かったな ー転倒防止した家具だけは倒れずー					
127	家の中でも靴がなければ動けない					

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	128	地震・津波	天井が回って見えたよ -大工さんのお陰で命びろい-	東北	地域・ご近所	宮城県北部地震 (平成15年7月)
	129		岩崩くずれて道路にゴロゴロ			
	130		ゴミの処分長蛇の列			
	131		全戸に配った手作りの「井戸マップ」			
	132		野球ボールを使ってブルーシートをかけました -苦勞きつかけに防災班-			
	133		うちの両親どこですか? -避難先はビニールハウスだった-			
	134		命がけて屋根にかけたブルーシート			
	135		身にしみたご近所のありがたさ			
	136		お年寄りの寝ている場所までわかります -いざというときの決まりもつくる-			
	137		地震直後の避難は危険がいっぱい -間一髪ヘルメットで命びろい-			
	138		中学生の「防災学」			
	139		受話器戻したとたんに電話殺到 -お客さん対応で、てんこ舞い-			
	140		頼りになるのは商売仲間			
	141		イベントよりも実践訓練			
	142		一回目よりも大きい余震が来た -山から岩が追いかけてきた-			
	143		「震度5弱で全員集合」とは言うけれど			
	144		役場の職員にもケアが必要			
	145		マスコミ対応におおわらわ			
	146		息子の忠告聞き流す	中部	家庭	能登半島地震 (平成19年3月)
	147		建てかえるより倒れない家にする			
148	食器が水のように流れてきた -食器やガラスは割れると凶器に-					
149	かってに窓あき、カーテンひらひら					
150	スリッパではあぶない家の中 -部屋の中は、どこもワレモノだらけに-					
151	何でか知らんけど、水汲んだった					
152	全部飛び出す開き戸は「だめやね」					
153	なべもセイロも吹っ飛んだ -地震のときは身うごきとれず-	地域・ご近所				
154	役場の床に一面のトン汁 -調理中じゃなくてよかった-					
155	液状化で歩くのもままならず	中部	家庭			
156	もしも娘がピアノの練習をしていたら -1mも動いていた-					

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	157	地震・津波	食料や物資はふだんから備蓄してないと	中部	家庭	新潟県中越沖地震 (平成19年7月)
	158		カーナビのテレビ見て情報収集			
	159		生きている間はもう来ないと思った —前回の経験、生かせず—			
	160		パチンコの最中に、グラツときた —床は一面玉の海—			
	161		地震直後の車の運転はやっばり危険 —古い家は軒並みくずれた—			
	162		何かの下に隠れる余裕もなかった			
	163		そんなところで寝ていちゃ、ダメ —家具の配置に要注意—			
	164		「震度6強」ってものすごい			
	165		ご近所みんなで助け合えた			
	166		おとなりの井戸水もらえて大助かり —トイレの「ジャー」は、バケツ3杯分—			
	167		すぐ外に出てヒヤリ			
	168		ヘルメットを取りにいけど余裕もなく —上司の「落ち着け!」で冷静に—		企業・職場	
	169		電話連絡網を使って部下の安否を確認			
	170		地震の反省を生かし工夫			
	171		上司の配慮で、有給休暇扱い			
	172		「あ、地震だな」とは思ったけれど —すぐに机の下にもぐるべきだった—			
	173		「ごりゃ、仕事にならないな」 —先に自宅の後かたづけを—			
	174		ひとまず「解散」 —会社の指示はきちんとしていた—			
	175		仮設トイレにも細かな気配り —全トイレに芳香剤、女性用トイレに生理用品—			
	176		先ず生産ラインの復旧 —ブレなかった指示系統—			
	177		社員のために温泉施設を確保			
	178		水は2リットルと500ミリリットルの使い分け			
	179		蓄積される災害対応ノウハウ			
	180		厨房の漏水でヒヤリ			
	181		必要最低量の水を毎日被災地に			
	182		「サバイバルカード」も社会貢献に一役			
	183		いざという時には危機管理のメンバーで判断			
	184		地震が来たら、すぐテレビで情報収集			
185	工場復旧に—苦労					

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	
19	186	地震・津波	役立つ日ごろの訓練	中部	企業・職場	新潟県中越沖地震 (平成19年7月)	
	187	風水害	道路寸断で消防団員の出番	四国	地域・ご近所		
	188		上からと下からの水が鉢合わせ ーあつという間に水位上昇ー				
	189		人に頼る避難より自主避難を!				
	190		「いままで大丈夫だったから」は危ない				
	191		地元の人間話をよく聞いて!				
	192		気がつかない人に知らせる電話連絡網				
	193		仕事の大事なデータが水の中へ ーバックアップをとっておけば良かったなー			企業・職場	
	194		危機一髪、家を出た後に土砂くずれ			近畿	家庭
	195		「立場なくなる」との説得で、母がやっと避難に同意				
	196		避難の準備をする間、ジャーのごはんをおにぎりに				
	197		走りながら仕組みをつくるのは、民間ならではの	地域・ご近所			
	198		掃除しながら「こんなんしていいん?」と ボランティアセンター立ち上げ				
	199		「要援護者」以外にも助けが必要				
	200		いきなり「逃げる」といわれても、どうしていいかわからない	関東	家庭		
	201		前例のない豪雨で高齢者の経験が逆作用				
	202		気軽な自主防にと「クラブ」と名付け ー安否確認や独居者の避難もスムーズにー				
	203		隣の泥かきボランティアに参加				
	204		川の様子に「まずいで」と言いながら腰上げず				
	205		鳴り続けた電話が停電でバッテリー				
	206	ベッドですぶぬれのおばあちゃん見て気合い入る					
	207	119番通報バンクでお手上げ	行政				
	208	日頃から携帯電話の充電器を持ち歩く					
	209	家を選ぶときは地形に注意					
	210	犬用の古いバスタオルで大助かり					
	211	大切な着物が泥水で台無し					
212	夏でも役立つ使い捨てカイロ						
213	水圧でドアが開かない ー地下室のドアはいつでも開けておくー						
214	川があふれる可能性はあったと後から思う		台風14号 (平成17年9月)				

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	215	風水害	2階のトイレから水が噴き出す ー洪水時の外出は危険ー	関東	家庭 地域・ご近所	台風14号 (平成17年9月)
	216		お年寄りの「ありがとう」に疲れ吹き飛ばす			
	217		うちも、うちもと、地下室の被害			
	218		外出時もご近所の電話番号を携帯			
	219		思い浮かばなかったSOS			
	220		防災訓練はどこかで役に立つ			
	221		ポンプの口にゴミが詰まって吸水できず			
	222		毎年1回、震災訓練の日に水害の記憶がよみがえる			
	223		震災訓練の後にやってきた集中豪雨 ーラッキーではなく、タイムリーー			
	224		駅前はいつもと同じ、川の氾濫想像できず ー局地的豪雨の恐ろしさを感じたー			
	225		お嫁に来てから初めての体験 ーご近所の方の連絡で気づくー			
	226		「川があふれています!」と必死で玄関のチャイム鳴らす ー緊急時には、声をかけあってー			
	227		街の灯り消え、警備灯もって交通整理			
	228		PTAと「おやじの会」の連携で避難所開設			
	229		避難所は恵まれた場所とは限らない ーまず各家庭で、備えをしておこうー			
	230	サラリーマンに避難場所を覚えてもらうには				
	231	補充忘れて、大よわり				
	232	災害のときには、子どもたちも大活躍				
	233	火山	やっぱり帰ってきてよかった家族一緒	九州	家庭 地域・ご近所	雲仙岳噴火 (平成2年11月～ 平成8年6月)
	234		足りなかった心構え ー自宅から火砕流見物ー			
	235		避難所の消灯時間早く困った試験勉強			
	236		避難所や仮設を転々、引越しのベテランに			
	237		幼稚園の避難訓練きっかけに話した被災体験			
238	家族4人でブルーシート					
239	話し合っておくべきだった避難先					
240	すぐ終わると思った体育館の避難					
241	悲しかった小学校の焼失					
242	見知らぬおじいさんたちと手紙で交流 ー改めてわいた感謝の気持ちー					
243	商店が元気出そうと「元氣市」 ー被災者とはげまし合いー					

平成19年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	244	火山	必要だった火山の知識 ー噴火後からでも学習をー	九州	企業・職場	雲仙岳噴火 (平成2年11月～ 平成8年6月)
	245		やっぱり大切地元で商売			
	246		災害中は開店休業 ー若手のイベント企画で人集めー			
	247		火山灰で商品にキズ ー雨どいがないほうがしいー			
	248		避難所はすべて一緒ではない			
	249		誰の言葉信じていいかわからず			
	250	災害共通	自主防災会にはお年寄りや子どもも参加	東北	地域・ご近所	宮城県北部地震 (平成15年7月)
	251		無事を知らせることも大事			
	252		船頭さんは誰ですか ー決めておくべきだった役割ー	中部	家庭	能登半島地震 (平成19年3月)
	253		薬持ち出せず、避難所で大弱り ー自分の薬は肌身はなさずー			
	254		息子からのリュックサック、毎日枕元に	中部	企業・職場	新潟県中越沖地震 (平成19年7月)
	255		「端数クラブ」のお陰で募金活動もスムーズに			
	256		やりがい求めるボランティアの調整しきれず	近畿	地域・ご近所	台風23号 (平成16年10月)
	257		悩んで決めたボランティアセンターの閉鎖			
258	反省をふまえて要援護者リスト作りが進んだ	関東	行政	台風14号 (平成17年9月)		
259	非常時に必要なものは、きっちり整理					
260	帰宅訓練のおかげで足に自信					

平成18年度「一日前プロジェクト」

エピソード集

高い食器を二度割った

福岡市 50代 女性

地震が起きた日はちょうど日曜日で、主人はゴルフに行っていました。

私は家にひとりぼっちでした。で、着替えてソフトバレーボールの練習に出かけようとしていたら、ワーンと揺れて、うちの食器棚は観音開きだから、扉が左右にダーンと開いて、中の食器がバーッと飛び出しました。

割れた食器を見たら、いつもわりといいのを食器棚の手前の方に置いてあるから、コーヒーカップのセットやらクリスタルのグラスやらが落ちて粉々でした。それに、主人の退職祝いでもらった高い花瓶も割れてしまっているんです。「ああ、残念だったな」と思いました。

なもんで、そんな私をかわいそうに思った友達が、1回目の地震のあと、いくつか食器を持ってきてくださったんです。けど、1ヶ月後の2回目の地震のときに、それもまた割ってしまいました。

最初の地震で大事なものを割ってしまったから、しばらくは食器棚の扉が開かないようにヒモでくりつけていたのに、1ヶ月たったらもう忘れてるんです。

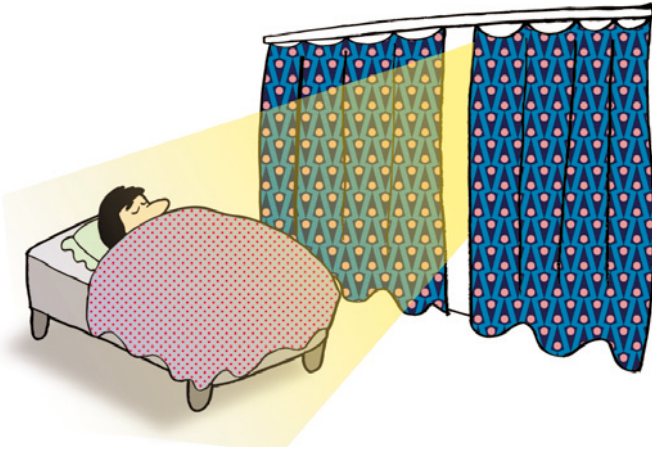


「寝るときは、少しでもカーテンを開けておくことにした」

福岡市 70代 男性

私の家も地震で孫の部屋のタンスがダーッと倒れました。
幸いにして外に出とったからよかった。だからといって、今寝とるときに、いつ災害が起きてもいいように準備しているかといったら、特別なことはしてないんです。でも、あれ以来、最小限のことはしています。早風呂になりました、長風呂しないで。

それから、カーテンを少しでも開けて寝ています。真っ暗だと方角がわかりませんよね、地震が起きたときに。カーテンを少しでも開けておけば、外灯や月の光で、家の中が真っ暗にならないから。



市内の娘にまずメール

お父さんはゴルフ場

福岡市 50代 女性

地震が起きた時、まず、家族のことが心配だったですね。ゴルフに行っている主人は山の中だから大丈夫だろうと思っていましたが、娘が市内に2人嫁いでいますので、そっちの方が心配でした。どうしているかと電話をかけても、つながらない状態がずっと続いていました。焦りました。携帯電話もなかなか通じなくて、結局どうにか携帯電話の「メール」で連絡がとれました。娘たちが無事だったのでホッと胸をなでおろしました。

それから、ゴルフに行っている主人に電話しました。「今、何しよっとね、早く帰ってこんね、大変なことになるとよ」と言ってですね。そしたら向こうは、ゴルフ場のある山のほうはゴーッという音がしたけど、「大したことないやろ」という感じだったらしいです。1ヶ月後にまた地震が起きたときも、主人はゴルフに行っていたんですよ。

余震がたびたびありましたよね。余震がなくなっても、何か体がこうゆれるような感じがしました。やっぱり1人でおるというのはほんと怖かったですね。



なぜか先行く大型車、割り込み続き大渋滞

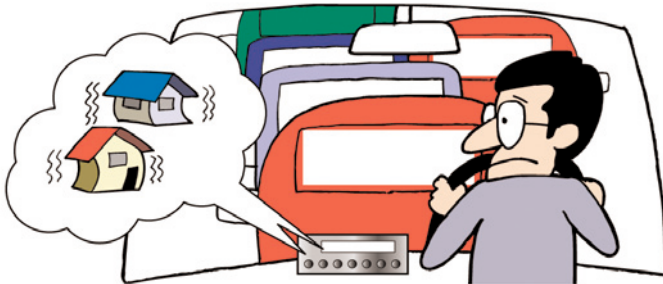
福岡市 50代 男性

私は、あの日、ちょっとした会議があって熊本へ行きました。車で現地に着いて、ニュースで地震のことを知って、会議も簡単に済ませてとりあえず引き返しました。で、車で帰る途中、途中のインターでおりようか考えたあげく、最終的に目的地のインターでおりることにしたんです。どこも渋滞だったので。

で、目的地のインターに出る車線に並んだのですが、結局インターをおりるまで4時間かかりました。追い越し車線はどんどん進みよるんですけども、こっちは全然進まない。どうしてだろうと見てみると、割り込みですね。

大型車はとにかく割り込み、割り込みです。それが原因で4時間もかかっちゃいました。

商売の方々も大変でしょうが、他の人だって、地震が起きて、家族の安否が気になってみんな早く家に帰りたいのだから、こういうときこそ、お互いさまの気持ちでルールを守ってもらいたいと思いました。



仏壇が3メートルも飛んできた

買ったばかりの大型テレビもタンスの下敷き

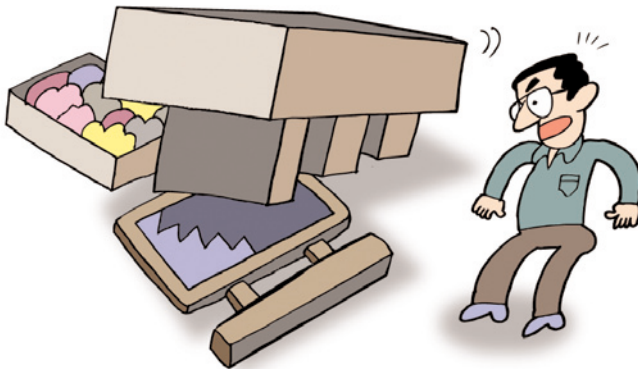
福岡市 50代 男性

自宅は6階なんですけど、地震が起きたのは、娘がちょうどお使いから帰ってきて、パソコンでデジカメの編集をしているところでした。すると、ガガガガッと何か異様な音がして、仏壇が3メートルぐらい離れた自分のところに飛んできました。娘は、パソコンだけを持って逃げ回っていましたね。

仏壇の修理をしなければと、仏具屋さんに見積もりを出してもらったら600万とかいったので、「接着剤で自分で直す」と言いました。ずっと今でも直しています。

それから、買ったばかりの48インチの大型薄型テレビも、倒れた拍子に倒れてきたタンスの下敷きになってペチャンコになってしまいました。

「あれっ、それはないやろう」って。もう、保険なんか全然かけてないですからね。



あれっ、パンク？車に乗って地震に気づかず

福岡市 40代 男性

私は医療の仕事をしていますから、怪我をされた方とかを治療したりしました。

地震直後に診療所に来られた患者さんに、「大丈夫でした？」ってきいたら、「何が？」って、おっしゃったのです。「いや、今すごい地震だったでしょう」って言うと、「ああ、それか、パンクしたのかなと思って車から降りてみるとパンクしてないから、ずっと走って来た」って。

「そういえば、何か道とかが変になっているような気がしたけど」っていうことでしたね。あれだけの地震でも、車を運転していると意外と自覚がないらしいですね。そんなもののかなと思いました。



ビル傾き、いつ倒れるかとマスコミ張り付く

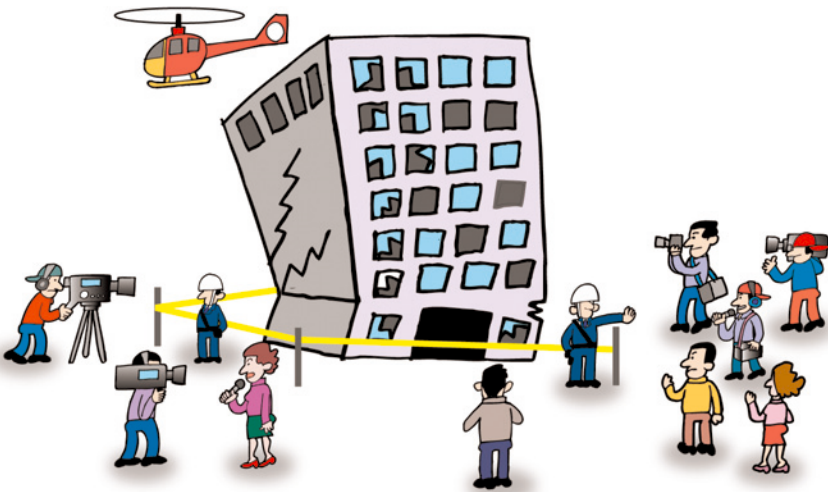
福岡市 50代 男性

貸しビル業をしています。そのうちの一つは、1フロア100坪ぐらいあるのですが、事務所がある2階へ行ってみたら床がちょっと斜めになっているんですよ。「あれっ？」って思ってドアを開けてみたら、柱がくの字になっているわけです。

構造設計の方が、これはちょっと危ないと。で、店子にすぐに退去するように言ったのですが、1軒だけ、危ないといくら言っても、営業できるじゃないかと言って出て行かれないんですよ。

で、管理会社に電話して、これじゃあいけないということになって、警察に相談をもちかけ、退去してもらいました。結局その一帯は、2日間通行止めになりましたが、周りには新聞記者が、いつ倒れるか、カメラを構えてるんです。ヘリコプターはずっと回っているし、ほんとうに参りました。

商売も大事だけれど、地震でビルが危険な状態になったら、すぐに退去してほしいですね。



つくりつけの家具で救われる

倒れるかと思った高層マンション

福岡市 50代 男性

私の家は、9階建のマンションの最上階です。地震が起きた時は、まず体験したことがない揺れでしたので、「あ、このマンション倒れるな」とふと思いました。それから、子供が家に居たので、無我夢中で子供部屋を見に行きました。

うちは幸運にも、4、5年前にリフォームをして、家具を全部「つくりつけ」にしていたので、タンスが倒れることもありませんでした。隣の家に行ってみると、棚の上のテレビは落ち、大きな家具は倒れ、金魚鉢も見事に割れていました。

家具を「つくりつけ」にしたのは、地震を意識していたわけではないんです。収納力がアップするし、見栄えもいいという、ただそれだけの理由でした。

今回の地震で、つくりつけの家具*と後置きの家具がこんなに違うんだということを実感しました。ほんとうに、たまたまでしたが、ラッキーでした。

*つくりつけの家具とは、取り外しのできない、壁などと一体化して作られた家具のこと。



床一面の赤ワイン

これからは釣り糸で落下防止

福岡市 50代 男性

うちは酒屋をしているんですけれども、地震が起きた時はビルの6階にある自宅にいましたので、すぐに1階の店へ飛んで行きました。店の奥に犬がいるんですよ。心配でドアをぱっと開けたら、辺り一面真っ赤なんです。ああ、犬がやられたと思いました。

でも、全部ワインだったのです。ワインの棚が倒れて。もう犬は震え上がって動けないし、店の中は一步も歩けない状態でした。

その後、しょうがないから、店の棚はワイヤー（釣り糸）でビンが落ちないように囲みました。もう、地震の揺れといったら、業務用の冷蔵庫が動くぐらいですから、あれはほんとにすごい経験でした。



安否は市役所より近くの公民館

いつものところに問い合わせ

福岡市 70代 男性

うちの小学校区は、核家族がほとんどです。三世代、四世代と一緒に暮らしている子は、小学校の1クラスに1人か2人ぐらいしかいません。あとは全部核家族。

お年寄りのひとり暮らしとか、夫婦だけで生活していて、お子さんが遠方に住んでいるというような家も多い。

とにかく地震の後は携帯電話がつながらね。公民館にも名古屋とかよそから安否確認の電話がかかってくるんです。「無事でしょうか?」と。

家にかけても電話がつながらない。よしんばつながったとしても、避難しているから家には誰もいない。それで心配してかけてくるんです。わりに住民の方が公民館を利用してあるから、わかっているんですね、大体。「そこに避難していますか?」ってきいてくる。その息子さんもこの町で育っているから、家にいなければ公民館かなと思うのでしょうか。

役所の方も来られましたけど、イの一番はやっぱり近所の人ですね、頼りになるのは。

遠い親戚よりも役所よりも、ふだんの日々の生活の中で地域活動という、そういうことではぐくまれたものがやっぱり一番大切だなと思いました。その地域活動のベースにあるのが公民館なのです。

何かのときには公民館に電話する。何かあったらどこそこに電話すればというのが1つあると、出かけておっても安心していられます。



悩んだ差し入れ

「お店の残り」とママがお酒

福岡市 50代 女性

地震のとき、男性も遅くまで公民館にいたり、泊まってくれたりしていました。そうしたら、そこに避難していたスナックのママさんが、お店が終わったからと言ってお酒を、「残りだけ」と言って、寒いのにご苦労さんと持ってきてくださったの。それで、「じゃあ、ちょっと飲もうか」と言ってみんなで飲んだんですよ。

それを見ていた人の中には、別の考え方の人もいらっしやるわけです。「こんな時に飲んで」と。

飲むことに対しては悪いかもしれないけど、こんなとき持ってきてくださるそのお姉さんも優しいじゃないですか。そういうことをちょっと理解してもらえたらいいなと思いましたね。

私はその時、やっぱりいろんな考え方があるのだなと思いました。



初の防災訓練は3日間

被災を機に自主防災

福岡市 50代 女性

今回、私たちは地震を経験しましたが、一般の人たちはどう思っているのかなということも知りたいなと思っています。

そして、この地震を機に、地域にも自主防災組織*ができたので、これからいろいろ動きだすところです。

役員をやられている方たちの意識も高いので、初めての防災訓練は年末に3日間かけて大がかりにやります。でも、参加についてあまり強制はしないつもりです。強制すると別の問題がおきちゃうから。

強制はせずに、「気持ちがある人がやっっていこう」、「人びとの関心の高まりを期待しましょう」、そういう考えのもとでやろうと皆で話しています。

実際、地震のあと、地域の行事に参加する意識がだんだん芽生えてきているような気がしています。

*自主防災組織（じしゅぼうさいそしき）とは、自発的に自分の町や、自分たちの隣人を守り合うための組織です。



「やっぱり帰ります」

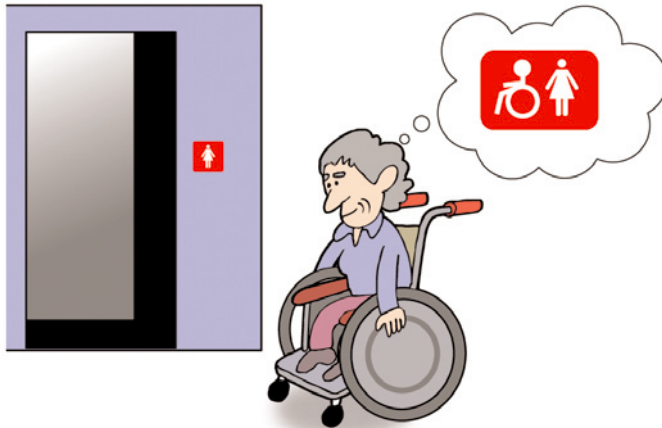
バリアフリートイレやベッドなく

福岡市 50代 女性

避難して来た方の中に肢体不自由の方がいらっしゃいましたが、そういう方専用のトイレというのがないんですね、公民館は狭いから。それから、寝るときも車椅子で寝ておられました。

次の日、その人は「やっぱり帰ります」って言われたのです。ベッドに寝たいからと。足がこんなに腫れるということですね。横になりたいとおっしゃいました。

私は、ふだんから、せめて簡易ベッドとかが用意されていればと思いました。



顔みしりだと、「助けて」と言いやすい

福岡市 50代 男性

「タンスとかが倒れて、1人じゃ起こせないから手伝ってください」という電話があったものですから、地震直後、市の対策本部が立ち上がる前に、ボランティアの仲間や民生委員*さんらと、リヤカーを出して、ひとり暮らしのお年寄りのところを回りました。

僕らがリヤカーを引っぱって行くと、案外すぐに家の中に入れてもらえました。

やっぱり、ふだんから顔見知りになっておくと、「してちょうだい」という言葉が言いやすいのかなと思います。

* 民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



めじるしになった黄色いヘルメット

福岡市 60代 男性

地震の起きたちょうど2ヶ月前の1月17日に、私たちの小学校区で初めて防災訓練をしました。その際に、うちの校区のカラーである黄色のヘルメットを70個作りました。大きな文字で校区の名を入れましたが、たまたま黄色に黒い文字だったから、どこに居てもすごく目立つんですね。

そのヘルメットが地震の時にとっても役に立ちました。

それをかぶっていると、ここの関係者だと一目で分かるんですね。公民館に避難してくる人たちも、誰に聞けばいいか、誰のいうことに従えばいいのか、こちらが何も言わなくても分かってくれました。

私たちも突然のことで、混乱していたから、その説明の手間が省けて大いに助かりました。



すぐ役に立った防災訓練

福岡市 70代 男性

2004年の12月6日に、初めて小学校区に防災組織をつくりました。「消火班」「避難誘導班」「救出救護班」「情報班」「給食給水班」「防犯班」という6つの班と本部という形でつくったわけです。組織を作ったからには、やっぱり訓練をしなければいけません、すぐ訓練をしようじゃないかということで、翌月、1月17日に防災訓練を行いました。

災害を想定して、老人会などに「避難訓練する人は公民館に集まって」と呼びかけました。そして、安否確認のための点呼を取ったり、担架でけが人を運んでみたり、公民館から小学校の体育館までお年寄りを誘導するというような訓練をしました。

これが、実際の地震のときに非常に役立ちました。もし訓練をしていなかったら、校区の役員も何をすれば良いのか、途方にくれたでしょうね。何だかんだ言っても、訓練をしないと動けないですからね。



実は無かった非常食の備蓄

自分たちで最低のものは備えておかなきゃ

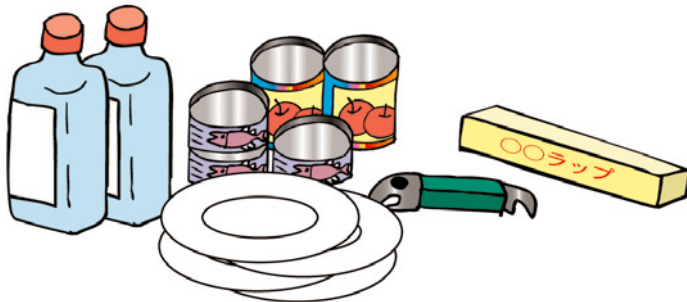
福岡市 60代 男性

防災訓練の時に、「おかゆ」とか「乾パン」が参加者に配られたんです。そうするとわれわれは、どこにでもそういうものが用意してあると思ってしまったんですね。だから、地震のときには、当然、配られると思っていた。そうしたら無い。

区役所の人たちに聞いてみたら「区役所にはそういう備蓄はありません。消防が持っているはずです」と。

で、消防の所長さんに尋ねてみると「いやあ、消防にそんなものはないですよ」と。それには、参りました。

やっぱり、自分たちで最低のものは備えておかなきゃならないんだなと思いました。



最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所

福岡市 60代 男性

避難所に来た皆さんは、最初はお殿様かお姫様みたいに、じっと座っているだけなんです。私たち小学校区の役員が対応に追われているときも。同じ被災者なのにね。

そこで、「元気な方はどうぞ、一緒におにぎりを握ってください」、「お米を研ぐのを手伝ってください」とお願いしたら、若い人もお年寄りも我に返ったように、「それなら」と気持ちよく炊き出しの手伝いをしてくれました。

あれから、避難所にいる人たちの気持ちがひとつになったような気がします。だから、避難されてきた方々をお客様みたいにさせない方策、例えば必要な役割ごとにあらかじめチームを作っておいて、どこに何人配置するかを決めておく。避難者にも作業をお願いするというのも考えておくことが必要じゃないかと思います。



最初の避難食はホテルのフルコース

福岡市 70代 男性

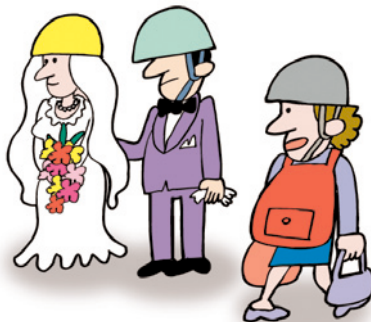
小学校が避難所でした。運動場にたくさんの人、地域の人も通りがかった人も避難してきました。それに、隣に大きなホテルがあったのですが、そこから結婚披露宴に参列する人たちが大挙してやって来ました。さてこれからというところだったらしいですね。

で、ホテルから避難所に「差し入れ」として、めったに食べられんようなステーキとか、上等のコーヒーや特別製のケーキなど披露宴のために準備してあったものが、届けられました。

避難してきた皆さんは、だいぶ美味しいものを食べられたわけです。

新郎新婦はウェディングドレスとモーニング、親戚の方々はタキシード姿で、そのまんま逃げてきたんです。その人たちが運動場に立ち尽くしている光景は異様でした。

地震はいつ起こるか分からない、そう実感しました。



地震のあとにみんなで無線免許を取得

日ごろのおしゃべりが訓練に

福岡市 70代 男性

災害時には正しい情報の収集が必要ということで、公民館には防災無線があるんですよ。本部から必要な情報が流れてくることになってはいたけれど、地震の時には全然機能しなかった。聞けば、本部の担当者が出払ってしまっていたらしい。

携帯電話は役に立たなかったので、避難所に情報が入って来ず、わたしたちは、まわりの状況がつかめなくて苦労しました。

そこで地震のあと、「災害時には、やっぱり無線機だ」ということになって、公民館で5ワットの無線機を買いました。うちの小学校区でもアマチュア無線の免許を持っている人が何人かいますが、私もそうですが、少し前は一生懸命やっていたのが、携帯電話がはやり出してやめていたんです。

で、役員みんなで免許を取りました。消防団のメンバーも。そして、それぞれが無線機やトランシーバーを持つようになって、公民館の他にも、自治会で2つ、防犯組合でも1つ無線機を買いました。今では月に1回ぐらい交信をしています。訓練というわけではなく、ただのおしゃべりかもしれないけど、これが災害の時の訓練にもなると思っています。



地震後に「店開けてくれ」と70軒

デパートの客追い出しで人あふれ

福岡市 50代 男性

町内にはデパートが2軒、ホテルが1軒、大型商業施設やバスセンターやら駅ビルがあって、市の避難所になっている公園があります。地震発生直後、その公園には、近くのデパートなどから避難してきた人たちが大勢、不安そうな顔をして集まっていました。

私はそれを見て、町内のお店70軒くらいに「自分達も大変だろうが、店を開けてくれ」とお願いをして回りました。要は、避難している人たちにお水やお茶を提供してほしい、お便所を貸してほしいというお願いをしたわけです。みんな店を開けてくれたので、助かりました。お店の方も普段よりもうかったなんて笑い話もありました。

やっぱりこういう時は助け合いが大事ですね。今までも『市政だより』を自分達で届けたりしていましたが、これからは、お店のご主人や企業の方、デパートの防災担当の方たちとは、普段からもっと連絡をとるようにしたいと思います。



1校区に100万人が避難！？

実情に合った表示やマニュアル必要

福岡市 60代 男性

この小学校区には、大きな繁華街があります。たかだか1つの校区に、休日の昼間人口が100万人集まるとも言われています。

避難所に指定されている公園は、繁華街の真ん中にあります。公園を「避難所」と表示するのがルールなのかも知りませんが、あそこは「一時避難場所」*としてしか使えないから、「一時避難所」と明示すべきじゃないかと、今回の地震を教訓に陳情している人もおられるわけです。

マニュアルも同じで、従来の校区のマニュアルではカバーしきれない部分がたくさんありました。デパートや企業も、お客や社員を外に避難させて終わりではなく、行政や地域と連携した被災時の受け入れ態勢についても考えてもらいたいなと思いました。

マニュアルに地区が合わせるのではなく、地区にマニュアルを合わせるということですね。

*一時避難場所は、広域避難場所へ避難する前に、近隣の避難者が一時的に集合して様子を見る場所、または避難者が避難のために一時的に集団を形成する場所で、集合した人々の安全が確保されるスペースを有する学校のグラウンド等を指定しています。



無傷の店見て我に返る

ヘルメットかぶっていざ出勤

福岡市 70代 男性

地震の日は日曜日で、うちの店は休みでした。いつも休みの日は朝からぼけーっとして、テレビばかり見ているのですが、番組を見終わったところに、ドドーンと来たわけです。

家内は家の中におりました。「大丈夫かあー？」と言ったら、「大丈夫」ということで、家内にスリッパを投げてもらって、それをはいて下に避難したわけです。

うちは1階が店ですけど、不思議なことに、店はどうもないんですよ。2階、3階はひっくり返したみたいになって、テレビは転がるわ、大事にしていたおきものとかもみんな倒れてしまっ、ほんとに腹の立つ思いだったのに。

これでお店もやられていたら、私は腰を抜かしていただでしょうね。だけど、店が全く無傷であったということで、ハッと、我に返ったんです。

自分は、小学校区の役員をしていますので、ヘルメットとかジャンパーとか、いざという時のために全部1階に置いてありましたから、それに着替えて、自転車をこいで、避難所となる小学校へ向かいました。



デマ防止に、消防車や校内放送でラジオ流す

福岡市 70代 男性

避難所になる小学校には消防署が隣接しています。幸い、地震が発生して、私が小学校に駆けつけたときには、もう、消防団が集まっておりました。で、私はまず、彼らに消防車の拡声器でNHKのラジオを流すように頼みました。

それから小学校に避難してきた地域の人たちに、1人ずつ声をかけていたら、教頭先生がおられたから、「学校放送でNHKのラジオを流し続けてください」と言いました。

私は子供のころから、関東大震災の時にいろいろとデマが飛んで暴動が起き、地震とは関係の無いところで事件が起きてしまったという話を聞かされていました。だから、正確な情報がスムーズに伝達されなければならないと思い、NHKのラジオを流し続けるように頼んだのです。

そうしたら、被害の状況とか、街の様子とかが、ずっとラジオから聞いたんですよ。



役だった「災害時要援護者台帳」

「民生委員さんが来たよ！」との声に役割を実感

福岡市 60代 男性

私は長年民生委員*をしています。その日は彼岸の中日ということで墓参りに行く準備をしていた時に、ゴーツという音と同時に、びっくりするぐらい家が揺れました。幸い私のうちは新しく建てたもので、いろいろ中のものが倒れた以外は無事でしたので、すぐに「災害時要援護者台帳」を持って、それに登録してある方たちの安否確認に出向きました。

台帳は、平成7年の阪神・淡路大震災の翌年から取り組んでおりまして、ひとり暮らしの高齢者や障害をお持ちの方とか、生活弱者の方たちに民生委員が聞き取り調査をして保管をしているものです。

台帳には、親戚とか緊急連絡先が3名まで書かれていて、ケガとかされていた場合すぐに電話できるからと、それを持って回りました。

私たちは、いつものように民生委員の腕章をつけて、順番に家を回りました。あるお宅に行くと、「ケガないね？」と声をかけたら、電話中だったんだけど、「今、民生委員さんが来てらっしゃった！」と電話越しに大きな声で言っていました。あとで聞いたら、娘さんと話をしていたとのこと。

そんな時、やっぱり民生委員も頼られているなと思いました。

* 民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



地震きっかけに増えた自治会員

行事参加も増え、地域にまとまり

福岡市 60代 男性

小学校の講堂には、240名が避難して来ました。で、炊き出しということになるのですが、私たちの小学校区は、阪神・淡路大震災のあとに、300食ぐらいできる大きな釜とか、コンロなどを備えていました。夏祭りとか体育祭のときに、実行委員の皆さんが夕飯に豚汁をつくったりして、いわば災害時の予行演習みたいなことをしていたわけです。

被害の少なかった女性の民生委員*さんとか、各校区の各種団体の皆さん方が集まって、避難されてきた皆さんに温かい豚汁をつくってあげたところ、大変喜んでいただきました。当時、ボランティアを頼らずに住民だけで対応したということで、テレビや新聞に、鍋をつくっているところを取り上げられました。

逆に、地震のおかげでまとまったところもあるんですよ。今度の地震はマンションの被害が多かったから、日ごろは校区のことに関わらないマンションの人たちが避難してきたのです。で、校区の住民の皆さんから温かく世話をしていただいたということで、自治会費を払わないと言っていた人たちが払ってくれるようになったり、校区のいろんな行事に協力的になったりと、いい面も芽生えてきたように思います。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



どうすりゃいいの？帰宅難民

福岡市 50代 男性

地震が起きたのは、日曜日の10時53分ごろ。皆さんが起きている時間帯だったことは、不幸中の幸いでした。これが夜中だったら、大変なことになっていただろうと思います。

問題だったのは、当日、多くの人びとが繁華街に集まっていたことですね。仕事やショッピングで、そこに集まってきた人たちが、余震等で起こる2次災害を防ぐために、建物から全員外に出されたわけなんです。そうすると、公共交通機関が止まっている、あるいは道路が使えない状況にありましたので、帰るに帰れない、いわゆる「帰宅難民」が生まれたのです。このところが、1つのポイントだと思います。

もう1つは、市の中心部のマンションは、外からはわからないけれど、家の中は相当被害を受けている状態でしたが、被災者の方が助けてくれという意思を示さない、どこへ伝えていいかわからないという状況だったことです。だから、震災後は、ボランティア活動のニーズの掘り起こしに力を注ぎました。



避難所のリーダーさんは中学生

校庭キャンプの経験生かす

福岡市 50代 男性

学校に行ったら、子供たちが率先してハンゴウ*を出したり、畳を干したりしていました。大人の方も手伝っていましたが、確か、その春に卒業したばかりの子供たちが中心になっていたと思います。

最初の3日間ぐらいは、畳とかマットを敷いて、小学校の講堂に避難してきた人たちを寝かせたのですが、子ども会で年に1回、校庭でキャンプをしているので、講堂のどこに何がしまっているのか、子供たちは全部知っているんですね。

避難所になっている小学校の隣は消防署でしょう。寒いからと言って消防署の方も一緒にたき火をしようということになりました。子供たちは校庭キャンプでバーベキューをした経験があるから、ドラム缶で火をたこう、お湯を沸かそう、という時に自然にできたのです。

*ハンゴウとは、アルミニウムなどで作った底の深い炊飯兼用の弁当箱。キャンプなどで使用。



子どもたちの力をのばす地域防災

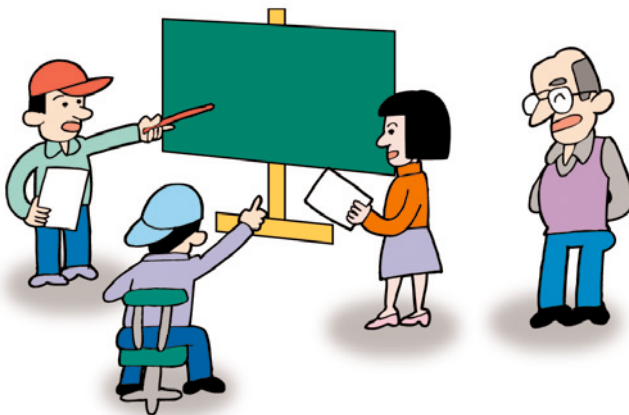
福岡市 50代 男性

今回の地震でも、中学生として地域の役にたった子供たちがいたことはとても良いことで、これからも地域の防災の一つの形としてつくっていかれたらいいなと思います。

学校5日制が始まるときに、地域の方と何ができるかという会議が何回かありましてね。その時に、私が中学校校長としてお願いしたのは、「子供たちをお客様扱しないでください」ということでした。

何かをしてやるというスタンスで考えていただくのではなくて、やっぱり子供たちを主役にさせていただくような取り組みでないと、今の子供たちはしてもらって当たり前、お客様でずっと一生過ごすことになりますよという話をしました。

大人が考えたものには、参加しませんよって。子供が参画意識を持てるような取り組みでないと、地域がいろいろ考えて、手をつくしていただいても、結局子供が参加しない、大人が満足するだけの取り組みになってしまうのではないのでしょうか。



災害でわかるコミュニティのありがたさ

地元記者の視点

福岡市 50代 男性

私は記者ですが、地元の記者としては、島の人たちが生活を再構築していく姿を記事で追っていくことにしました。コミュニティがしっかりしているということが、防災面で非常に大きな意味を持つということを、都市の住民に知らせていく意味があると思ったからです。

あれほど壊れたのに、なぜケガ人が少なかったのか、なぜ火事が少なかったのかという視点に立つと、やっぱりコミュニティがしっかりしていたからといえます。だから、中学生やお年寄りがいろいろ活躍したこと、コミュニティの中でその役割をひとりひとりがやった、それぞれに役割があったということを記事にしました。

それと都市防災。マンションの中の壁に亀裂が入ったり、中が壊れていても、外から見ただけではわからないわけです。それが、たまたまうちの社員が1人そこに住んでいて、中に住んでいる方々が大変なことになっているという話わかってきたので、都市部の話をもう1つの柱にしました。



繁華街のビル見て地震の怖さ実感

オフィスの中もバラバラ

福岡市 50代 男性

日曜日ですから、寝ていましたよ。まあ、幸い自宅のマンションは、新しかったし、岩盤のかたいところに建っていたからほとんど被害がなかった。で、かみさんがいたんですけれども、ほったらかしてすぐ家を飛び出しました。

とりあえず社に駆けつけたということなんですけど、途中で、ビルのガラスが割れているところに遭遇しましたし、確かに驚くような揺れだったんですけれども、現実にはまちな様子を目の当たりにして、大変なことが起きたという認識をもちました。

会社に着くと、全員集合をかけていたので、もう何人かは出てきていましたけど、まだ部長が出てきていなかったの、結局最初は私が指揮するという形になりました。

オフィスのテレビは落っこちているし、ロッカーは倒れているし、かなりの惨状でした。

まず何をやったかといえば、連絡をきちんととって、だれがどこにいるかというのを把握して、出てこれないやつはそこで取材せよという、人の配置でした。



生協も地域の一員

福岡市 50代 男性

以前だったら、生協の組合員に呼びかけて災害ボランティアを募るということでしたが、今は平時から生協の組合員として地域で活躍しましょう、意識的に地域に入っていきましょうという考え方に変わってきています。

今までは、災害等が起きたら生協が自分たちで組合員の聞き取りをして、生協の組合員に対していろんな支援をするということだったわけですが、そういうやり方ではなくて、組合員であるなしに関係なく、地域で何かあったら地域に対して我々が何をできるのか考えるべきではないかというふうになりつつあるのです。

これからは、各地域に自主防災組織とかができた時に、生協の組合員がどうかかわっていくかということですね。



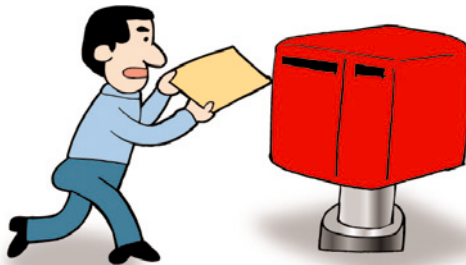
不動産会社は遠方の大家さんにも情報提供

福岡市 30代 男性

うちは、商売柄たくさん物件を預かっています。大家さんといっても近くの人ばかりじゃなくて、遠方の人もたくさんいます。近い方は自分で見に行ったりもできますが、遠方の方はそうはいかないので、自分のところに問い合わせしてくるのです。何かすごいことになっているんじゃないのかと。

被害があったところにはもちろん電話しますが、問い合わせがあったところには、家の様子も勿論ですけど、もともと福岡に住んでいたという方が多いわけですから、まちの状況をいろいろ伝えてあげたりすると、安心されるんですよ。

やっぱりみんなが知りたがるんじゃないかと思って、大家さんへのニュースレターに、いろんなメッセージみたいなものを書いて送ったり、被害状況とかを全部集計して、その日のうちに業界紙とかにファックスを流したりしていました。



やっときゃよかったメーリングリスト

仲間の安否確認に四苦八苦

福岡市 40代 男性

出張先の東京で地震のニュースを聞き、とんぼ返りで福岡に戻ってきたのは、午後4時ぐらいでした。私は青年会議所*の理事長という立場にありましたので、パソコンや携帯メールを使って、メンバーの会社の状況がどうなのか、けが人はいないのか、家族はどうかということを専務理事と手分けして片っぱしからきいていきました。とにかく、メンバー全員の情報を取りたいと思ったのです。

しかし、このメンバーの安否確認というのは、困難を極めました。300名のメンバーひとりひとりに連絡をとることは容易ではありませんでした。

そのとき、情報を一斉に配信する手だてをもっと早く講じておけば良かったと痛切に感じましたので、地震のあと、さっそく、メーリングリストの導入を検討しました。何ととっても災害時は、情報共有が一番ですからね。

*青年会議所は、40歳以下の青年経済人によって組織されるまちづくりとひとつづくりの団体です。



青年会議所のネットワークで体育館に布団200組

お年寄りの避難生活を手助け

福岡市 40代 女性

体育館に玄界島の人たちが避難してきていましたので、何かできることがあるかもしれないということで、仲間3人と夕方の7時ぐらいに体育館に行きました。

あの日は、雨が降ったりして、非常に寒かったのです。それに、体育館だから床も冷たい。玄界島の方は、ご年配の方も多くいらっしゃいましたので、「布団が足りないな」と思いました。

けれど、夜も8時だし、休日でしょう。どうしようって思ったのですが、そこは青年会議所*。ありとあらゆる職業の人間がいますから、布団屋さんとか、お布団のリースをやっている先輩とか、メンバーに手当たり次第に電話をして、夜の11時ぐらいには布団200組を用意することができました。青年会議所のネットワークがなかったら、あの数はあり得なかったと思います。

*青年会議所は、40歳以下の青年経済人によって組織されるまちづくりとひとづくりの団体です。



欲しかった災害直後の小口融資

福岡市 30代 男性

同じ商売仲間とか飲食店をやっているような人たちが何人か、「お金を貸してくれ」と言ってきましたね。どこの店舗も崩れてしまって、営業しないといけないから、モノを仕入れないといけない。目の前の現金がない人も世の中には当然おるわけですね。

私はコンサルタント的な仕事をしているもので、その日のうちに、夜中とかにも電話がかかってきたんですね。融資制度は何かないですかと。翌々日に商工会議所のほうに行ってみると、そういったものは今のところは何も検討されてないと。「今後は出てくるとは思いますけど」ということでした。

玄界島みたいに注目されているところは、やっぱりみんなが何とかしようとする。だけど、一歩外れて、被災はしているんだけど全く注目されてないような地域の人だとか、目を向けられてない企業の人たちというのは、このようなことでものすごく苦労していましたね。



社長が始めたあとかたづけ

泣いてる社員も我に返る

福岡市 30代 男性

私の店が入っている建物も、壁が割れていました。扉をやっとの思いで開けて中に入ると、皿とか、グラスとか、お酒とか、すべてひっくり返っていました。強烈なアルコールのにおいがしました。

一番おどろいたのは、社員がみんな泣いていたこと。大きな鍋で仕込み中だったソースなんかもすべて無駄にできて、申し訳ないというんですよ、私に対して。

私は、一緒になってへこんで泣いておったってどうしようもないから、努めて明るくして、割れたビンとかを片づけはじめました。そしたら、スタッフは、「自分たちがやりますから」と。とにかく、最初に私が動いてみせないといけないということしか頭になかったですね。



披露宴はどうなりますか？

必死に集めた食材で二次会盛況

福岡市 30代 男性

私の3つある店のうち一番大きな店では、その日1日は結婚式の二次会で、250万ぐらい売り上げる予定でした。絶対にとらないとこっちも厳しい。これがパパになったらほんとうに痛いので、予約表を見て、披露宴をやるホテルに電話をしたんです。

「披露宴はどうなりますか」と聞いたら、「一応やる予定です」という返事だったので、披露宴をやるなら二次会もあるなと思いました。で、結局、全部予定通り行われることになって、お客さんが来るからには何とかしなきゃということに。

かろうじて、佐賀にある実家の妹と電話が繋がったら、佐賀はどうもなっていないとのこと。二次会の予約が4件あって、その食材もすべてダメになり、スーパーやコンビニも全部やられてしまったことを話すと、妹が私の地元の友人とか身内などに声をかけてくれて、田舎からいろいろ持ってきてくれたので、何とか店を開くことができました。



大工の私が一番後悔

家具の転倒防止を勤めておけば…

小千谷市 60代 男性

私は大工をしているものですから、いわゆる皆さんの家の建築工事に携わっていて、いろんな面で家財道具の転倒防止というのを、盛んに言われてきたのを知っていたんです。

でも、まさかその当時は夢にも思わなかった、こういう大地震というのは。

今回の地震では、もちろん構造自体もそうだったんだけど、まず家財道具の転倒がものすごかったんです。ですから、そういうのをあらかじめ、やはり転倒防止、たとえば食器棚やタンスとか、ほんのちょっと、わずかなことなんだけど、それをしておけばまだ被害が軽かったなというのが、災害後にまず実感したこと。

一番後悔しているといまでしょうか、そんな感じがしました。



タテゆれの怖さ痛感

小千谷市 60代 男性

最初は集落の家の被害は一見少ないように思えました。だけど、あの地震は直下型ということで、ドカンと上に持ち上がって、それから一気に下がったものだから、ほぞ（組み合わさっているところ）がいったんはずれて、下りたときにちょうどその溝に当たればよかったんだけど、そううまくは下がらなかったから、家の中の建具とか、内装関係が全部だめになったんです。

当時はとにかく余震のゆれがすごかったし、柱なんかの「ほぞ」がゆるんでいたから、第2波の横ゆれで倒れた家が多くありました。

これからはあらかじめ家族で安全な場所を1ヶ所選んで、そこに逃げようと決めておくべきですね。雪国だったら、頑丈につくっている小さな車庫みたいなのがいいかもしれません。



被災直後の気分で来るのは「ちょっと待って」

小千谷市 50代 男性

最近、震災直後のボランティアさんと、復興に向けていくときのボランティアさんの気持ちというか、質が変わってほしいと思うようになりました。

震災のときのままの感じで来られると、せっかく前に向いているものが、また後戻りするみたいな感じになってしまう。確かに後戻りしなくてはいけないときもあると思うんですけど、今は、前に行くことのほうが大事なんじゃないかなと。

困っているときに一生懸命家の片づけをやってくれたり、食事の支度を手伝ってくれた人たちには、ことばで表せないほど有り難く思っています。だけど、身勝手かもしれません、地震が起きた時の話をいつまでも引き合いに出されると、正直、「ちょっと待ってくれよ」と、うんざりする部分があるんです。

2年以上たった今、私たちには、「1歩前に出たんだよ」という気持ちがある。やっと自分の中にしまいはじめたのにまた引っ張り出されると、ちょっと参るな。



灯りがなければ逃げられない

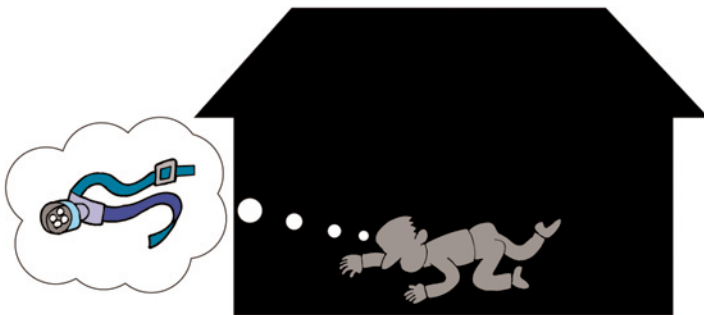
小千谷市 60代 男性

地震が起きたのは、10月半ばを過ぎた午後6時ちょっと前。わたしらの地域は、そのころにはとっぷり日が暮れていました。で、電気はもう一発で消えちゃって、真っ暗闇になりました。

家の中は上から落ちてきたものや倒れてきたもので足の踏み場もない。

そんな中をいろいろなものにぶつかりながら必死の思いで外に出ました。灯りがなければ、自分の家からも簡単には逃げられないんですね。

何と言っても避難するときの道具、特に灯りは必要だと思いました。



集落全員、交差点で野宿

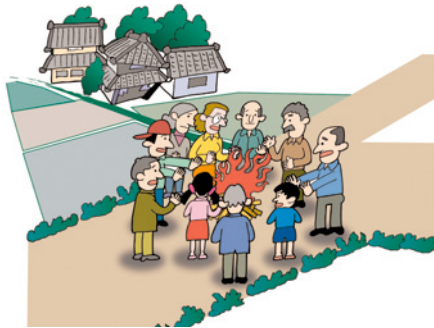
小千谷市 60代 男性

とにかく家の中はめちゃくちゃになっていたし、とても入れる状態じゃなかったんです。それに余震もどんどん来るものですから、その恐ろしさと言ったらもうほんとうに、体験した人でなきゃわからんと思うんだけども。

で、家の中は危険だということで、広い幹線道路があったわけですが、ちょうどその三叉路の交差点に、集落の役員や総代さんたちが、地区の住民を全部、年寄りから子供までをまず集合させて、とりあえず誰がいるかいないかということを確認しました。

都会と違って山の中の住まいだから、マキとかはどこにでもあるし、ちょうど10月の下旬で米とか野菜とかの収穫が終わった時期だったことは幸いだったと思います。地域そろって、お互いの協力で調達できるものをもちよって、舗装された道路に直接マキをくべて暖をとりました。それから夜中になると寒いからブルーシートで回りを囲って冷たい風をしのぎました。

幸いにして天気が2日続いたものですから、あれで相当助かったんですが、2日2晩、その道路の交差点で暖をとりながら、みんな野宿したんです。



ボランティアとの世間話が元気の素

小千谷市 50代 男性

避難している間、体育館の中では調理できないので、外にテントを建ててそこで全部煮炊きをして、食事をつくりました。

最初、村のお母さんたちが中心にやっていたところへ、ボランティアさんがどんどん来てくれたわけです。お母さんたちが、これをしてくれ、あれをしてくれ、食事ができたら配ってくれ、終わったのは洗ってくれとか言って、そういうやりとりの中でボランティアの人たちとだんだん打ち解けていきました。

1日限りでなくて、何十日もいてくれた人もいっぱいいました。食事の作業が終わると、火を切らさないように外の焚き火にどんどんマキをくべて、みんな一緒に暖をとりながら世間話をする。知らない人だから気楽に話せるってこともありますよね。

特にお年寄りたちは、知らない人たちといろんな話をすることによって、恐怖心が徐々に消え、元気が出てくるようでした。とにかく、人がいっぱいいると賑やかなんです。そんなこと、都会では当たり前かも知れないけれど、山間地はふだんあまりひと気がないわけなんです。



仮設住宅に新鮮な風運ぶボランティア

小千谷市 50代 男性

地震で家を離れ、仮設住宅に入って冬を過ごしたわけですが、ああいうところに入った直後は、精神的にグーっといい調子に上がってくるんですけど、しばらくするとまたズーっと落ち込むんです。ボランティアの方は、タイミング良くちょうどその落ち込んだ時に遊びに来てくれるんです。そうすると、また気持ち盛り上がり始める。

いろんなボランティアさんがいて、中にはいい加減な人も紛れ込んできましたけれども、それはそれとして、集落の人だけだと、ほんとうに精神的にだんだん暗くなっていくといいますか、2週間、3週間ぐらいたつと話も尽きてくるんですよ、思うように動けないから。

そういうときにまた顔を出してくれると、いろんな話を世間から持ってきてくれるから、結構盛り上がるんです。何人かで楽しそうにやっていると、周りのみんなもついてくる。



国道寸断で村孤立

自分たちで仮復旧

小千谷市 60代 男性

道路が全部かんぼつしたりして、私たちの村はしばらく孤立していました。道路がかんぼつしたり、土砂が崩れたりで、それこそほんとうの孤立なんです。それで私たち、当時は戸数にして50軒ぐらいあったんですが、村の中の住民の有志が、建設用の機械がたまたまあったものですから、「もう町の対策本部なんか待ってられない。とにかく自分たちでやろう」ということで取りかかりました。

2本あった国道のうち1本は完全に大陥没で、とても我々の手には負えなかったんだけど、もう1本の道路を、足かけ3日かかったのかな、とにかく車が通れる状態にしたんです。

許可もなにもなく、土砂が落ちたところをとりのぞいたり、県道のちょっと余裕のあるところから砂利をもってきたり、みんな一致団結して自分たちの力で仮復旧したんです。

そうしたら今度は、道が通れるから救援物資がどんどん入って来るようになりました。



欲しかった通信手段

小千谷市 50代 男性

うちの地域はそれこそ、災害なんていうのは考えてもみない状況の中で起きて、子供さんが3人亡くなりました。みんなで救出作業をやりながらも、もっとけが人なんかが出たらどうしようということで、私ともうひとりが小千谷までの15キロぐらいの道を徒歩とバイクで、救急車をよこしてくれるよう頼みに行きました。

何だかんだ、行き着くまで2時間ぐらいかかったのかな。村を朝の8時ごろ出て10時ごろ着いて、連絡が終わってまた引き返してお昼ちょっと過ぎに帰ってきました。そういった経験をした中で、ほんとうは、市から何キロ範囲には直結の防災無線があるということになればいいなと思いました。

電話は全くだめで、携帯電話はつながると思っていただけ、NTTのアンテナが倒れて使えませんでした。

自分が対策本部のある市役所に行ったときに、山古志地域の状況が全然把握できないと言われました。自分が行った時が初めてだというふうに言われたんです。足でそこまで行かなかったら情報が全然届かないわけなんです。



姉妹都市のありがたさ、仮設トイレで実感

小千谷市 50代 男性

道路が完全に復旧するまでしばらくは、通れるところまで車でピストン輸送みたいな感じで物資を運んでくれて、私たちがそこまで取りに行くという方法をとりました。

わたしたち、年寄りから子どもまで140人ぐらいは、2日2晩野宿して3日目に体育館に避難したわけです。そこで、トイレ。これが一番、困ったわけです。それまではちょうど山地だったから、とりあえずはどこでも適当に行って用を足せるような状態だったんだけど、そうはいかなくなった。

そんなとき、姉妹都市を結んでいる東京の狛江市というところが、仮設のトイレを2基か3基、組み立て式のやつを届けてくれたんです。

これが一番ありがたかったですね。あれは一生忘れられないありがたさだった。男衆は別にどうってことはないんだけど、やっぱり女の人たちは一番喜んだと思います。



地震のショックで思考停止

声出す人がリーダーシップ

小千谷市 50代 男性

自衛隊のヘリが来るまでは、みんなで廃校になった小学校のグラウンドに避難したんですけど、やっぱりショックが大きくて、そこに行くにもだれかが先導しないと動けないという状態でした。声を出す人が2人くらいないと絶対動けないんですね。何をどう考えていいかわからないという感じ。だから、自分と友達2人で、いったん村を捨てようという決断を皆にさせようと相談してから、「ここで寝てくれ」とか指示をすると、全員いい子になってついてくるんです。人の思考回路というものがなくなってしまったかのように。

「それは結構怖いことだな」、「もし自分たちの判断が間違っていたらとんでもない方向にいったかもしれないな」と、後で友達と話をしました。その後3日目くらいからやっと個々に文句を言うようになってきました。「これは意識が戻ってきたね」と。自分たちもしっかりしていたつもりなんですけど、相当変にはなっていたと思うんです。

5日目くらいになると皆さん自分の意思表示ができるようになったというか、「おまえらみたいなのに指図される筋合いはない」という声がいっぱい出てきて、これはもう大丈夫だということで、村の区長さんたちにバトンタッチしました。



朝食を一緒に配りませんか？

被災者も立派な働き手

三条市 30代 男性

地震で被災した地域の小学校のテントでずっと寝泊まりをしていました。固いおにぎりじゃ、とてもジーちゃん、バーちゃんは食えないぞという話になって、おかゆだけは乳幼児の離乳食にも使えるからと、24時間切らさないようにしていました。

で、朝ご飯を7時に食べさせようとする、一般ボランティアはまだ来てくれないから、人の手が足りない。われわれ2~3人で1,000食とかを配り切れるものじゃない。

考えたら、「いるじゃないか、体育館の中にぶらぶらマンガを読んでヒマそうにしている連中が！」となって、館内放送してもらったら、10人ぐらいがわーっと来て手伝ってくれたんです。けれど、翌日から1人減り、2人減り、3人減りという具合。「どうせ、そんなことをしなくたって飯を食わしてもらえる」という考え方が浸透してきたんですね。

「冗談じゃないぞ」ということになって、行政のほうからも声をかけてもらったら、入れかわり違う人を連れてきてくれるようになり、今度はそこから派生して、どんどん人が増えてゆきました。

ボランティアって、なぜか避難所のなかって足を踏み入れにくいんですよ。生活の場、プライベートの場ですから。外部の我々はなるべく入りたくないし、入っちゃいけないと思うので、そこに避難している人に、炊き出しをとりに来られないお年寄りへおかゆを持っていってもらいたいのです。そうすれば、お年寄りがいつもと違うようすだったら、すぐに気づくはずですから。



進入禁止のお願い聞いてもらえず

大切な「土のう」運びも渋滞に

福岡市 40代 男性

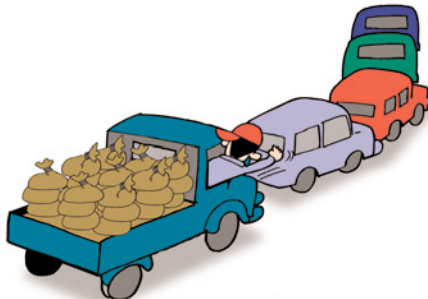
私は消防団に入っておりまして、当日朝5時ごろ、消防団のほうに、とにかく出てこいという指令が入りまして、川の現場のほうに行ったんです。もうその時には、道路がすねぐらいまで浸水している状態でした。

消防団には、とにかく車を近づけないようにという指示が出ましたので、みんな懸命に車を止めようとしても、なかなか皆さん言うことを聞いてくれなくて、車は来るばかりで、周りがパニック状態になっていました。

6時過ぎに川が決壊して、いったんひざ上ぐらいまで水が来ましたが、しばらくして水が引き出すと、今度はトラックで土のう*を運ぶということになりました。で、家に走って帰って、消防のほうで備蓄していた土のうを自分のトラックで川まで運ぼうとしましたが、いかんせん、個人のトラックですからだれも道を譲ってくれません。

先頭に消防車は1台いるけれども、その後にトラックが何台も続くものですから、それに紛れてほかの人がどんどん入ってくるんです。ほんとうに、緊急の場合に何を優先するかという意識が無いなと感じました。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



川をはさんで天国・地獄

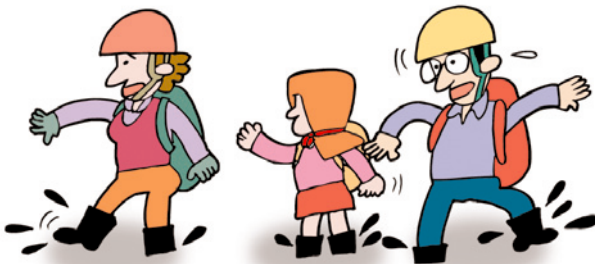
三条市 60代 女性

今回のこの水で私たちは被害を受けなかったから、いろんなことが考えられると思うんですよ。被害を受けていたら、自分が立ち直ることで精一杯だと思います。

橋の向こうから、みんな避難所のあるこっちへ歩いて来るんです。ドロドロの長靴をはいて、まるで戦争の焼け跡から逃げてくるように。

ほんとうに川を挟んで私らは天国だし、向こうは地獄でした。被害に遭った人たちを目の当たりに見ていると、「ああ、こんなに大変なんだ」と、ほんとに毛穴が震えるっていうか、そういう感じでした。

おかげさまで川の向こう側が切れたので、うちには水が来なかったというのが、非常に、こっち側にいる人たちは感謝しているっていうか。じゃあ、できることは向こうへ返さんばだめだし、自分のところへ水が来たときはどうするかという、いい教訓になっています。



あきれほど危機感なく

難を逃れ申し訳ないきもち

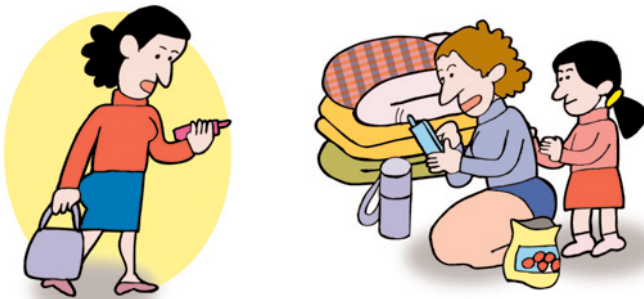
三条市 40代 女性

私の家は、実際に堤防が切れたのとは反対側にありました。ここはいつも「危ない」と言われていたところなので、早いうちに避難勧告が出ました。で、子どもたちと避難場所の商業高校に行ったんです。友達からはメールで、「頑張ってるね」と。

避難所にはいろんな人が来て、何だかんだ言っていたら、向こう側の友達から「うちのほうが大変。水が上がってきた!」というメール。しばらくして、川の向こう側が切れたと聞きました。

私たちは避難所で一晚寝ずに過ごしたんですが、近くの踏切がずっとカンカンカンカン鳴っていたし、ヘリコプターの音と救急車やパトカーの音が入り交じって、ものすごかったですよ。その音は、いまだに自分の中に不気味な感じで残っています。

「どうしよう、どうしよう」という友達からのメールを読みながらも、ほんとに今思うと、これほどかと思うぐらい危機感はありませんでした。今まで経験したこともないので、まさか「自分のこと」なんていうイメージがなかったのです。職場のほうは水没しましたが、幸い、家も車も全部助かったので、反対に、被害にあったひとたちに対して申しわけないような気持ちなんです。



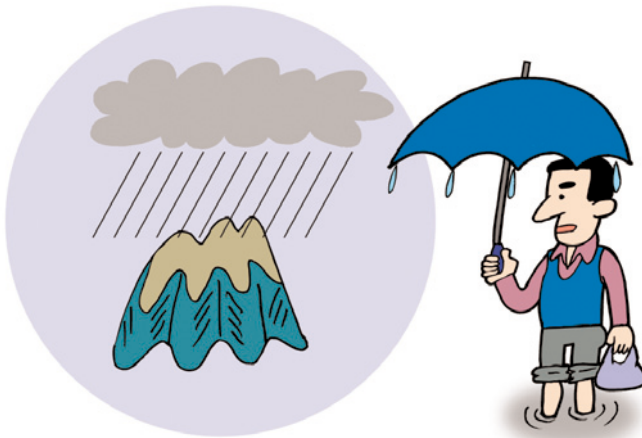
水は山からやってきた

三条市 40代 男性

7月13日に川が決壊したのですが、あの年はカラ梅雨で、あんまり雨が降らなかったんですよ。ずっと雨が降らず、土が乾いているところに、バケツをひっくり返したように雨が降ったのです。急に雨が降ったために、土が水を吸わなくて、みんな表面に流れちゃって、それが排水溝に流れたためにひどくなったのではないかとされています。

今思えば、その少し前、7月10日に三条市のこの地域でかなりの雨が降りました。13日は、主に川の上流、山のほうで雨がたくさん降りましたが、この地域で雨がひどかったのは、ほんの2時間ぐらいだったのです。

想像つかない場所で水がたまっていたのだと思うけど、私たちの目には見えない。こっちのほうはそれほどじゃなかったから、危機感が薄かったのだと思います。



冷蔵庫いっぱいの買い物がフイに

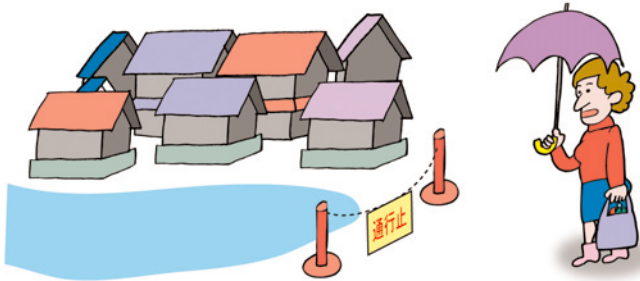
三条市 40代 女性

まさか川が決壊するとは思ってなかったけど、決壊したとしても、私たちのほうに水が来るなんていう意識は全然ありませんでした。家から川も見えないし、何も見えないから。川の近所の人は、川を見に行って、これはただごとじゃないと思っていたらしいけど、うちは、川まで行くには、車で10分ぐらいかかる。要するに遠いのです。

私は、夕方になっても雨がいっぱい降っていたら、買いに行くのも面倒くさいと思って、ちょっと小降りになったお昼ちょっと前ぐらいに、近所のスーパーに買い物に行きました。

行く途中に、土地がすごく低いところがあって、そこにはもうロープが張ってあって、通行止めになっていたんだけど、ちょっと雨が降ると、そこはいつもそんな感じになるので、「あーあ、またなっている」くらいの話。

違う道から歩いていって、生鮮食料品が結構安かったので、「よし、今日はこれでご飯だな」と、冷蔵庫いっぱいに買い込んで帰ってきました。午後には家が水に浸かって、それが全部ダメになるなんて、あの時は想像もできなかったのです。



生のカップラーメンで空腹満たす

三条市 40代 女性

道をはさんだ向かいの家の車庫のシャッターに絵がかいてあるんです。

もう真夜中過ぎだったけど、「あの絵が隠れたら終わりだな」と言いながら、みんなで2階の窓から見ていました。一定の線までいっても増えなくなって、ここにいれば何とかなるかと思いました。

うちはほんとに何の備えもなかったから、食パン4枚とアーモンドチョコ1箱しかなかったんですね。あと、運動しているから、スポーツドリンクの1.5リットルのペットボトルが3本ぐらいありました。

とりあえず食パン2枚を4人で分けて食べたけど、おなか減るわけですよね、子供は。で、「このチョコは、今日は1人1粒ずつよ」とか言って食べていて、水があんまり増えてないということになったら、やっぱり子供だから、「おなか減った」って言いだすんですよ。しかたないから、チョコを全部あげましたけれど、お腹がいっぱいになるはずもなく、「カップラーメンを食べたいい？」と聞かれて「いいよ」って。普通なら、消化が悪いからだめよというところだけど、お湯のないカップラーメンを食べさせました。



入っておけば良かった損害保険

三条市 40代 男性

今回、たくさんの車が水につかってだめになっちゃったけど、車両保険に入っていた車は、保険金が支払われています。

そういう話を聞くと、やっぱり保険というのは大事だなと思いました。

だって、前の日、7月12日の夜9時に新築した家の引き渡しを受けて、翌日の2時過ぎに水につかっちゃったという家もあったわけですよ。信じられない話ですけど。

実際にそういう話を聞いたり、見たりしているから、今は、やっぱり何はさておき、まず保険だなと思っています。



早かったですよ、水がきてからは

たった一時間で自宅が水没

三条市 40代 女性

テレビで、あの辺の川がはらんしそうですとか、三条市は大雨で大変ですみたいのを見ていたんだけど、うちのところに水が来るなんてことは、全然想像できませんでした。主人もお昼頃、うちに戻ってくるわけですよ、車に乗って。タイヤがかぶるくらいの水の中を、「職場の人が、何かあるといけないからと、お茶のペットボトルとカップラーメンくれたぞ」とか言って帰って来て、車を車庫にきっちり入れました。

で、「やあね、こんな雨」とか言いながら過ごしていて、家族全員がうちにいたわけですよ。家はちょっと道路よりも上にあるので、玄関にもし水が来たら嫌だからと言って、子供の野球用品とか大事なやつを玄関の上に上げただけでした。

それが午後2時ごろで、ワッと水が来たのが午後3時か3時半ごろでした。うちの中に水が入って来たんです。早かったですよ、水が来てからは。1時間くらいで1階がすべて水につかってしまいました。



聞いて良かったアドバイス

水害でも必要な水のくみ置き

三条市 40代 女性

隣の奥さんから、「とにかくお風呂にいっぱいお水をためて、ふたして、きれいなお水にしておくんだよ」って言われました。「えっ、じゃあ、掃除しておかなきゃ」なんて言って、一応ためました。あとで断水したら困るからなんですね。じゃあ、お湯も必要になると思って、やかんにいっぱいお湯を沸かして、ありったけのポットにお湯を詰めました。水は午前中のうちに止まっちゃって、子供たちが順番にトイレに入っていくごとに、「流れない、流れない」って。それで、お風呂の水で流しました。

それから、「ご飯もとにかく、朝食べちゃったなら、炊きなおしなさい。めいっぱい炊いておくんだよ」と言われて、「えっ、そんなに要らないじゃん！」って言ったけど、「保温をきかせておかなきゃだめだよ」って言われて、朝9時前にお米をといで、ごはんを炊いて保温にしておきました。お昼頃おにぎりを作って、ポットなどをもって2階にいました。

子どもに食べさせていたら、ひとりで留守番をしているお向かいのお子さんが、うちの子に「お腹がすいた」ってメールしてきたので、2階の屋根から、「これ、食べなさい」って、おにぎりを投げてあげました。



親の教えを思い出す

枕元に翌日着る服を用意

三条市 40代 女性

私たち、小さいころは、寝るときに、翌日着る服とかを枕元に用意しなさいみたいなことは、結構言われていたんだけど、いつの間にやら、そんなの、もうどこかに飛んじゃってしまいました。

だけど、近所のひとり暮らしのお年寄りの方で、常に登山用みたいなリュックに、貴重品とか下着1枚とかティッシュとか、最低限のものを詰めていて、それを持っているという方がいたんです。

その方のおうちが、やっぱり170センチぐらい水が上がったんですね。だから、それを持って2階に上がったそうです。ほかの電化製品なんかは、上げている余裕はないんだけど、とにかくそれを持って2階に上がったそうです。

昔、よく親から、「夜、寝るときには、服をきちんと枕元に置きなさい」と言われたのを思い出して、「ああ、やっぱりしなきゃいけないんだな」と思いました。



お母さん、足がグニュっとする

水が畳を押し上げた

三条市 40代 女性

パソコンで何かやっていた子どもが、「何か足がグニュッとする」と言いました。私は台所において、板の間だったから何も感じなかったのですが、子どもたちが「あれっ、何か畳がおかしい」とか言っていました。私は「えーっ！」と言って、バツと玄関をあけてみたら、水がこう、下から畳を押し上げていたわけです。

これ、ふつうじゃないよということで、息子と主人は、データが失われるとか言いながら、パソコンを2階に運びました。それから、デジカメは上に上げなきゃとか、家中大騒ぎになりました。

地震と違って水は静かに来るんですね。家の中にいた私たちは、回りがそんなに恐ろしいことになっているなんて、全然気がついていませんでした。

大雨のときはラジオを聞くなりして、もっと積極的に情報を集めておけば良かったなと思っています。



冷蔵庫も洗濯機も浮いていた

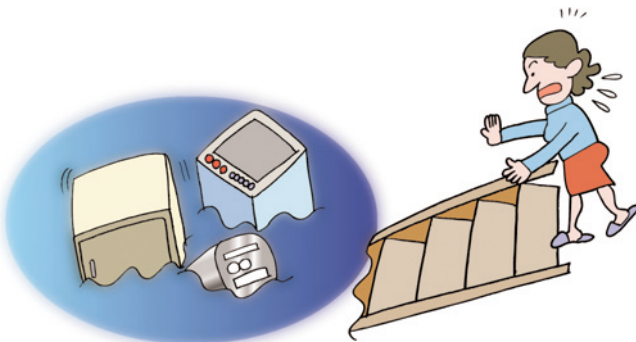
三条市 40代 女性

川が決壊してからは早かったですね。ほんとに一瞬の出来事というか、水が玄関の中に入って、「入ってきたよ！」って子供に言われて、「じゃあ、荷物をとっとと上げなきゃね」と言った時には、もう水はヒザより上の高さでした。

それからあっという間に、裏の川からどんどん水が流れてくる。台所のほうが湿ってきちゃって、「これはやっぱり上がってきちゃうのかな」と思ったのが午前11時過ぎ。息子たちに手伝ってもらって、体操着から布団までみんな二階に上げた頃はお昼を回っていました。

子どもが「腹減った」というので、おにぎりを食べさせて、テレビをついたら、避難するところが大分増えていましたが、まだ私たちの町名というのはいないんですね。

じゃあ、うちだけがひどいのかなと思って、2階から外を見ていたら、ミシミシと音がしてきました。何かと思って下を見ると、たんすが倒れ、畳も冷蔵庫も洗濯機もみんな浮いちゃっていたんですよ。そうなったら、もう階段を下りられるような状態ではないんですね。階段の下から4段、5段まで水が来ていて。それが午後1時半過ぎたころだったと思います。



「堤防が切れた」の意味分らず

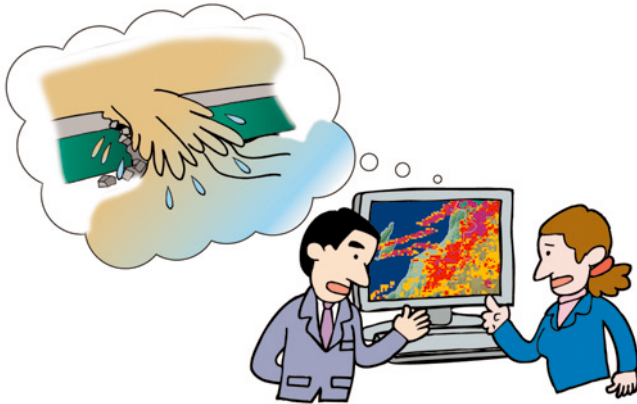
三条市 40代 女性

あの日、雨が気になったので、役場に行って気象レーダーを見ていましたが、山のあたりにあるアズキ色の雨雲がずっと動かないのです。

「これは大変だぞ」と口々に言っていたとき、役場の職員が「堤防が切れたぞ!」と言ったのです。私は、その声を聞いても、「堤防が切れた」ということが何を意味するのか、全然わかりませんでした。

小さいころ隣町に住んでいて水害にあっていますけれども、小学校1年ぐらいだったので、上流からお菓子の入ったでっかいふくろが流れてきて、近所で分け合ったとか、親戚が集まって賑やかだったとか、申し訳ないけれど、そんな楽しい思い出しかないのです。

強いてあげれば、夏休みの宿題のアサガオが流されて悲しかったことぐらいですから、いかんせん、堤防が切れたらどういふふうになるのか、まったく想像できなかったのです。



「2階の窓から出たんだよ」

小学校で一晩「キャンプみたい」

見附市 40代 男性

私が住んでいる地域は水に浸かりましたが、強い雨が降ると必ず水が出るんですよ。だからここに住んでいる人たちは慣れたもので、水が上がってきたら、すぐやるべきことはやっていると思うんです。

ですが、他の地域はあまりそういう経験がないということで、多くの方が避難警報が出てから避難先の小学校に行ったのですが、その小学校が水に浸かってしまったのです。中には、自分の家は何も被害がなかったという人もいました。

ただ、小学校は鉄筋コンクリートの建物ですから流されることはまずないし、水も、上のほうにタンクがついているから飲める。「避難所が水に浸かるなんて、避難しないほうがよかんじゃないか」とか苦情は出たんでしょうけど、結果的にはいいところに避難したんだと言ってもいいと思いますよ。

うちの子供にも、「一晩泊まって、どうだった」と聞いたら、「楽しかったよ」って。当然、電気もつかなかったわけですが、「一晩キャンプしたみたいだった」、「自衛隊の人がおにぎり持って来てくれて、2階の窓から出たんだよ」なんて言って、いい経験になったようです。



窓や戸をはずして水圧から店を守る

長岡市 40代 男性

うちは牛乳屋を営んでいます。激しい雨が夜中からずっと朝まで続いていて、おかしいなとは思っていました。午前中に長岡のほうへ配達に行っていると、土手の近くに住んでいる消防団の仲間から電話があって、「今、土のう*を積んでいるんだけど手伝ってくれ」と。私は「わかった」と答えてから、おやじに「やっぱりやばいみたい」と電話したところ、おやじは母ちゃんをほっぽりなげて店の様子を見に行ったのです。

堤防が切れた側にうちの店があったので、おやじが店にたどり着いたころにはもう水が出ていて、それからあっという間に腰ぐらいまで水が来たそうです。だんだん店のシャッターが水圧で膨れてきたので、おやじは、水を抜かないと家ごと持っていかれると思って、裏のガラス窓から戸から何から蹴ったりして外したので、店は残りました。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



非常持出袋より避難が優先

長岡市 40代 男性

緊急用の持出袋を用意しなさいってよく言われるけど、私は特別なものは必要ないと思いますよ。今回は食料はすぐ届いたし、外に出ればコンビニがあっちこっちにあって、飲み水もある。それを捜す手間があるんだったら、とっとと逃げてほしいと思います。避難するのが第一です。

なぜなら、中越地震の時に、その袋を取りに戻った方が、直後の余震で亡くなられたとも聞いています。そのときにさっと持っていけるものだけ持って逃げればいいんです。私たちも逃げるときは、余計なものは持っていきませんでした。

今回の水害でも、結構みんな、現金とか通帳とかを持って逃げているんですよ。でも、通帳やキャッシュカードがなくても、身分証明さえしっかりしていれば、金融機関は全部やってくれましたからね。ただ、災害泥棒みたいなのがいるから、家をあまり空けたくないという気持ちがあって、逃げるのをためらっちゃう気持ちもわかります。留守宅の見回りとかを組織的に実施できるようになればいいなと思います。



社員旅行で被災地支援

長岡市 40代 男性

うちは酒屋をしている関係で、災害を知って社員旅行をキャンセルしてまで来てくれた取引先の蔵元さんがいて、その蔵元さんだけでも、のべ40人か50人ぐらいの社員さんがすぐに来てくれました。

その他に、メーカーさんや問屋さんなどから1人、2人と応援に来てくれたので、店の泥出し作業と、水につかった商品の分別は4日で終わりました。ほんとうに有り難かったです。

うちの地域に、本格的に一般のボランティアの人たちが来てくれるようになったのは、4日か5日ぐらいあとだったと思います。



100万本のタオル届いて目を回す

三条市 40代 男性

NPO*の人が、ネットで「全国からタオルを集める大作戦」を提案してくれました。たかが知れているだろうと思って受け入れたら、ピーク時には、タオルが10トントラック3～4台分も来て、大変なことになりました。

過去に被災を経験した方々からアドバイスをもらって、よかれと思って始めたら、ネットの力が想像以上にすごかったのです。どうしてもタイムラグが出ちゃうんですね。

今欲しいものをネットにアップすると、2～3日後に集まり始めて、1週間後ぐらいになるとそれが過剰に集まってくるので、「もう要らねえ」という話になるんです。

段ボールで、10箱、20箱と送られてくるやつを、人間が袋に入れて、3つや4つ持って歩いたところで知れていますから、さばきようがない。タオルの置き場所にも困るありさまでした。

*NPOとは、Nonprofit Organizationの略で、行政・企業とは別に社会的活動をする非営利の民間組織を指します。



「模造紙とマジック持ってきて」

ボランティアセンターの運営がスムーズに

三条市 40代 男性

水害のあとかたづけのボランティアのために、ボランティアセンターを作りました。センターでは、毎日の活動の進みぐあいや翌日の予定を話し合いました。

会議をスムーズに進める方法の一つに、ファシリテーション・グラフィックという技法があるんです。これは、会議に参加していない人でも、後から見ればわかるし、会議におくってきた人でも参加できるというもので、模造紙にマーカーでわかりやすく書いてあげることによって、その人の発言をちゃんと聞いたよと示すことができ、同時に情報の共有と保存もできます。

よくボランティアセンターの終了ミーティングがめちゃくちゃ長かったという話を聞きますが、この手法を使ったので、私たちの終了ミーティングは短くて済みました。長くても1時間、ふつうは30分を目標にしていたのですが、目の前の模造紙に書いていくことで情報共有がしやすいことと、模造紙に向かって話をするから個人の意見の対立にはなりません。

当事者の議論は後ですることにして、その場は報告のみで議論はしないという前提で進めると、報告事項をあげてもらうだけですむのでとてもスムーズにいくのです。今まで、まちづくり等でこの手法を使ってきたことが活かされたかなと思います。



バイク見つけたら手を挙げて

現場に水や物資運ぶボランティア

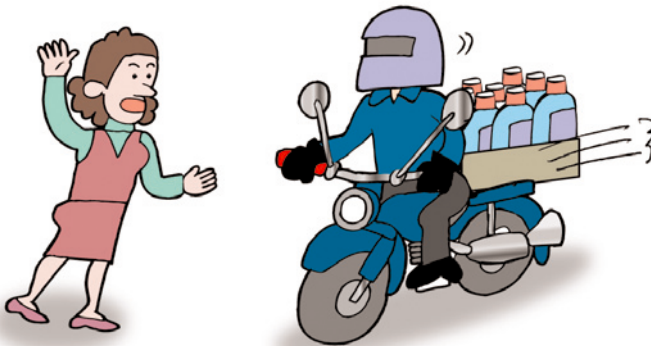
三条市 30代 男性

私はふだんの仕事でも渋滞のときに便利なバイクに乗っていました。で、そのバイクを使って、渋滞しているところに物資を運んだり、情報を集めたりしてほしいと頼まれました。

ボランティアさんがあちこちにいるんですけど、何が足りないと電話しようにも電話がつかない状態でした。私は連絡員のようなもので、土のう袋*から水から、詰めるだけのものを積んで行って、ボランティアさんを見つけると、「何か困っていない？取りに行ってくるよ」と声をかけたり、「水を飲めよ」と水を配ったり、土のう袋が足りないというところには土のう袋を渡したりしていました。

しまいには、「バイクを見つけて手を挙げれば、水をもらえる」という法則ができたぐらいです。なかには一般の市民の人も手を挙げたりして。

*土のう袋とは、土のう（袋の中に土砂が詰められ、それを積み上げることで水や土砂の移動を防ぐことができるもの）をつくるための袋。



災害直後はツケで買わせて！

三条市 40代 男性

当時、ボランティアセンターとしては、あと払いで活動物資を買うわけなのですが、この金をどこから出すんだというようなことで、予算立てのないボランティアセンターの運営って、すごく不安なんです。今は、共同募金会の災害支援制度に基づいて支援資金を申請し、認められれば、300万円以内の交付を受けられるようになりました。

地元のホームセンターに行って、「お金がないので、ツケでスコップ100本とデッキブラシを売ってください」と言って、「決して怪しいものじゃありません」と同行のボランティアをやっている方の名刺を渡しました。そうしたら、店長が本社にかけ合ってくれて、通常の価格よりもなお3割ぐらい安くツケで売ってくれたんです。

活動の途中で市長に会って、「金が足りなくなったらどうすればいいのか」というような話をしたら、「足りなくなったら市が何とかするから思い切りやってくれ」という言葉をいただきました。結果的には、青年会議所*の青年部が寄付を呼びかけてくれたりしたので、お金は足りました。

*青年会議所は、40歳以下の青年経済人によって組織されるまちづくりとひとづくりの団体です。



「水飲み」「休め」のサンドイッチマン

「熱中症注意！」とねり歩く

三条市 40代 男性

水害後だから消毒しなきゃいけないということで、石灰をまいたり、消毒液をまいたりするのですが、最初はボランティアもまいていたけれど、石灰が目に入るとあぶないのでやめましようということになりました。

救援活動が続けていくうちに、釘を踏んだりすると破傷風*のおそれがあるといった衛生面での注意事項がどんどん増えていきました。で、ボランティアセンターでも熱中症*とか脱水症状に注意するようといったチラシを配りました。

7月の暑い最中で、水分補給が一番の課題でしたので、県の社会協議会の人自らがサンドイッチマンみたいになって、「熱中症注意」と書いた紙をからだにベタベタ貼って歩いていました。それから、スポーツドリンクは高価でなかなかないので、高校生のみなさんが塩ひとつまみをアルミホイルに包んで、道行く人に配っていたのを覚えています。

*破傷風とは、破傷風菌が産生する毒素によって、口唇や手足のしびれや口が開けにくいといった神経症状を引き起こし、治療が遅れると全身けいれんを引き起こし死に至る感染症です。傷口に木片や砂利などの異物が残っていると、破傷風は発病しやすくなります。水害対応のときには、泥の中での作業が多くなりますので、特に手や足に傷をつけないように注意しましょう。

*熱中症は、強い直射日光に長時間照らされた際に起こりやすい病気です。予防としては、休息や水分補給をしっかりとることとされています。



土のうを積めない悔しさ教訓に土備蓄

長岡市 40代 男性

消防団も一生懸命やったんですけど、結構たかれましたね。要は命令がおきてこないと、我々は基本的には動けないわけなんですよ。「消防は何やっているんだ」というような言われ方をして、しまいには、「おまえらのせいで川が切れたんだ」みたいなことを。

救出活動にしろ、土のう*積みにしろ、基本的に本部の人間が、ああしてくれとか、こうしてくれとか指示するわけなんです。例えば、こっちから上のほうに「土のうはどうなっているんですか」と聞くと、「もう手配しているから」という返事がくる。でも全然来ないわけ。

そうするとやっぱり、住民が言うわけです、「いつになったら土のう積みをするんだ」と。だから、その教訓を生かして、今は年がら年中、決められた場所に、土にシートをかぶせて置かせてもらっているんです、いつでも詰められるような形にして。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



こんなにも多かった地域のお年寄り

長岡市 40代 男性

消防団では、今度、避難準備情報*が出たときに伝える仕組みづくりとして、お年寄り世帯を特定して、色分けをして、この世帯はお年寄りだけとか、昼間はうちの人が勤めに出ていて夜だけいるとかがわかるマップを作りました。

担当エリアは大体近所なので、どの家が昼間は年寄りだけなのかみんな把握していますが、色づけしてみると、ほとんど全部がそうなります。だから、今いる消防団員が11人で、大体最低で5人、6人は出てくるけれど、やっぱり自治会と連携していかなかったら、全部の家に声をかけて回るのは無理だと思います。

自治会のほうでも、援護が必要な方に声をかけるといった防災訓練を2年続けてやっていますが、自治会の班長さんだけが回ってそれでおわりなんです。班長さんだけだと、避難してくださいと言っても、ジューちゃん、バーちゃんは出てこないんですよ。やっぱり、民生委員*や消防団、班長さん、自治会長が一緒にやらないとだめだと思います。

*避難準備情報とは、避難に時間がかかる「災害時要援護者」（高齢者や障害者ら避難に時間のかかる人たち）のために、通常の避難勧告（避難行動を開始すべき段階）や避難指示（生命への危機が迫っている段階）に先だって発令し、いち早く安全な場所に逃げてもらうための情報です。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



土のう積みにも限界

ときには避難を優先することも

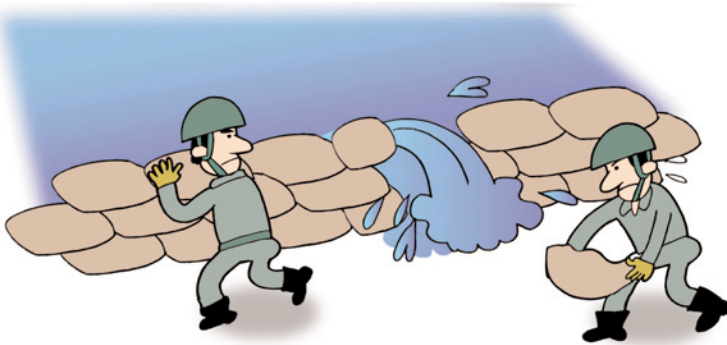
長岡市 40代 男性

気がついたら、堤防が切れた場所には消防団は誰一人いませんでした。みんな最初に川から水があふれた現場に集められていたからです。

ただ、実際、堤防のどこがこわれるかなんて誰も特定できなかったわけだし、その現場にいたとしても、消防団レベルでは、大層なことではできなかったと思います。土のう*積みも、ある程度意味があるものなのかもしれないけれど、究極になると全部流されちゃうから、やっぱり避難を優先させるべきなのじゃないかと思いました。

いずれにしても、地域の住民の皆さんの手伝いがなければ絶対にできないと思うし、出てきてもらうことによって、危ない状況が皆さんにも理解してもらえるとと思います。やっぱり、消防活動も地域と連携しながらやっていかないと、避難にしる、何をやってもうまくいかないだろうなと思います。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



レポーターはタクシードライバー

コミュニティFMが大活躍

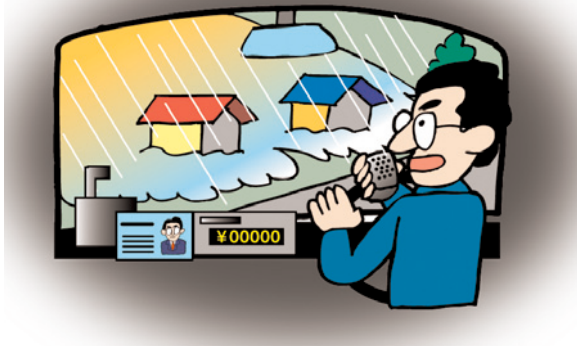
三条市 30代 男性

情報ボランティアってすごく大事ですよ。水害になるとテレビがだめなので、ラジオしか情報源がないんです。避難所情報で、どこに何があるとか、何時から何が配られるとか、そういう情報はやっぱりラジオがすごく役に立ちました。

地元のミニFM局は、水があふれ始めたときから延々と、24時間水害情報を流していました。ああいうことを体験できたのは良かったと思います。

タクシーの運転手が帰ってくると、「〇〇が冠水しているよ」と無線を通じてラジオ局に知らせるんです。そうするとFM放送で、「〇〇冠水で、通れません」と流す。そういうのを繰り返していたと運転手さんに聞きました。

ほかの民放局は、やっぱりそれなりのプログラムで、たまにスポット的に情報を流すぐらいですが、水害は範囲が限られているから、地元のFMが頼りです。



公民館のサークルは地域の先生

福岡市 70代 男性

10年前ですかね、小学校に新しい校長先生が来られたときに、「学校教育の中で先生たちに頼るのは限りがあるから、学校に地域の人を送ってこないか」という相談が、公民館にありました。

その時から始まって、例えば読み聞かせというのは週に2回、2人ぐらいで行っていますので、1年間でのべ約200名というものすごい数になります。

そうすると今度、人間って不思議なもので、講師役で呼ばれた人は、自分が役に立っているというか、自分の存在意義が感じられるものだからまたするんですね。そしてその人たちが仲間をさそって連れて来てくれる。

おかげで公民館のサークル活動も多様になって、より盛んになりました。

こういうふうには、地域のみんが顔のみえる関係になっていることが、今回の地震のときにもプラスになったと思います。



やる気引き出す4年間

任期を決めて地域の役員

福岡市 70代 男性

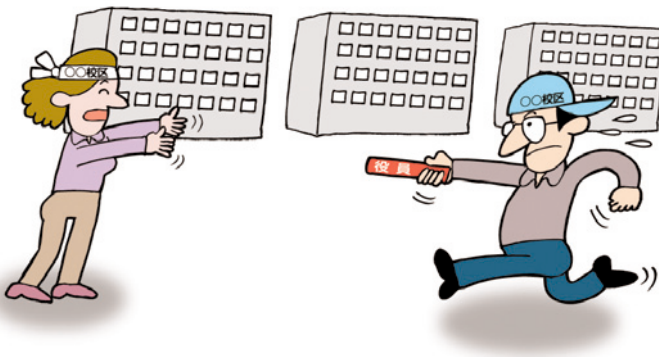
うちの小学校区は集合住宅がほとんどで、30年以上この校区に住んでおられる方というのは、1割もいません。

そういう状況でいろいろな地域活動をしてはいますが、校区の役員の任期は、2年2期までと規約に定め、ひとりの人が長く務めないようにしています。

2年2期だと短期集中みたいなところがありますね。4年しかないわけだから、その間に何をしようかと考える。自分自身のやりがいというものも持てるようだし、「何もなかった4年だった」というふうには思われたくないということで、そこら辺は違いますよ。

任期を終えた人がまた知り合いを紹介するという形になるので、そのたびに新しい人材が発掘されて、次につながって行くのです。地震はいつ起こるかわからないから、こういうことがすごく大事なんですよ。

新しく移り住んで来る方たちの中にも隠れた人材がいっぱいいるから、これからもっと掘り起こしをしなきゃいけないと思います。



働き盛りの男性を地域デビューさせるには？

福岡市 50代 男性

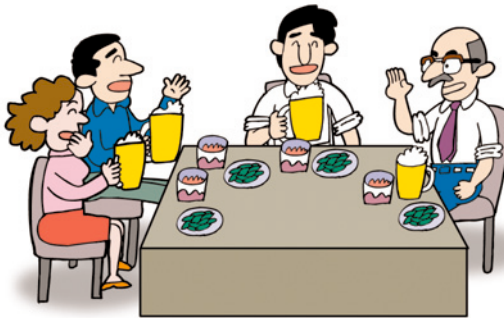
地域の活動に参加する40代、50代前半の男性というのは極めて少ないのです。その人たちをどう確保するかというと、やっぱり飲み会。今までの経験からいっても、やっぱりお酒の席が一番入りやすいんですよ。

新しい人を誘う時には、とにかく名前だけでも書いてもらって、「来られるときに来てください」、「来られないときにはすみませんが電話をください」と声をかけます。2回続けて返事もなければもう誘いません。

男性を地域の活動に誘い込むのはものすごく難しいです。一度出ても、二度目は来ないという人も結構いるわけです。40代、50代前半の男性が継続して参加するような雰囲気になると、すごくよくなるんじゃないかなと思います。

男性は平等に見ようとするけれども、女性だけにすると偏ってしまう。かといって、あまり男性が強すぎると軍隊みたいになってしまう。やっぱり女性、男性お互いに物が言える環境をつくっていくことが大事ですね。

今度の地震でも、日ごろのおつき合いがあったから、地域の復旧活動がうまくいったのではないかと思います。



うるさいと言われても鳴らすサイレン

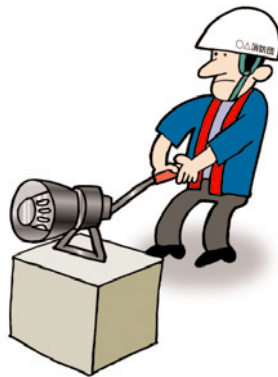
福岡市 40代 男性

今、各小学校区に消防団の車庫があって、そこにサイレンがついているんですけども、火災のときでもサイレンは鳴らさないようになってます。というのは、詳しい経緯はよくわかりませんが、おそらくうるさいとかいう苦情が入ったためだと思います。

昔は、水害とか地震とか一切関係なく鳴らしていました。

例えば、校区に火が発生した時には消防からの指令のボタン一つで、サイレンがブーンと鳴るという体制だったんです。けれども、今は直接消防団員全員に電話指令が入るようになったので、一般の方たちは、自分の校区で火事があったことさえわからない状況になっているんです。

このような住民の意識の低さが、今後の防災の妨げにならないければいいなというふうに思っていて、私らは今でもサイレンを鳴らしています。



ふだんからの声かけが災害時に生きる

三条市 80代 女性

自分は今、民生委員*をさせていただいているんですが、市のほうからいろいろな指示が来たときに、「いや、おら、そんなところ、嫌だから行かねえ」って言うお年寄りもいますよね。そうじゃなくて、「あんたの言うことだったら聞くから、おれも一緒に連れていってくれ」というような、信頼関係をつくっておくことが大切だと思います。

洪水で本当に水がどんどん追いかけてくる場合は、年寄りを置いて、自分が先に逃げるかもしれませんが、まず、地域のお年寄りの人たちに、安心して町内に住んでもらって、みんな助け合っているんだということをわかってもらえれば、「頼むね」「うん、任せてね」っていう、そういう信頼関係ができると思います。

普段からお宅を訪問して健康状態を聞いたり、心配事はないかとかいう話しをしておいて、自治会長さんとうまく連絡をとりあって、一緒に避難するという約束ごとをつくっておけば、みんな一緒に逃げられるって思いました。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



地区の防災体制は二重化対応

三条市 70代 男性

災害時に人をどう確保するかというのは、どこも皆さん苦労しておられると思うんです。うちの地区がすみずみまで情報を伝えるのに苦労しないのは、地区の班長さんにも、防災の準委員のようなことをやってもらうからです。

とにかく、「情報を伝えるのは、きびきびとやってもらいたい」という話は新しい班長さんに申し上げていますし、また退任する方にも、その事を必ず後任の人に引きつぐようにとお願いしています。

だから、実際には、うちの町は約10班あるんで、10人の班長が防災委員として活動することになります。電話を使うより、班長さんの家に直接行って伝えれば、すぐに伝達してもらえるので、ほんとうにうまくいっていると自負しています。

狭い地域で、いつ役がまわってくるのか大体の方はわかっていますので、「今度は私の番ですか」みたいなもので、「私は嫌です」なんていう方はおられませんね。



要援護者の枕元に手作りタンカ

三条市 80代 男性

昨年、援護が必要な方に参加してもらって避難訓練をやったんですが、寝たきりの方を両脇から抱えて、車のとこまで運んでいだけでもほんとうに大変でした。それで、車いすなんて家の中じゃうまくいかないから、タンカで表へ運ぼうということになって、一番大変な人のところへタンカを設置することになりました。

以前、県の防災訓練のときのタンカは、布がやわらかくて、こう、くぼむわけ。だからそこに寝た人は難儀で、もう、息が苦しくなるほどだったと。それではダメだということで、女性たちがみんなで集まって、張りのあるかたい布でタンカを作ろうということになりました。脇に伸縮するステンレス製の丈夫な物干し竿を入れてみたら、人が乗っても布があまり下がらないです。

今はみんなで作ったタンカを、「いつでも隣近所、民生委員*、それから災害委員が手伝いに来て、安全なところへ運びますから」って言って、順次、必要な方の枕元に置いてもらっていますが、大変喜ばれています。

* 民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



平成19年度「一日前プロジェクト」

エピソード集

津波の「つ」の字も知らなかった

徳島県海部郡 80代 男性

22歳のときです。私は外国航路の船員をしていたのですが、戦争中に会社の船がやられましてね。復員*してきたものの、乗る船がない。それで、この田舎で青年団活動なんかに参加していました。

当時、テレビはもちろん、娯楽が全然ないものですから、青年団が集まって村芝居をやっていましたね。地震が起こる前の晩も遅くまで練習をしていました。

血気盛りの青年ですから、真冬でも越中フンドシで夏のゆかた、これが寝間着の定番ですわ。で、午前4時ごろ、寝ている時にグラッときたんです。

後で調べてわかったことですが、この「南海トラフ」を震源とする地震は、必ず津波をともなっているんです。それに、今まで、だいたい100年周期でやってきている。その100年がすぐそこに来ているにもかかわらず、私はそのとき津波の「つ」の字も全く知らなかったんです。

*復員とは、招集された軍人が任務を解かれて家庭に帰ること。



おばあさんを背負って山の中腹へ

津波を見に行って、危機一髪

徳島県海部郡 80代 男性

ものすごく家が揺れてね。2階に寝よったから階段をはうようにしておりて、隣の空き地へ行ったのよ。で、一たん揺れがおさまってから、このままではいかん、こういう格好では何もできないと、服を着替えに2階へ上がっていった。そしたら、隣のおばあさんが「井戸の水が引いたぞー、津波が来るぞー」言うて、どなっとるんよ。

すぐに逃げなきゃいけないのに、その頃は全く津波や地震の知識がなくてね。津波が来る、こら面白いなということで、海に見える土手まで見に行ったんです。すると、水がドーっと上がってきた。これはいかんわと、あわてて家へ帰りました。

家では、84歳のおばあさんが寝ていたのですが、布団のそばまで津波の潮が来ていました。それからアツという間に部屋の畳が浮き出したんです。

水はもう腰ぐらい。私は、「おばあさんを死なせちゃならない」と背負って、藻やらが浮く水の中をかき分け、かき分け、150mぐらい先の山の中腹に住む知人宅へかつぎ込みました。気がつけば、浴衣1枚でしょう。寒うてねえ。枯れ枝を集めてきて、さあ火をつけよう思うて、マッチをなんぼすっても火がつかんのじゃ、手が震えて。



早く逃げれば良かった

徳島県海部郡 70代 女性

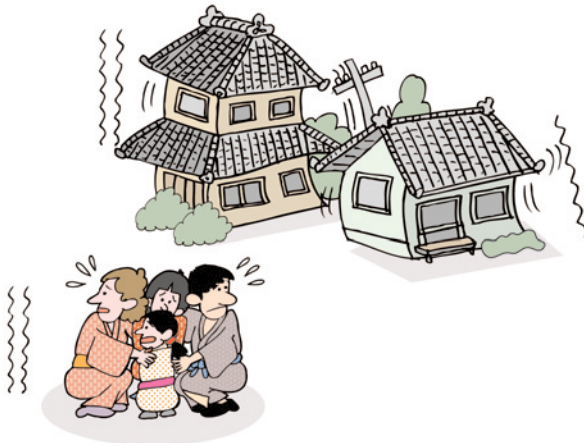
当時私は16歳。寝入りばな、体を揺さぶられたような気がして目が覚めました。横に姉が寝ていたから、起こそうかと思ったけれど、たいしたことないだろうと思ってね。

しばらくしたら、すごい揺れがはじまって、「家がつぶれたらたいへんだ」と父が言って、素足のまま、親子4人が外へ飛び出しました。

ものすごい揺れだったから、とても立っておれなくて、4人がお互い体を支えるようにして、道路の上へ座ったんです。外は真っ暗で何も見えませんが、家がギシギシ音をたて、「これ、止まるのかなあ」って思いました。

で、ようやく揺れがおさまった時、逃げればいいのに、寒いからと、またみんなで布団の中へ入ったんですよ。それから1、2分ぐらいでしょうか。男の人の声で、「津波が来るぞー」と2回聞こえたのです。父が「早く逃げなんだら、あかん」言うて、親子4人が家の玄関の戸をあけたときには、もう腰まで潮が来ていました。

今なら、布団にもどってしまうなんて考えられませんが、親も津波の経験がなかったからだと思います。



水の中をくるくる転がった

徳島県海部郡 70代 女性

大きな揺れのあと、家の中まで波が押し寄せてきたので、家族4人が、「早う、早う」と言いあって、逃げました。でも、横からも後ろからも来る波で足をとられ、なかなか歩けませんでした。

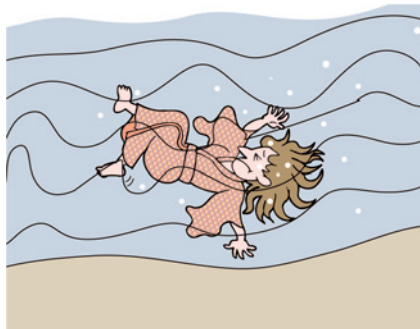
そうしているうちに、4人ともあつという間に大きな波にさらわれてしまったのです。私は、まるで洗濯機の中にいるように水の中をくるくる転がって、潮を何回も飲みました。

息苦しくて、どうにかして頭だけでも波の上へ出さなかったら、死んでしまう。私の命ももう終わりだと、そんなことばかり頭にありました。

それが、どうしたものか、頭を波の上へ出すことができたのです。「ああ、よかった、生きとる。これで息ができる」と思いました。

しばらくして、何か木のようなものが手にさわったので、それをパッとつかみました。足が地面についていないものだから、手が痛くてね。でも、これを放したら、またどっかへ流される。そうしたら今度は命がないと思って、必死でした。

少しあたりが明るくなってきて、一体どこまで流されたんだろうとあたりを見回すと、おどろいたことに、私は裏の家の入り口の敷居につかまっていたんです。



津波の第2波が来る前に逃げた

徳島県海部郡 70代 女性

津波で流されている間は、家族のことは頭に全然なかった。ちょっと薄情なぐらいに。自分が生きよう生きようという気持ちでいっぱいでしたね。

潮も引いて、足も立つようになって、「あ、そうだ、お父さんやお母さんたちはどこまで流されたんだろう」と思いました。「早う探しに行かないかなあ」と思っていた時に、私が敷居につかまっていたその家の中から話し声が聞こえてきたんです。

「だれかいるん、だれかおるーん？」と2回ほど聞いたら、「おるぞー」という声がしました。お父さんでした。お母さんも姉も中にいて、親子4人が、「命拾いしたなあ」と、肩を寄せて、もう泣くばかりに、喜びました。

だけど、津波って、2回、3回と来ると聞いていたので、「早う逃げないかん」言うて、母は足にケガをして血を流していましたが、姉と私が両方から支えて、みんなで裏山の方に逃げました。

途中、2人ほど、女の人が亡くなっていました。ハッとしました。でも、私はどうすることもできんしね。後ろ髪を引かれる思いで山のすそまで来ると、第2波の津波が押し寄せてきました。



人の心の温かさに感激

徳島県海部郡 70代 女性

津波も引いて、家のような様子を見に行ったら、下に置いてあるものは、ふとんも畳もみんな浮いていました。

でも、親子4人が無事だったから、それだけで有り難いと思いました。「家のことは、また何とかなるだろう」と父も言って。

家で炊事ができるようになるまで、1週間から10日ぐらいかかりましたね。いつまでも山の人たちにお世話になるわけにもいかんし、2階は水につからず、ふとんも置いてあったから、2階で寝起きすることになりました。

私が小さいころ、うちは小さな宿屋をしていたんですが、その時のお客さんが二人ほど、野菜とお米とお金も持ってきてくれました。10年ぐらい経って、それも戦後の品物がない時にね。

当時、それこそ貧乏暮らしで、津波でみんな流されて、ほんまに1円もなかったんですよ。どのぐらいのお金か私は知りませんが、涙が出るぐらいありがたかった。今でも思い出すと涙がでます。

私は、あの時のふとんを、記念に1枚、今でも家に置いてあるんですよ。



とにかく逃げるが勝ち

強欲な人みな流れ、欲を捨てた人逃げおおせたり

徳島県海部郡 80代 男性

津波の高さは、最高のときで、畳から上へ80cm。土間へ立ったら120cm、外へ出たら150cmぐらいありました。

とにかく、逃げるときは、ハダシでは絶対にだめなんです。それに、津波はすぐにやってきますからね。いつでもさっと履けるように、身近なところにハキモノを置いておかないかんです。

ヒモ靴は履くのに時間がかかるし、つかかけはすぐに外れるからね。普通のビーチサンダルみたいな、足の指でぎゅっとしめられるやつなら水の中でも脱げないからね。私はそれを使いました。

私はずっと、この地域の集落に関する記録を調べているんですが、安政南海地震（1854年）で、大津波が起きた時のようすが書かれている帳面（^{ひがしゆきとうやちよう}東由岐当屋帳*）を見つけたんです。そこには、「うろたえて、ナベ、カマを運ぶ者あり、役にも立たぬモノを持ち、大事な金銀を忘れて逃げる者もあり」と書いてありました。

その最後に、「この時 強欲な人みな流れ、欲を捨てた人逃げおおせたり」という文章があります。昔から、「津波が来たらとにかく逃げること」、「命が一番大事なんだ」と言われていたわけですよ。

*「^{ひがしゆきとうやちよう}東由岐当屋帳」とは、寛政元年(1789)以降の徳島県東由岐浦の祭礼を中心とし、地域の行事や異変などを詳しく記録したものです。お役人が書いたものでなく、すべて地域の住民によるもので、庶民の生活を知ることのできる貴重な史料となっています。



ドレッサーが3mも吹っ飛んだ

かっこう悪いと言われても、サイドボードにはガムテープ

東松島市 70代 女性

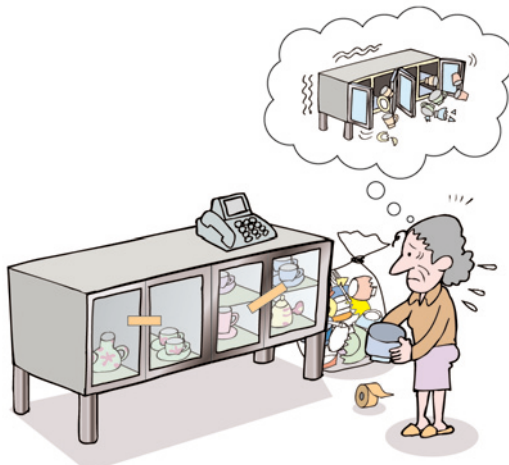
あの朝、「おばあさん、大変だから早く外に出て！」という孫の声がして起きてきたら、茶の間のサイドボードの扉が開いて、中の瀬戸物なんか全部飛び出していました。それから、壁のところに置いてあったドレッサーが、3mぐらいはなれたところに倒れていました。テレビはキャスターがついていて倒れなかったけれども、30cmぐらい前のほうに動いていました。とにかく普通の揺れじゃなかったんですよ。

やっぱり「観音開き*」はだめですね。地震の揺れでサイドボードの扉がバーンと開いて、しまってた茶わんやらグラスやらが落ちて割れてしまいました。

「地震のなごりだから、もう捨てたら？」と言われるけれど、2つ3つ残った半端な食器をなぜか惜しくて捨てられないんです。

で、今では扉が開かないようにガムテープを張っています。「おばあさん、みっともないからはがしてよ」って言うけれど、またいつ来るかわからないから。

*観音開きとは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



地震のおそろしさ体感

タオルや下着はいつもそばに置くようにしています

東松島市 70代 女性

実は、私は今まで、地震というのはそんなに怖いものではないと思っていました。世の中の話には聞いてはいたけど、実際にそういう体験をしたことがなかったものだから。

でも、「おばあさん、中にはだめだから、外に出て、外に出て」と、むりやり外に出されたとき、「ああ、竹やぶに逃げろというのはこういうときなんだ」と思いました。

地震・雷・火事・おやじと言うけれどね、地震というのは一番恐ろしいものになって、改めてそのとき思ったんです。

うちではね、日中は私1人なものだから、「おばあさん、地震が来たらすぐに外に出なさいよ」、「いざというときのために、すぐに持ってでられるものをまとめておかないといけないよ」と息子に言われます。そう言ってくれることが有り難いなって思って、タオルとか下着とかをひとつの袋に入れて、いつでもそばに置いています。



家の修理は保険で足りず

孫に借金申し訳なく

東松島市 70代 女性

建てかえはしなかったから、莫大な費用がかかったとは言えませんが、家の補修にだいぶお金がかかりました。「うちがつぶれるときは、世の中みんなつぶれる」なんて、うちの旦那も言っていたぐらい、頑強な平屋の建物だったので、建物そのものはだいじょうぶでしたが、土壁だったので壁が落ちてしまいました。それから、あれだけの揺れでもかわらはほとんど落ちませんでした。鬼がわら*が落ちこち、屋根も曲がりました。

まだ壁にヒビが入ったままのところも残っていて、全部直したわけではありませんが、地震保険で下りたお金やお見舞い金などでは足りず、お金を借りました。

私も歳ですし、息子だってもう60近くて融資を受けるのが難しかったので、孫の名義で融資をしてもらいました。だから、その後で孫がお嫁さんしてもらいましたが、今は農家の長男でもみんな別居するのに、うちでは孫の名義でお金を借りているからそれもできないんです。で、孫に「お兄ちゃん、ごめんな」って私がいったら、「いいよ、おれはどこにも行かないから」って言うてくれました。ほんとうに申し訳ない気持ちでいっぱいなんです。

*鬼がわらとは、屋根の棟の両端におく大きなかわらのこと。多くは鬼の面をかたどり、魔よけとしています。



おっかねがった

二階の座敷も下に落ちた

東松島市 80代 女性

おっかねがったね（怖かったね）、ほんとうに。夜中の地震のときは、座敷に置いてあったタンスが2つひっくり返りました。それから4段になっている戸棚の戸が外れて中のものが落ちました。男手がないのを心配して来てくれたおいっ子が、かたづけを手伝って帰っていったのが午前4時半ごろでした。私は、「まだ早いから、少し寝るか」って、寝たんです。

朝いつもどおりに起きてご飯の支度が終わって、「お母さん、起きたらどう」と言っていたら、もっと強い地震が来たんです。母が起きた途端に、ベッドの上に、タンスが両側から倒れこみました。知らずに寝ていたら、つぶされて亡くなっていたかもしれません。

とにかくものすごい揺れで、茶の間のガラス戸や網戸が全部外れて吹っ飛び、道に散乱しました。網戸が玄関わきの柱にぶつかってひっくり返ったせいか、網戸の真ん中を柱がつきささっている異様な写真が残っています。

結局、二階の座敷も下に落ちたし、部屋の中もめちゃくちゃになってしまって、家を建て直さなければなりませんでした。

たんぼを埋め立てたところに建っていたから、よけい揺れたんだらうと思います。



あの世の人もこわかったろう

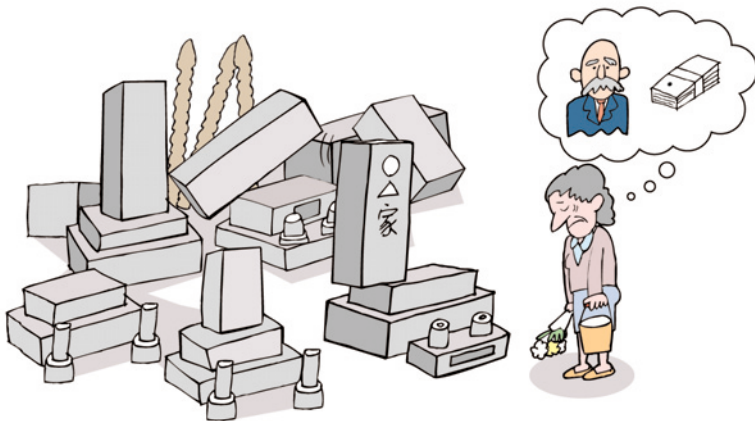
お墓の修理に70万円

東松島市 70代 女性

地震の後、すぐにお墓に行ってみたけど、大変なありさまでした。ほとんどのお墓が倒れていて、あの世の人もさぞ怖かっただろうなと思いました。

うちのお墓は、さいわいひっくり返らなかったんですよ。きっと、ご先祖さまが頑張ってくれたんだらうなって思っています。

でも、お墓の修理が70万円！ちょっとズレただけだから30万円もあれば足りるだろうと思っていましたが、基礎から直さないといけないということで、予想以上のお金がかかってしまいました。こればかりは、「高いからやめときます」とも言えませんからね。予期しないところにお金がかかって大変でした。



やっぱりみんな倒れてしまった

物が散乱して前に進めず

石巻市 50代 男性

「ガ、ガ、ガ」ときて目がさめて、「ああ、これがいわゆる宮城沖地震なのかな」って、立ちながら感じていました。

部屋が2階に4部屋ほどあって、私は道路側の階段から一番遠い部屋で寝ていました。そのとき女房はもう朝起きていて、1階で朝ご飯のしたくをしていましたので、無事かどうか確かめに行こうと思いました。

ようやくフスマをあけて部屋から脱出しましたが、家の中のありとあらゆるものが倒れたり、落ちたりしていて、足の踏み場もないくらいでしたので、なかなか前に進めないのです。

で、2階から下の茶の間に行くまでに、10分はかかりました。

ちゃんと地震が来るとわかっていたら、いろいろなものを留めていたと思うんですけども、それをやっていなかったものだから、やっぱりみんな倒れてしまったわけです。

ただ、茶の間の大きな食器棚だけは、L字金具を買ってきて何カ所か留めていたので、倒れませんでした。やってよかったなと思いました。



梅酒、マムシ酒も上からガシャン

重いものは高いところにおかないようにしました

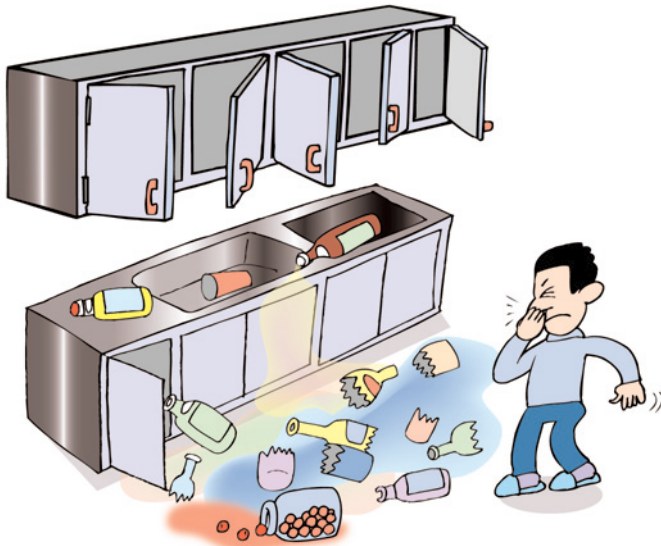
石巻市 50代 男性

テレビも吹っ飛ぶぐらいの揺れだったから、台所の冷蔵庫も流しに倒れかかって、中のものがどんと出ていました。

それから、流し台の上で上げていた梅酒とかマムシ酒とかが入ったガラスの容器も全部落ちて、床一面が水浸しになりました。

とにかくどこから手をつけていいのかわからないほどの状況でしたが、一番困ったのが「におい」です。お酒やら食べ物やらいろんなものが混じったにおいは、口であらわせないくらいすごくて、息をするのもやっとでした。

せっかく作ったお酒がなくなってしまったのはちょっと残念でしたが、家族がケガをしなかったので、ホッと胸をなでおろしました。あれからはもう、重たいものを上に置くことはやめました。



大型テレビが3回飛んだ

石巻市 50代 男性 電器店主

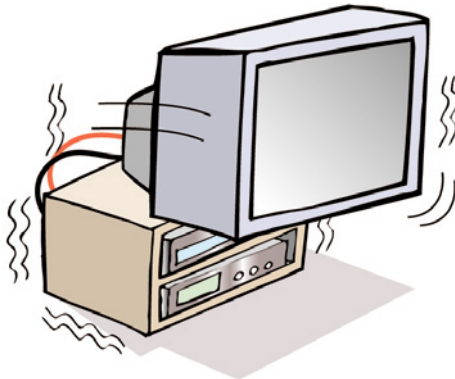
床よりも畳の上に置いてあるほうが壊れないんですよ、テレビのブラウン管って。当たり前ですが、衝撃が少ないですからね。

うちが販売しているテレビには、テレビ台とつなぐ留め具がちゃんとついているんです。その留め具を使って留めてさえいれば飛ばないんですよ。それをしなかったところは飛んじゃっている。

で、夜中の12時に飛んで、朝の7時に飛んで、夕方の5時に飛んだ。つまり、地震が起こるたびに3回テレビが飛んだお宅がありました。それも「36インチの大型テレビ」です。

ブラウン管のテレビって、悪いことに前のほうに重心があるんですよ。だから、ちょっとすると前にすぐ倒れてしまうんです。最近はブラウン管を使わない薄型のテレビが多くなっているから、ちゃんと留めておけば、倒れる心配はないと思います。

台所の電子レンジとか、電気がまとか、トースターとか、訪問したお宅ではいろいろなものが飛んでいました。やっぱり安全な場所に片づけたり、落ちないように留めておくことが大事だなと、つくづく思いました。



孫を助けなきゃと無我夢中

石巻市 60代 女性

朝ご飯を食べ終わって、片づけているときに地震が起きました。やっぱり、「観音開き*」というのはだめですね。台所の戸棚があいてものが飛び出し、何かが肩のあたりにぶつかりました。夢中ですぐにはわからなかったけれど、すり鉢でした。

娘の仕事があるときは、孫2人をうちでみているんです。その日も孫たちが奥の座敷で寝ていましたから、とにかく孫を助け出さなければと、無我夢中で孫のところへ行こうとしました。でも、ものすごい揺れで、自分が飛ばされちゃって満足に歩けないんです。

孫の名前を呼びながらたどりつくと、ドアの前に大きな米の袋がひっくり返っていました。「ああ、どうしよう」と思ったけど、そんなときはバカ力が出るんですね。その米をよけてなんとかドアをあけたら、「おばあちゃん！」って小さい孫が。「ああ、生きていたんだ」と思いました。

部屋のテレビも飛んでいだけれど、孫たちは無事でした。大きい孫はあの地震でも目を覚まさなかったようです。小さい孫が「お兄ちゃん、お兄ちゃん、地震だよ」って、お兄ちゃんの上に乗かって起こしたと言うんだけど、ほんとうはそうじゃなくて、地震でお兄ちゃんの上に自分が飛ばされていたんだと思います。

*観音開きとは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



お風呂で体験、大地震

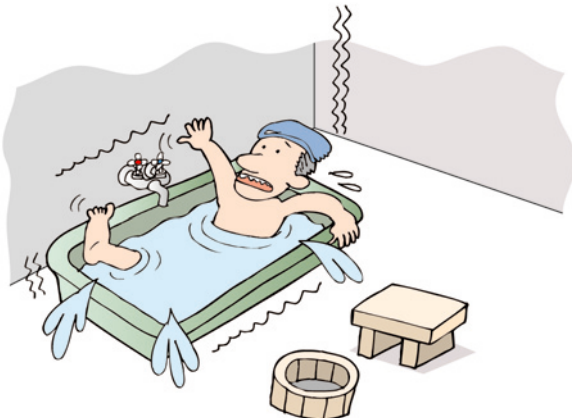
石巻市 70代 男性

まず、夜の0時13分に最初の地震が来ました。その時、私はお風呂に入っていたんです、いい気分です。そこへ突然地震が来たわけ。「何だ、何だ、何だ」って、全然わからないけど、お風呂に入ったまま揺れて、そのうち浴槽の管（くだ）がスポッとはずれて、風呂の水がヒューっとなくなってしまったんです。

で、仕方がないから風呂から上がって、「いや、いや、大した揺れだな」ぐらいの気持ちで、体をふきながら部屋にもどると、仏壇が吹っ飛んでいて、香炉も花も、何から何まで全部、6畳間いっぱい散らばっていました。

そして、香炉がなぜかくるくる、くるくるコマのように回っていたんです。うちの香炉はとびきり大きくて、車がついていたからだと思いますが、その年はちょうど女房の13回忌に当たっていて、きっと女房もびっくりしたんだろうと思いました。

私も、お風呂の中で地震にあったのは初めてで、あわてましたね。いつどこで出くわすかわからないから、下着とかをちゃんとそばに置いておかなければいけないと思います。



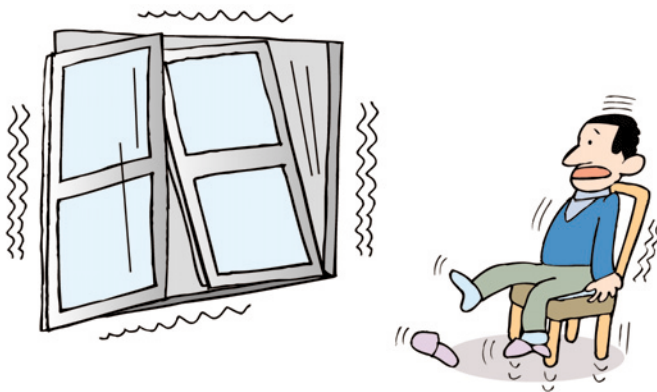
家がゆがんで、サッシ戸飛び出す

石巻市 70代 男性

朝の7時15分ぐらいに、2度目の地震が来たんです。イスに腰掛けていたら、からだがボン、ボン、ボンとはずみました。上にはずんだ感じでした。

みると、うちの雨戸がわりのガラス戸が、10cmか15cmぐらいバツ、バツとあいたかと思うと、あらら、あらら、といううちに、バシャ、バシャ、バシャという音がして、ガラス戸がはずれて外側に倒れました。

それらの戸は、木の枠ではなく、サッシの枠でした。家がゆがんでサッシの戸が外に飛び出すなんて、信じてもらえないかもしれませんが、ほんとうのことなんです。



水が使えず、お皿にラップ

石巻市 70代 男性

私のうちは地震後92時間、3日半ぐらい水が出なかったのね。トイレはすぐ近くの病院ですませました。病院は自家発電で大丈夫だったから。

水がなくて一番困るのは、何でも洗うことができないということなんですよね。で、アウトドアでやったのを思い出して、ご飯を食べるときもコーヒーを飲むときもラップを敷いて使いました。

友達が多いものだから、食べる物がないだろうからって、豚の角煮だのいろいろと持ってきてくれるのです。ああいうのって油っぽいから、洗うのは大変ですよ。けれど、ラップを敷くやり方だと、汚れたらラップさえ取り替えればいいわけです。水が出るまでの間、ずっとそうやっていました。



「倒れたらあぶないな」と家具固定

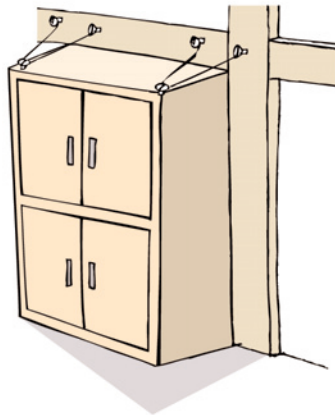
前の地震が教訓に

石巻市 50代 女性

地震があったときには、私とおばあさんは台所で朝ご飯の用意をしていました。主人と娘は座敷のほうで、お布団でまだ寝ていた状態だったんですけれども、急に、ガ、ガ、ガーっと来たものですから、私は柱にしがみついて、お父さんと娘の名前を叫び続けていただけでした。動こうにも動けなかったのです。

母のほうは、とっさにやかんを火にかけていたので、火をとめなきゃと思ったらしくて、流しのほうに行ったとたんに飛ばされて、台所のレンジのところに腰をぶつけていたんです。「大丈夫？」って聞いたら、「大丈夫」って言ったけれど起きあがれないような感じでした。

食器戸棚とかがいっぱいあるんだけれども、5月に大きい地震があったときに、これが倒れたら危ないなと思って、ヒートン（ネジ）を戸棚につけて、壁の柱みたいになっているところに、全部たこ糸でくっつけていたんです。たったそれだけなんですけれども、倒れなくてすみました。やっついてほんとうに良かったなと思います。



非常食はバースデーケーキ

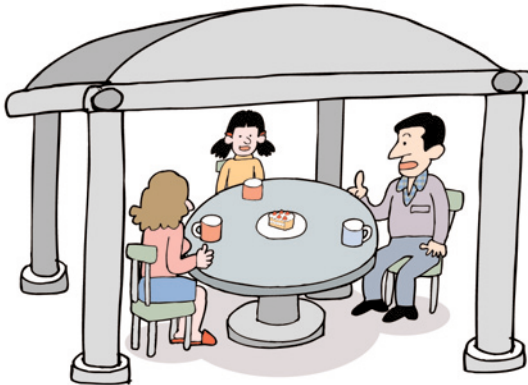
石巻市 50代 女性

食器棚は観音開きでなく、引き戸だったけれど、中の食器がガチャガチャ動いて、引き戸のガラスをやぶって下に落ち、床一面に割れた瀬戸物やガラスが飛び散りました。で、とにかくスリッパをさがして、それをはいて娘の無事を確認しに行きました。

壁にもヒビが入っていたし、頻繁に余震が来るので、怖くてとても中にいられる状況ではありませんでした。家族で外の頑丈な車庫に身をよせていると、とつぜん家の壁がドスンと落ちてきたんです。どうしてだかよくわからないんですけど。

地震が起きた日は、ちょうど私の誕生日でした。その前の前の日が娘の誕生日だったので、前の日の夜に、ふたりの誕生日のお祝いを一緒にということで、ケーキを食べ、残った半分を冷蔵庫に入れておいたのです。

お昼に食べるものが何もなかったので、残ったケーキをみんなで分け合って食べました。冷蔵庫だけは突っ張り棒をしていたお陰で倒れなかったから、それができたのです。



いきなりドーンと来た

直下型だと何もできない

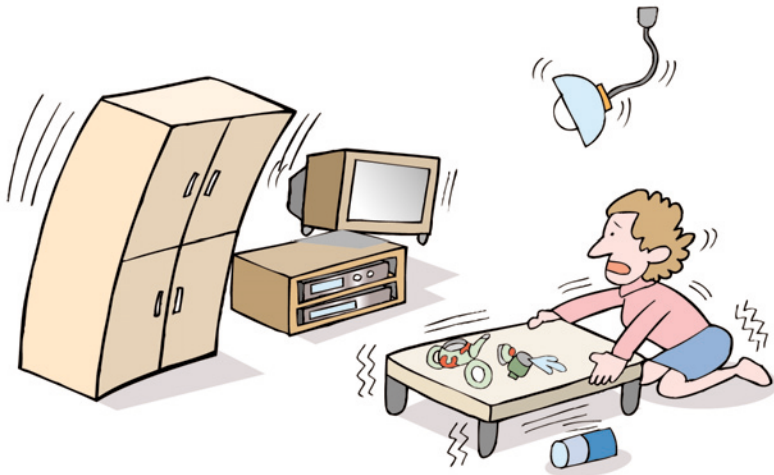
東松島市 70代 女性

あの地震は直下型でしたから、お茶を飲んでいたら、思いっきり下からドーンと、一気にきましたね。

もし、緊急地震速報が流れたとしても、心の準備をしてなければ、何かの下にもぐるといのは、ちょっと大変じゃなかったかなと私は思います。ただただ、そばのものにしがみついて、放り出されないようにしているしかなかったから。

そのときは茶の間にいたからよかったですのですが、部屋に行ってみると、私のベッドの上には、扉が開いたままのタンスが、両側から倒れていました。もし寝ていたらと思うとゾッとします。

結局、家を建て替えることになったのですが、今度は家具を全部留めました。仏間の花ビンも木のワクを作って倒れないようにしました。



油断大敵！

屋根うらのボルトのゆるみも確認を

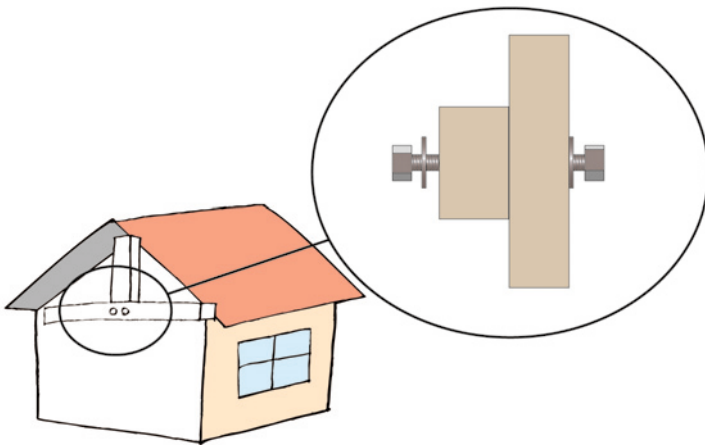
東松島市 50代 男性

地震の後、ある住宅メーカーが無料診断をしてくれるというので、建築士の人に屋根裏に入って見てもらったんです。うちの家は平成3年につくったものですが、撮ってくれた写真を見ると、ボルトなどの金具がみんな緩んでいたんです。

木造だと、乾燥して木がだんだんやせてきて、やせてもボルトはそのままだから、何もなくても若干は緩むということは知っていましたが、うちの場合は、地震の影響でナットなんかはかなり緩んでいたのので、耐震補強をしてもらいました。

ふつうの人は、ふだん屋根裏までは見ませんからね。「この前、あのくらいの地震がきてもつぶれなかったから、今度も大丈夫」なんて思っていると危ないということなんですよ。

もう今すでに緩んでいるとしたら、今度同じような地震がくれば、つぶれるくらいになるわけですから、点検や補強をしておくというのは、ほんとうに大事だと思います。起きてしまっただけでは取り返しがつきませんからね。



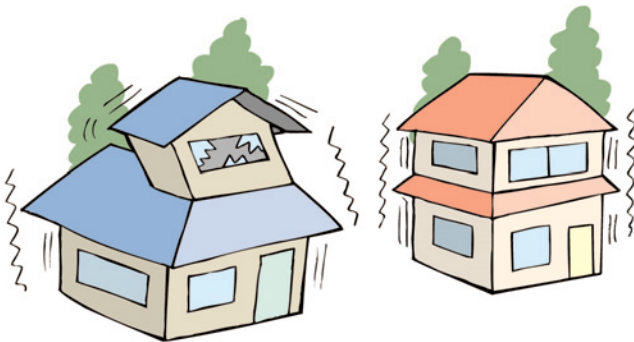
建物はバランスが大事

東松島市 30代 男性

わたしは建築士ですが、建物はやっぱりバランスが大事なんです。うちも建てかえる前は離れのあるL字型の構造をしていたので、離れにつながる部分が一番被害がひどかったんです。

柱が細くてもバランスがよければ結構大丈夫なんです。長方形や正方形の総2階はよくて、平屋にちょこっと2階がついていたりしているのはぐあいが悪いわけです。つまり、1階の重心と2階の重心がずれると、それぞれ別の動きをしてしまうからです。

でも、悪いと知りながら、我が家も建てかえのときに玄関のところに吹き抜けにしちゃったんです。「お客さんが入ってきたときに開放感があるほうがいい」なんて、結局は見栄えの方を優先してしまいました。



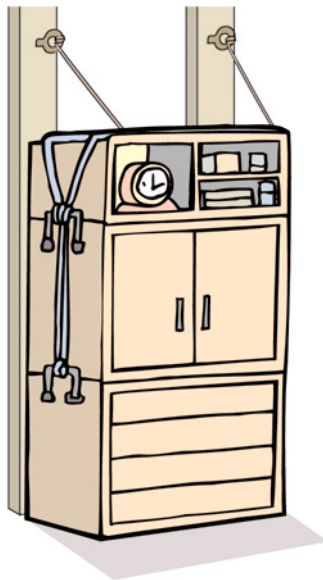
寝室の蛍光灯にもご注意を

東松島市 60代 男性

地震が落ちついてから2階に行ってみました。2階は寝室にしている、ふだんベッドに寝ているんですが、蛍光灯が天井から下がってブラブラ揺れていました。たぶんひどい揺れで取りつけていたビスが抜けてしまったんですね。

それから、家内のベッドのほうに和ダンスがあって、上に飾りダンスを置いていたんですが、それがどう落ちたものか、まるでベッドの真ん中にそのまま置いたようになっていました。

もしも寝ていたら、頭を打つか、ただでは済まなかったろうと思います。地震の威力にはほんとうにびっくりしました。今ではそのダンスをロープでガッチリ押さえています。



家具の整理で被害少なく

東松島市 60代 女性

2回目の地震は、「ドン」という音で始まりましたね。玄関前にとめてあった車が、瞬間ですけれど、ボンと上に上がって落ちたように見えました。

心配になって、隣のひとり暮らしのおばあちゃんのところに行ってみたら、お子さんたちがようすを見に来ていました。幸いなことに、うちはあまり壊れたものもなくて、よその家庭よりは被害が少なくてすみしました。

リフォームで作りつけにしたため、家具が減ったんですね。寝ているところには家具はいっさい置いていませんでした。家具は固定していなかったのですが、不思議と倒れませんでした。場所や向きがよかったのかもしれませんがね。でも、それからはすべての家具を固定して、両開きの家具はハンカチで結んで、開かないようにしています。

ちょうどあの年にリフォームしたばかりだったんですね。もし、そのリフォーム前だったら、当然ひどい目にあっていたと思います。



家具は倒れず

役立った転倒防止グッズ

東松島市 70代 女性

ご飯をよそって出して、みそ汁を持ってこようと思って立ち上がったときに「ドン」と来たんですね。アッと思って、とっさに私は食器棚を押さえ、お父さんがあちから、テレビを押さえました。

食器棚は、観音扉*を少し太めのゴムでとめていました。そのゴムが伸びて、中のものが少し飛び出しましたが、たいしたことはありませんでした。

それから、今度は仏壇の花が心配になって走っていったのですが、ふっと庭を見ると、道路に面したうちの岩塀が倒れていました。

たんすとか本棚とかは全部、前々からゴムみたいな転倒防止用のやつを買って、下に入れてあったんです。だからぜんぜん倒れなくて、助かりました。

*観音扉とは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



やっぱりやっておけば良かったな

転倒防止した家具だけは倒れず

東松島市 60代 女性

地震でびっくりして飛び起きて、とにかくケガをさせないようにしなきゃと思い、孫を抱きかかえて、わきによけたすぐ後に天井の蛍光灯が落ちてきたの。まさに間一髪。

で、寝室から居間のほうに行こうと思って、ドアをあけようとしたら開かなくて、何で開かないのかと思って、それこそ思いつき押ししたら、台所のものが全部倒れていて、それで開かなかったんですよ。

やっとその上をこえて居間に行ったら、2段重ねの和ダンスの上だけ、2段目がテーブルを越えて、2mぐらい吹っ飛んでいました。もうテレビは倒れる、人形ケースは割れる、本棚は倒れるで、足の踏み場もないほどでした。

転倒防止器具をつけていた家具だけは倒れなかったの、やっぱり全部にやっておけば良かったなと思いました。



家の中でも靴がなければ動けない

東松島市 50代 女性

4階建てのアパートの1階に住んでいますが、とにかく、その瞬間というのは、動くことができませんでした。もうア然として、例えば火のもとを消しにいったりすることなどできない状況でした。

アパートの方たちは、みんなすぐには外に出ませんでしたね。ちょっと揺れがおさまってから外に出たような感じでした。すぐ外に出ると、飛んでくるものがあるんじゃないかって思っていたみたいです。

揺れがだいぶ落ちついてから、あと片づけのために家の中に戻りましたが、悲惨な状況でした。割れた食器などが散乱していて、危険な感じでした。

地震のときは、家の中でも靴をはいて動かないと危ないっていうことを、初めて体感しましたね。



天井が回って見えたよ

大工さんのお陰で命びろい

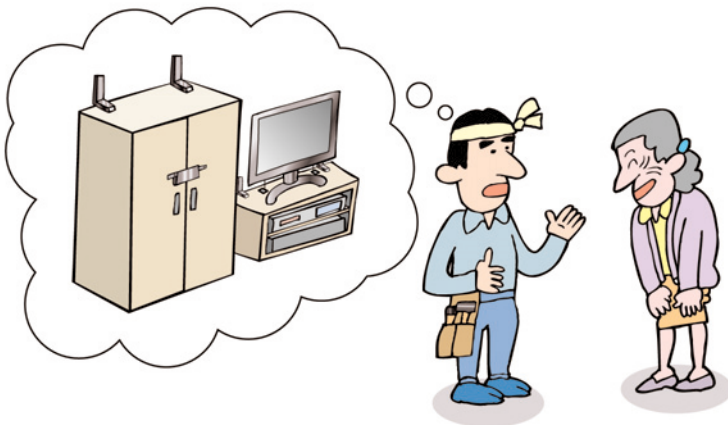
東松島市 70代 女性

朝7時20分ごろだったね。息子に「地震だ！母ちゃん、早く逃げろ」と言われたけれども、逃げられなかった。はおうとしてもはえなかったの、揺れて。

とにかく戸を開けなくてはと思ったけど、天井がぐるぐると回るんですよ。手も動かせないし、歩こうにも歩けないんだから、ほんとうに大した地震だなと思いましたね。

でも、うちでは棚も何も倒れなかったんです。テレビも落ちないし、仏さまの花瓶が落ちただけ。茶ダンスも倒れなかったから、台所のコップが3つぐらい割れただけですんだのです。

どうしてかと言うと、ダンスとかテレビとかが留めてあったんですよ。家の裏に納戸を作ってもらったとき、大工さんから「留めておいたからね」って言われました。頼んだわけでもないのに、固定してくれていたんです。本当に助かりました。



岩墜くずれて道路にごろごろ

石巻市 70代 男性

自分の家の片づけをして、よそのうちはどうなっているかなあと出てみると、うちの周りは大変なことになっていました。長さが120mほどあるブロック塀が、ガラガラくずれて、そのうちの80mぐらいが倒れていました。でも、とても自分ひとりで片づけられるものではないと判断し、あとで業者に頼むことにしました。

うちのところは通学路になっているから、やばいわけですよね。隣の家はと見ると、岩墜がくずれて、道路にボン、ボン石が飛んでいたんです。

こちら辺は石の産地だから、りっぱな岩墜が多いんです。岩を積んでいるだけだから、地震でゴロゴロと崩れてしまったわけです。かなりの量でしたが、知人と2人で一生懸命岩の運び出しをしました。

地震が起きたのが早朝で人どおりの少ない時間だったから良かったと思います。子どもたちが歩いているときだったらと思うとゾッとしますね。



ゴミの処分に長蛇の列

石巻市 70代 男性

私は、日ごろから「助けに来てくれと言われれば何でもする」地域のオタスケマンという看板を背負っていますから、地震のときもたくさん依頼がきました。私の管轄は新興住宅100戸で、一番依頼が多かったのはゴミの片づけです。

で、ゴミの最終処分場に車で荷物を積んでいったら、おれは50番目ぐらいだったのね。そして、あまり待たせるから事務所へ行ってみたら、初めての人ばかりだし、小さな字が見えない人もいるから手間取って、うんと並んでしまっているわけです。

そこで、私は、「受付番号と荷物の重さだけを記録しておいて、金物、ガラス、家具、電化製品というように分ければ、ゴミじゃなくなる。業者を呼んで片っ端から売ったらいい」とアドバイスしたのです。

そうしたら、すぐに現場に机をもってきて、その場で処理をするようになったので、それからは作業がはかどり、どんどん進むようになりました。



全戸に配った手作りの「井戸マップ」

石巻市 40代 男性

あの地震は、たまたま局地的だったから良かったんですけども、あれが広範囲だったら大変ですよ。被害がこの辺だけだったので、ちょっと車で5分、10分走れば、何でも買ってこられたんですよ。もし宮城県沖地震なんかが来れば、宮城県全体がある程度被害を受けるから、大変なことになると思いますね。

何と言っても、最後は水がないのが一番困るんですよ。それで、私たちの防災会では、井戸がどこにあるのかが一目でわかるマップを作って、町内267戸全戸に配布したのです。ラミネート*をかぶせて長持ちするようにして。

ここで肝心なのは、「もしもの場合は、どなた様も来て下さいね」と言ってくれている家だけを地図に載せているところです。それがイヤだという人のところは、井戸がないことになっているわけで、ちゃんと了解をとっているんですよ。

自分は建築事務所をやっているから、製図用のコンピュータソフトを使って地図づくりを手伝いました。少しは役に立たたかなと思います。

*ラミネートとは、ラミネートフィルムという透明なシートのこと。



野球ボールを使ってブルーシートをかけました

苦労きっかけに防災班

石巻市 70代 男性

地震の翌日もずっと雨が降っていたもので、屋根にブルーシートをかけなくてはならなかったのですが、いかにもタダでやってくれるような恰好をして、えらいお金をとる人もいました。

そこで、私たちはビニール袋に入れた野球のボールに釣り糸をつけて、屋根の向こう側に投げるやり方を考えたわけです。その釣り糸をブルーシートの穴に通しておけば、向こう側から糸を引っ張ると、シートがシュツ、シュツ、とあがっていくわけです。

それから、私は少年野球のコーチを長年やっているのですが、総2階の家なんかは、ノックバットを使って、キャッチャーフライの要領でボールをポンと上にあげるんです。これはちょっと技術が必要ですけどね。

とにかくブルーシートをかけるのにうんと苦労したから、地域の防災班をいち早くつくろうと思ったんです。1人は1人のことしかできないということで、大体4戸で1班。こっち側とあっち側で最低限4人いればブルーシートはかけられますからね。雨の中、屋根の上にあがって危ない目にあうことはないですよ。



うちの両親どこですか？

避難先はビニールハウスだった

東松島市 70代 男性

公民館がまっ先にガケ崩れでつぶれてしまったから、避難できるところがなかったんです。みんな、めいめいに、どこということではなく避難したという感じでした。

で、翌日になって、地域の役をやっている私のところに、「行政に連絡したけれど連絡がつかない」という電話が入りました。それは東京で暮らしている息子さんからで、「お父さん、お母さんと連絡がつかないので、心配で夜も寝られない」という話でした。

すぐにみんなであちこち聞いてまわったのですが、どこにいるのかさっぱりわからず、だいふたってから、苗をつくったビニールハウスの中で生活していたご夫婦を発見しました。

ビニールハウスの中に、わらが積まれていたため人影も見えず、気がつくまでかれこれ3日ぐらいかかってしまったのです。やっぱり、もしものときの避難場所について、近所同士、ふだんから話し合っておく必要があるなと思いました。



命がけで屋根にかけたブルーシート

東松島市 50代 男性

かわらが一番だめだったね。みんな上からずっこけてきて、軒先に束になってたまっちゃって、いつ落ちてきてもおかしくないような状況でした。

当時のかわら屋根は、下のほうだけクギを打って、あとはただ重ねていだけだったからね。今は、1枚ずつクギでとめているから揺れても落ちなくなっています。

で、とにかくかわら屋さんがいなくて困りました。被害はだいたいこの近辺に限られているんですけど、どこに電話しても全然いなくて、県外にも連絡したりしました。

結局、雨が漏らないようにするには、とりあえずブルーシートで囲うしかないということで、うちは建設業なものだから、「屋根に上がってシートをかぶせてくれ」という電話がしょっちゅうきました。

かわら屋根は勾配がキツイし、雨が降って濡れている状況ではなおさら、われわれ専門家だって大変なんですよ。でも、お客さんから言われると断れなくてね。

ブルーシートをかけている間も余震がきて、すごくこわかったです。



身にしみたご近所のありがたさ

東松島市 70代 男性

私のうちは3階建てで、2階と3階が住まい、1階が工場です。夜中の地震で、観音開き*の戸棚から瀬戸物が全部出てしまって、それを片づけてやれやれといったところで、2回目の地震がきました。

その2回目の地震は揺れがいつそうひどくて、家の中は手がつけられない状態になりました。1階の玄関の引き戸も鍵がかかったまま、ひしゃげてしまってすぐにはあかなくなってしまったのです。

当時、私は腰を痛めていて、寝たり起きたりしていたんですよ。で、それを知っていた近所の人たちがやってきて、全部片づけてくれました。娘がいた3階は特に揺れがひどくて、ほんとうに大変な状況でしたが、近所の人たちが手伝ってくれて、ほんとうに有り難かったです。

*観音開きとは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



お年寄りの寝ている場所までわかります

いざというときの決まりもつくる

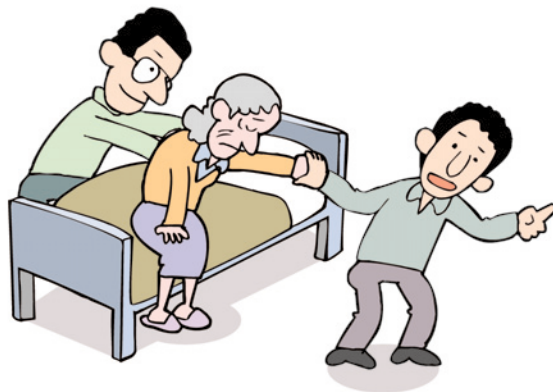
東松島市 60代 女性

淡路の旧北淡町、あそこが震災のときにすぐに町中の安否確認ができたということが、いつも頭から離れないのです。すばらしいことだなと。

あの当時、ここのおうちのおばあちゃんは何の部屋に寝ているとか、この人はこの辺に寝ているとかって全部わかっていて、そこを目がけて捜したから、すぐに助け出すことができたというのをテレビで見ました。

で、地震のあった年に立ち上げた私たちの自主防災会でも、ひとり暮らしのおばあさんがだいたいどの辺に寝ているかということを、役員さんは本人から聞いて把握しています。今はプライバシーの問題があるから、みんなには公表していませんけれどね。

それに、災害直後に役員さんが見回りをした時に鍵がかかっている場合には、とにかく助けなくちゃならないからということで、ガラスは壊しちゃってもいいということになっています。



地震直後の避難は危険がいっぱい

間一髪ヘルメットで命びろい

東松島市 30代 男性

今回の地震でも家の裏のガケが崩れたりして大変でしたが、私は小学5年生のころに、昭和53年（1978年）の宮城県沖地震を体験しているんです。

あのときは、大きな地震が起きて、先生がとにかく早く家に帰れというので、友達数人と一緒に自転車で下校したわけですが、途中の山道で、上の方から小石がパラパラと落ちてきて、かぶっていたヘルメットにあたったのです。

で、直感的に危ないと思って、ありったけの力で自転車をこいでその場を通り過ぎました。後ろを振り返ると、くずれてきた土砂で道がふさがっていました。まさに間一髪でした。

先生が、「早く帰るように言って悪かったな」って言っていたのを今でも覚えています。



中学生の「防災学」

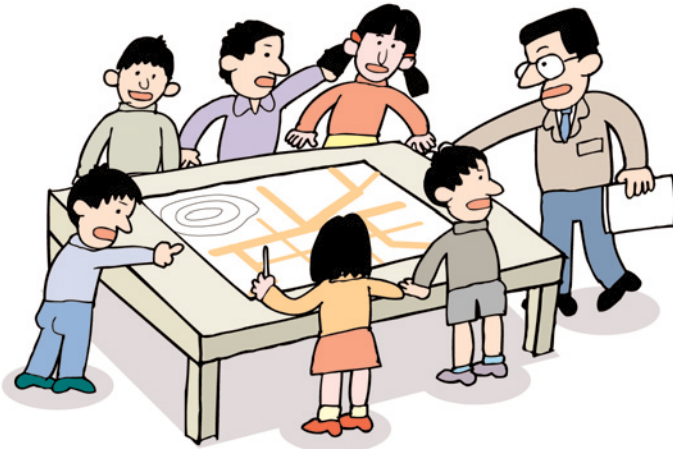
宮城県 30代 男性 役場職員

地震の被害があった後、耐震診断の授業を受けた子どもたちが先生となって地域で講習会をやったんです。参加するおじいちゃん、おばあちゃん世代の人も、孫世代から言われると身にしみるのか、耐震の大切さを実感されたようです。

地場産品を販売する産業祭の中でも、中学生の子供たちが一つのテントを持って、模型やパネルを置いて、お客さんたちに耐震の大切さというのを一生懸命アピールしていました。

これをきっかけに、地元の中学校で「松島防災学」が始まりました。図上訓練をやってみたところ、いろんな意見が出て時間が足りませんでした。来年は図上訓練だけを、半日ぐらいかけてやろうかなと思っています。

これから大人になる中学生たちに防災の正しい知識を身につけてもらうことは、とても大切なことだと思います。



受話器戻したとたんに電話殺到

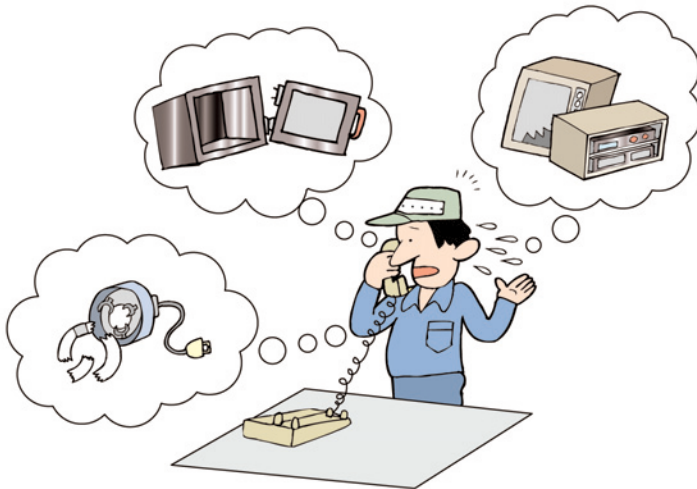
お客さん対応で、てんてこ舞い

石巻市 50代 男性 電器店主

私は電器店をやっています。棚が倒れて書類が散乱した事務所を1時間以上かけてかたづけ、ようやく店に入ると、ガラスのショーケースは倒れ、陳列していた商品はすべて床に落ちている状況でした。

夢中にかたづけている間は気がつかなかったのですが、電話の受話器も吹っ飛んでいました。どうりで静かだったわけです。受話器を元にもどすと、お客さんからバンバン電話がかかってきました。「電気がつかない」、「蛍光灯が落ちてきた」、「テレビが吹っ飛んだ」、「電子レンジが吹っ飛んだ」と、いろいろです。

で、すぐに店の片づけを切り上げて、お客さんのところをまわって歩いたのですが、そうしている間もたびたび余震がありました。ちょうど脚立の上で天井の蛍光灯を直しているときに震度6ぐらいの大きな余震が起こったときは、ほんとうに怖かったです。でも、こっちも商売だから「怖いから」なんて言っていられませんでした。



頼りになるのは商売仲間

石巻市 50代 男性 電気店主

地震直後に、友達の電気屋に電話をして、「手伝ってくれ」って頼みました。その友達に来てくれたおかげで、けっこう早くお客様の要請に応えることができたと思います。

その友達とはあらかじめ契約を交わしていたわけではなく、おやじが亡くなったあと、ひとりじゃ持てない冷蔵庫などを運ぶとき、「助けてくれ」と言うとすぐに来てくれる関係が、ふだんからできていたのです。

電気工事とかも、5、6人ぐらいの同業者のネットワークがあって、日ごろから互いにカバーしあっていますし、地震から2、3週間たったころには、県の電機商業組合が、県下の組合員に声をかけてくれたおかげで、被害のなかった地区の人たちが応援に来て、接続線がはずれただけといった簡単なものは、その場で修理をしてくれました。

それから、うちが所属するサービス会社の所長さんが電話をしてきて、「1人で直すのは大変だろうから、とりあえず全部預かってきなさい。うちのほうから車を出すから、それに載せてくれば、お客さんに戻すだけですむようにして返すよ。」と言ってくれました。ほんとうに有り難かったです。



イベントよりも実践訓練

東松島市 50代 男性 行政職員

地元の防災の日に合わせて、市内全域の自主防災会に、避難訓練などをしていただいておりますが、そのときには、職員全員を各地区に派遣します。職員には、自主防災会が立ち上がったかどうかの確認と、何人集まって、どのような行動をしたのかという報告をしてもらい、あわせて自主防災会の会長さんから報告をいただきます。

われわれ行政としても、自主防災会からの情報が有り難いんです。情報を把握できれば、その対応をどうするかというのは本部でできますから。

しかし、行政がすぐに行くと言ったって、道路が壊れていて行けない場合もありますから、その間、何とか自主防災会の皆さんで救助なり、声を掛け合って安否確認をしていただくというのが一番大切だと思っております。

以前は学校とかどこか1カ所に集まって、大型ヘリコプターを飛ばしたりして防災訓練をしました。でも、そのようなイベント的なものより、実践的な防災訓練のほうが効果的だと思っております。今は市民を主体にした防災訓練の方向でやっています。



一回目よりも大きい余震がきた

山から岩が追いかけてきた

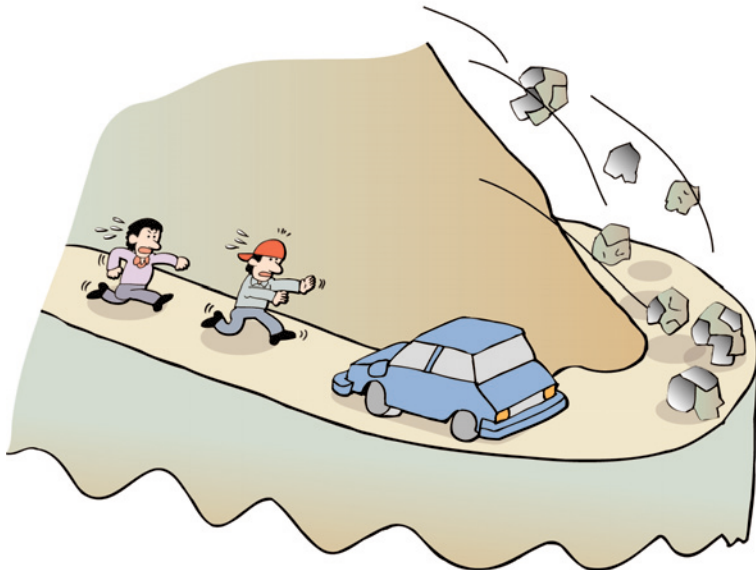
宮城郡 50代 男性 行政職員

夜中の地震の大きさにびっくりして、すぐに役場に行って被害調査に出てはみたけれど、実際には暗くてよく見えないんですよね。それで、翌朝、私ともう一人で、山の上まで被害調査に行きました。

1回目よりも大きい地震が来るとは思ってもいなかったのですが、ガケの近くに車を置いて作業をしていたら、朝方の2回目の地震がきました。

とにかく目で見えてわかるほど山が揺れているんです。で、逃げたんですけども、山から岩が流れてくるような感じで追いかけてきました。てっきり車もダメになっているだろうと思いつつ戻ってみると、運良く無事でしたので、急いで役場に戻りました。

調査とはいえ、そういう危険な場所では十分注意する必要がありますなと思いました。



「震度5弱で全員集合」とは言うけれど

宮城郡 50代 女性 行政職員

最初の地震が起きたとき、私は仙台におりまして、市から電話で、松島が大変で呼び出しが来ているぞということで、急いで仙台から戻り、役場のほうに駆けつけました。

仙台ではそんなに大した地震ではなかったものですが、たいしたことはないだろうと思っていましたが、松島に着いたら、役場の中は大変な状態になっていて、職員や消防団、消防署の職員の皆さんとかは既に集合していました。幸い道路が寸断されたわけではなかったもので、町内にいた人たちは、集まりやすかったと思います。

しかし、役場の職員の召集は、震度5弱で全員集合ということですが、同じ松島の中でも揺れが場所によって全く違う状態でしたから、どこまで出勤させたらいいのか悩むところもありました。家族や自分が命にかかわるようなケガをしていたら、出てこいといったって難しいですよね。



役場の職員にもケアが必要

宮城郡 50代 女性 行政職員

しばらくの間、役場の人間は、皆さんの大変だ、困った、どうしようかという話をずっと聞かなければならないんです。何にしても対応をすぐ迫られたり、いろいろな苦情とかを聞いている職員は、大変な思いをしていましたね。

通常の自分の仕事のほかに罹災証明の発行とか家屋調査とかでバタバタしていて、とても休める状態じゃなく、みんなかなり無理をしていたと思います。災害対応は1日2日じゃなく長期にわたったので、疲労はたまる一方でした。

災害対応は長丁場なので、町民だけじゃなくて、職員のケアもしなきゃいけないと思いました。疲労回復の方法について保健師さんが相談にのってくれるとか、そういうことも考えておく必要があると思いました。



マスコミ対応におおわらわ

宮城郡 50代 女性 行政職員

一番手間がかかったのがマスコミ対応でした。朝昼晩、それぞれ1社、2社じゃないので、「被害は何軒ですか」、「負傷者は何人ですか」といった質問に答えるために、一生懸命データをまとめなければなりませんでした。

マスコミの方々も情報を流さなければいけないんでしょうけど、こちらも同じ条件で情報を流さなければいけないから、何人もでは対応できなくて、1人がマスコミ対応に追われてしまったのです。

「〇〇時にまたおかけします」と言われれば、その時間までにまとめなきゃいけないわけで、結局、指揮をとるべき総務課長がマスコミ対応に入ってしまったので、命令系統がちょっと大変になって、職員も振り回されたかたちでした。

初めて経験する職員も多く、こちらからマスコミにうまく情報を流してもらうなんてことは頭になくて、聞かれれば答えなきゃいけないという状況でした。



息子の忠告聞き流す

穴水市 60代 女性

うちは畳の上にジュウタンを敷いていて、置いていた家具が全部倒れてしまいました。板の間と比べると畳は少しフワフワしているから、よけい倒れやすかったようです。

正直、地震なんて1000分の1も思っていませんでした。自分のところには地震は来ないと思っていたので、阪神・淡路大震災の神戸の人たちを気の毒やなあと思っていただけでした。整理ダンスの上とかに書類を入れたカラーボックスをいくつものせていて、息子から「地震がきたら全部落ちるぞ」と言われていたのに。

地域でいろいろ活動してきたけれど「今まで口先だけやったなあ」と反省しました。防火のために風呂場の水を捨てないでおくとかはやっていましたが、家具は固定しておかなければならなかったんです。

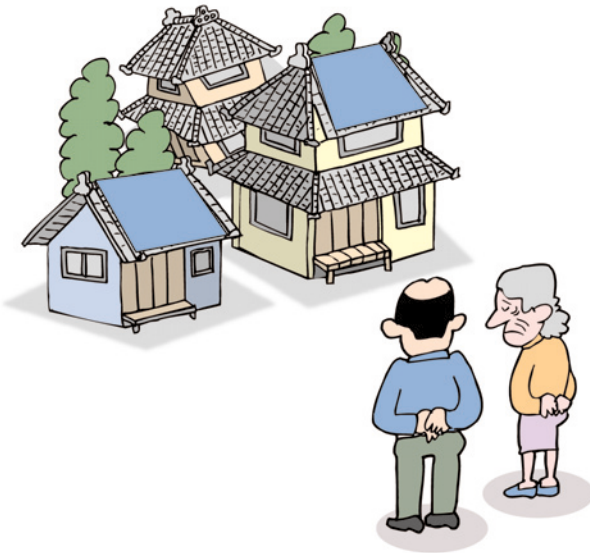


建てかえるより倒れない家にする

穴水市 60代 女性

余震のたびに危険度が増えていって、このあたりで有名な築100何十年の旧家もつぶすことになりました。古いハリなどは一つひとつバラし、うるしを塗った黒塗りの柱なども再利用するそうです。けど、残念でもったいないなと思います。

家を建てかえるとしても半年以上かかるし、莫大な費用とその間の不自由な思いを考えれば、事前に平時から家が倒れないように補強した方がいいんじゃないかなとつくづく思いました。



食器が水のように流れてきた

食器やガラスは割れると凶器に

穴水市 60代 女性

納屋を整理しようと思っていたら、グラグラッと来ました。いつもならすぐ止むのに、なかなか止まない。

観音開き*の戸が開いてガラガラ、二階からもガンガラガンガラ。何がなにやら分からず、へビににらまれたカエルのように一步も動くことができませんでした。

食器が水のように流れてきたという感じで、上の方に置いてあった輪島塗などはほとんど壊れてしまい、どうでもよい下のほうに置いてあった百円ショップで買った安物が残りました。

春休みで遊びに来ていた孫たちも、長靴をはいて家の中の倒れた家具の間を泳ぐように歩いていました。それから、一緒に住む孫の親指にガラス片が刺さり大騒ぎになりました。すぐに娘を職場から呼び戻し、車で病院に連れて行ってもらいました。

孫の痛がる様子を見て、ガラスは割れると凶器になるんだということを実感しました。最近では揺れても簡単に開かない観音開きもあると聞いていますが、「何とかしなきゃ」と思っているので、取り敢えず金具は買ってこようと思っています。

*観音開きとは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。

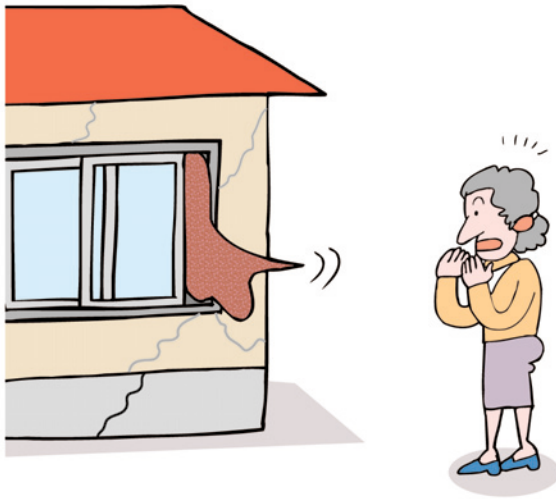


かつてに窓あき、カーテンひらひら

輪島市 70代 女性

朝、テレビを見ていたら、ドーンと家が持ち上げられるようになって、グラグラと揺れました。「あっ、地震や。家が潰れる。家が潰れたら私は死ぬンヤ」と思って、とにかくストーブは消しましたが、何をしていたか分からず、ただ家が揺れているのを眺めているだけでした。

揺れがだいぶおさまってから外に出てみると、うちの窓のカーテンが風にゆらゆらゆれていました。「あれ、おかしい。カギをかけていたはずなのに」と思って、近寄ってみると、全部の戸が10cmほどあいているんです。窓はしっかりしたサッシで、いつもカギをかけていたのに、大きな揺れでカギが外れたんでしょうね。



スリッパではあぶない家の中

部屋の中は、どこもワレモノだらけに

輪島市 60代 女性

私の家は「一部損壊」でしたが、うちの中はそこら中の物が倒れて、足の踏み場もないほどでした。

台所の食器棚は扉が開き、中の茶わんやコップがほとんど下に落ちて、床の上に踏み場もないほど散乱していました。

よく「防災グッズとしてスリッパを用意したほうがいい」なんて言いますが、ああいう時は、実際、スリッパなんて、とてもじゃないけど使いものになりませんね。カンタンにはぬげない、底の厚いしっかりした靴をはかないと足を切ってしまうそうだったから、家族みんなで家の中でも長靴やズックをはいていました。



何でか知らんけど、水汲んどった

輪島市 60代 女性

今年は、何を思ったかしらんけど、焼酎の入っているビン10本と、大きい2リットルのペットボトル20本に、井戸のカンミズ*をくんでとっておいたんです。

あれにはほんとうに助かりましたね。地震で水が止まっている間、洗いものに使ったり、飲み水にしたり、少しずつ大事に使いました。おかげで水道が来るまでどうにかつなりました。

災害時に困るのはやっぱり水ですよ。水道の水をくみ置きしておくと腐るけど、カンミズなら割と長くもつんです。カンミズでお餅をつくとかビが出ないなんて言われますから。

*カンミズ（寒水）とは、寒い冬の間の水のこと。



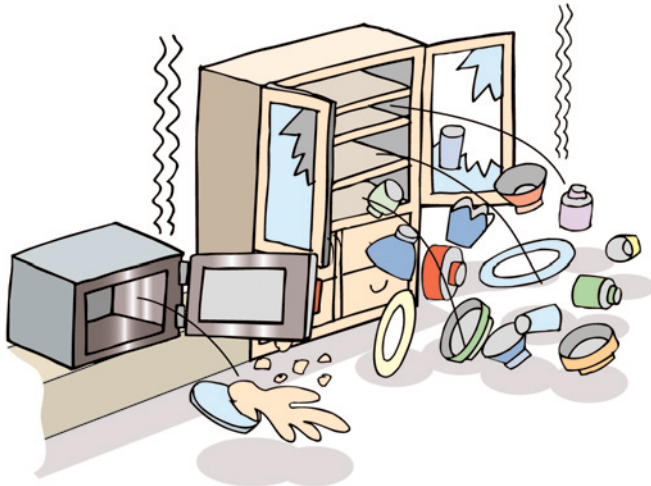
全部飛び出す開き戸は「だめやね」

輪島市 60代 女性

祭りに行く途中で友達のところに行くと、「お化粧品まだやし、ちょっと待って」と言われたので、しばらく待っていました。口紅つけて、眉毛書いて、「そんで、いいよ」、「そんなら行くかんね」とやりとりしているときに、地震が起きたんです。

こんなんじゃ祭りには行かれんわと思って、家にとんで返りました。戸をあけて入ったら、本棚は倒れているし、台所の食器は全部、引き戸だったらいいんだけどうちのは開き戸だったから、中のものが全部出てしまって、電子レンジの中の皿さえも飛んで出ていました。

まったく手がつけられない状態でね。やっぱり、食器棚は引き戸にするか、開き戸なら何か地震対策をしないといかんなど思いました。



なべもセイロも吹っ飛んだ

地震のときは身うごきとれず

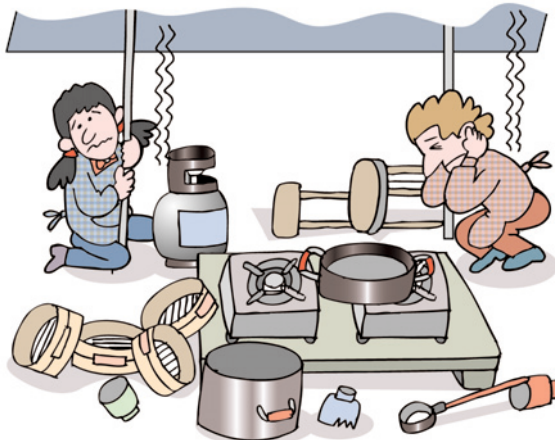
輪島市 70代 女性

私たちは、公民館でおもちつきのイベントをするというので、朝7時から出て、ちょっと早かったけれど、8時ごろにはもうセイロに蒸す準備をされていて、ガスにお湯をかけたりしていました。

そしたら「ドーン」という音と一緒に、5つ重なっていたセイロが全部ばらばらになって地面に落ちました。でかい音がしたから、「どこかに飛行機が落ちたのか」と思ったけれど、だれかが「地震や、しゃがめ、しゃがめ！」と。それから地面が大きく揺れて、私たちがいたテントが真っ二つに折れたんです。

それで、「だれか、ガス消して、消して！」と叫びました。ガスを消さなきゃいけないから、そこへはっていこうと思うんだけど、地面が波をうっていて、動けなかったんです。

あとで見たら、火は消えていました。でっかいナベにお湯がいっぱいわいていたから、そのナベがひっくり返って火が消えたんだと思います。ちょうど火のまわりに人がいなかったときだったから良かったけれど、そばにいたら大ヤケドをしていたと思いますね。



役場の床に一面のトン汁

調理中じゃなくてよかった

輪島市 60代 女性

地震のあった日は、たまたま地区のお祭りで、婦人会の人たち15、6人がそれぞれ家に集まって、直径80cmくらいの大ナベ2つにトン汁を作りました。実際売れるのは100ちょっとですけども、いつも一応200ぐらい用意するんです。甘酒と一緒にね。できあがったトン汁をみんなで役場の中に持って行って、その直後に地震があったんです。

地震のあとで役場にナベを取りにいったら、ナベが50cmほど持ち上がって、全部ひっくり返って、一面トン汁の材料がそこに広がっていました。でっかいナベの中身が、役場一面に全部。もし、調理中に地震があったら、どうなっていたことかと思いました。



液状化で歩くのもままならず

柏崎市 40代 男性

地震を怖がった子どもの叫ぶ声がすごくて、すぐに2階に行かなきゃと思ったんですが、座ったまま、なかなか立ち上がることができませんでした。揺れがおさまったときに慌てて2階に駆け上がりました。その時は夢中でわからなかったのですが、後で見たら足にあざがいくつもありました。いざというときは、一人ひとりが自分の身を守らないといけないと思いました。

子どもの無事を確認した後、自宅から歩いて3分ぐらいのところにいる私の両親の安全を確認しようと、娘と家を出ました。ところが、液状化現象で砂が道路にいっぱい出てきていて、普通の靴では歩けないような状況でした。歩くと砂がバーッとあふれ出る感じで、ビショビショになりながら娘を抱えて、わずか数100mのところにある両親の家に、やっとの思いでたどり着きました。

それから、反対方向の市内には、橋を越えないと行けないのですが、その橋が液状化の影響で道路と段差ができ、しばらくの間通れませんでした。液状化がもっと広い範囲で起こったら大変なことになっていたと思います。



もしも娘がピアノの練習をしていたら

1mも動いていた

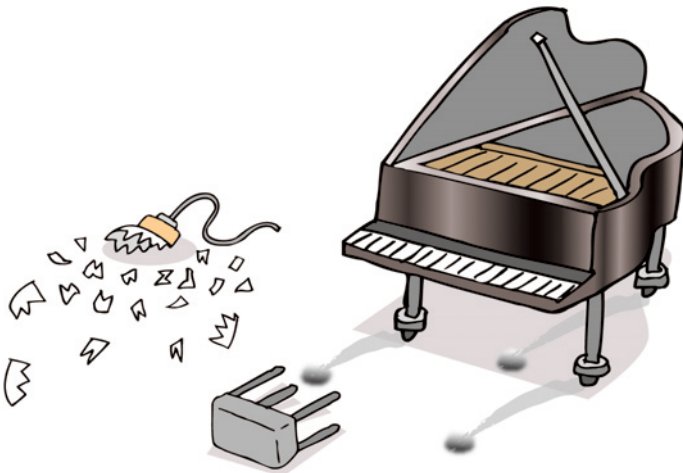
柏崎市 40代 男性

うちの娘は、休みの日の午前中はピアノを弾いていることが多いんです。ピアノがある部屋の電球はペンダント型で、上からつり下げられていました。

それが、地震で振られて、下に落ちて電球のガラスが粉々に飛び散っていました。おどろいたことに、重たいピアノも1mぐらい動いていたんですよ。

いつものように娘がピアノを弾いていたら、ピアノが動いた拍子に、たぶん娘も倒れてしまって、飛び散ったガラスでケガをしていたらと思います。それを考えるとゾッとしますね。

やはり、照明やピアノなど重い物の固定は大事なんだと思いました。



食料や物資はふだんから備蓄してないと

柏崎市 30代 女性

ちょうどコンビニに停めて、車のサイドブレーキをかけた瞬間に揺れ始めて、そのうちジェットコースターに乗っているような感じになりました。

直後でしたので、運良くコンビニに寄れて水とかおにぎりとかパンとか、当面必要な食料を買うことができました。コンビニは、お酒とかが割れて床が水浸しで、お酒の臭いが混じったすごい臭いがしました。

家に帰ったら既に停電していました。で、「ああ、ポリタンクを買ってくるのを忘れたね」と言って、慌ててまた買いに出たんですけど、「もう全部売り切れました」と言われてしまいました。

もう水もすぐにとまっちゃうような感じでしたから、ペットボトルの空いたのを一生懸命探して、買ってきた水と冷蔵庫にあったお茶とかで、復旧まで足りるのかなとすごく心配しました。

3年前の新潟県中越地震のときは水もガスも止まらなかったもので、「何とかなるだろう」と、容器とかも全然そろえていなかったんですね。それが、ガスも、水道も、電気も全部とまってしまったので、「私たちはどうなるんだろう」という感じでした。

やはり、食料や必要な容器などは、ふだんから備蓄しておかないといけないなと思いました。



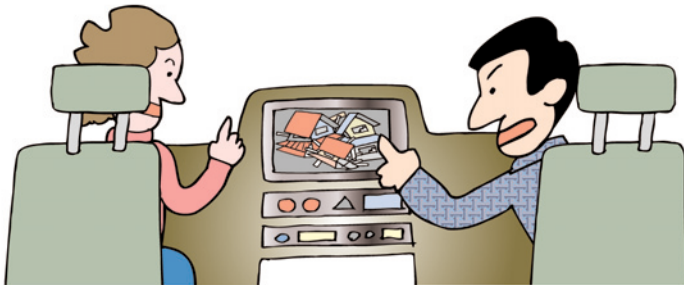
カーナビのテレビ見て情報収集

柏崎市 30代 女性

防災無線で、「これから水が止まります」という放送が入ったときには、すでに断水していて、水をためることもできませんでした。地域で差があるんだろうとは頭でわかっているけど、「この放送は一体なんだろう」という感じでしたね。「これから」というのに水が出ないんですから。

電気も止まってしまう、夜は懐中電灯だけが頼りでしたが、中越地震の苦い経験から、単1とか単3とかよく使う電池はいっぱい買っておくようにしていたので、今回は大丈夫でした。

うちの車にはカーナビがついていましたので、カーナビのテレビを見ながら「あっ、こんなにひどいことになっているんだ」なんて言っていました。



生きている間はもう来ないと思った

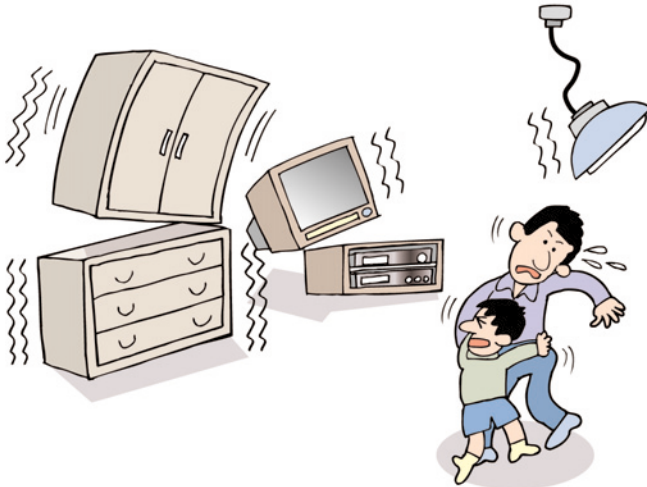
前回の経験、生かせず

柏崎市 50代 男性

私個人としては、数年前の新潟県中越地震の経験はほとんど生きたことですね。あのときは、他の人は結構被害があったと言うんですが、うちの場合はちょっと不安定に棚の上に置いていた荷物が1個落ちたぐらいだったものですから。

うちのおやじなんかも、「この辺は地盤がいいから」と言うので、私も安心してたんです。それに、中越地震のような大きな地震は、もう自分が生きている間は来ないだろうなんて、変な自信がありましたね。

それが何年もしないうちにこんな大きな地震が来るなんて夢にも思いませんでした。



パチンコの最中に、グラッときた

床は一面玉の海

柏崎市 30代 男性

会社がお休みでしたので、その日は外にいまして、ちょうどパチンコをしていた時に、地震が来ました。

揺れて、「あっ、これはちょっと尋常じゃないな」と思っているうちに、全部電気が落ちまして、新潟県中越地震のときの経験もあったので、私は落ち着いて、気をつけて外に出ました。

あとから、お店の人の誘導もあったということと、「おれの出玉をどうしてくれるんだ」みたいなことがあったという話を聞きました。「自分で台の番号を覚えていれば、後日補償しますよ」という話もあったようです。

でも、すぐにその辺に積んであるパチンコ玉が揺れて落ちて、床一面、玉の海になりますから、逃げるときには気をつけないといけませんね。



地震直後の車の運転はやっぱり危険

古い家は軒並みくずれた

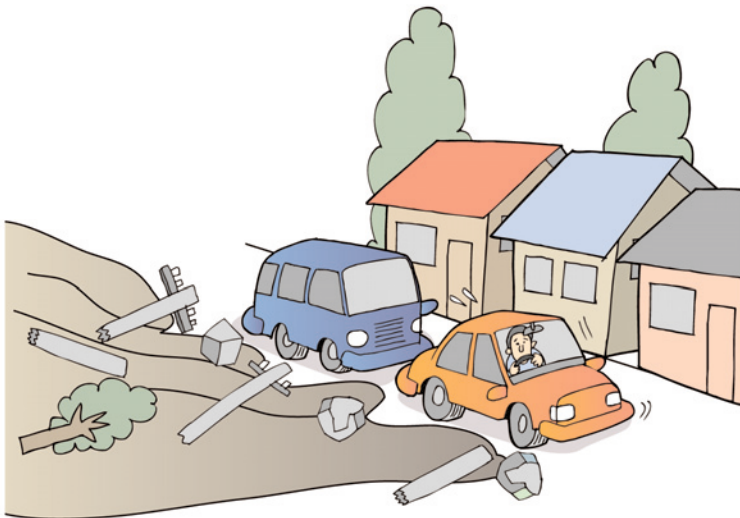
柏崎市 30代 男性

その日、子どもが近くのグラウンドで部活をやっていたので、そこまで迎えに行こうと、車に飛び乗りました。

そのときはもう駐車場のアスファルトに亀裂が入っているし、電柱は倒れているし、道路からガスは吹き上げているといった、大変な状況でした。道路の真ん中を走ることができないので、歩道に無理やり入って通れたというようなくあいでした。

やっぱり、隣の家はちゃんと建っていても、古い家は軒並み崩れるという感じでしたね。子どもを乗せて自宅まで戻る途中も、どこもかしこも、電柱が倒れたり、電線が車にかかるぐらいに傾いたりして、そのあと通れなくなった道もかなりありました。

道路は渋滞になって、家に帰るまでにだいぶ苦勞しました。子どもが心配で車に飛び乗ったわけですが、地震直後の運転はかなり危険だったなと思います。



何かの下に隠れる余裕もなかった

柏崎市 40代 女性

3連休で、離れて住んでいる大学生の子どもも帰ってきて、みんながちょうどうちにいたんですよ。で、午前10時すぎにちょっと遅めの朝ご飯を食べた後に、いきなり揺れだしたのです。

前の新潟県中越地震の時は、食器一つ割れなかったんですが、今回の中越沖地震では台所の食器棚などが、ガシャン、ガシャンとものすごい音をたてて倒れたし、そこら辺にあるものすべてが倒れて、「うちが壊れる」と思いました。

ふつうは何かの下に隠れるとかね、でも、今回はそういう余裕がなくて、自分は記憶にないんですけど、なぜか倒れたタンスのほうにふらふらと歩きかけたみたいです。「あのままだったら、タンスの下敷きになって死んでいたよ」と、あとで子どもに怒られました。

窓のほうを見たら、サッシがグニャグニャになっていたので、「これはもうだめだ、早く外に出よう」と言って、玄関のすぐわきにあった掃き出し窓からみんなで外に出ました。

当時、携帯電話とかは全然つながらなかったもので、うちはたまたまみんないたからよかったけれど、家族と離れている人は連絡を取り合うのに大変だっただろうと思います。



そんなところで寝ていちゃ、ダメ

家具の配置に要注意

柏崎市 20代 男性

前の日の夜が仕事で遅くて、その時間までまだ寝ていたんです。最初軽く揺れ出して、「あ、また地震だな。まあ、いつものことだから」と思って、そんなに慌てもしなかったんですけど、すぐにクレーン車か何かが突っ込んで来たんじゃないかと思うほどの揺れになりました。

で、あわてて、パジャマのまま、2階の部屋の窓から1階の屋根の上に飛び出たんです。「上から2階の屋根のかわらが落ちてきたりして、かえって危ないよ」とあとで人に言われたんですけど、その時は夢中でした。

私が寝ていた場所というのは、頭のほうにテレビが置いてあって、足元には冷蔵庫が置いてありました。やっと揺れがおさまって、振り返って自分の部屋の中を見たら、テレビと冷蔵庫が自分の寝ていた場所にドン、ドンと転がっていたのです。

それを見て、「逃げてよかったな」と思うと同時に、「そんなところで寝ていちゃいけないな」と思いました。



「震度6強」ってものすごい

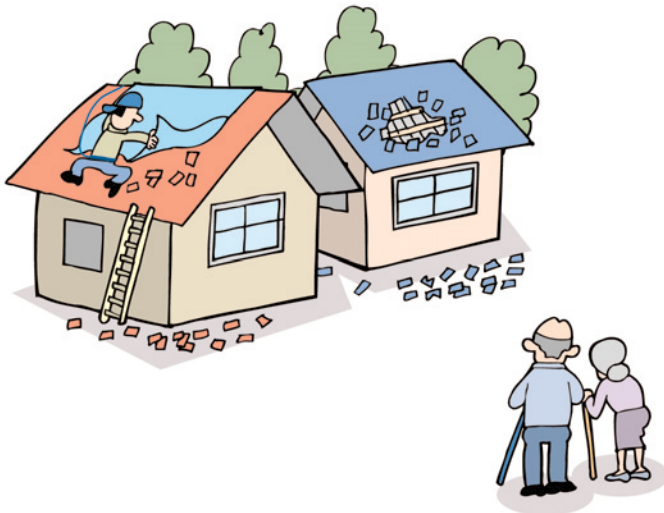
柏崎市 20代 男性

我にかえって外に出てみると、近所の人たちもみんな出てきていました。自分の家は、山の上みたいなところに建っていて、築20年ぐらいなんですけど、地盤が岩盤で、すごく丈夫らしくて、家の中がめちゃくちゃになった割には、それほど大きな被害はありませんでした。

でも、揺れのすごさには、ほんとうにびっくりしました。あとから「震度6強」と聞いて、「ああ、まあそういうレベルだよな」とひとり納得しました。

近所はと見ると、屋根のかわらがぐちゃぐちゃになっている家がけっこうありました。周りに高齢者の方がたくさんいるのですが、屋根のかわらがこわれた家は、雨が降れば当然、雨漏りしちゃうんです。

だからって、自分がブルーシートを引いてあげたとかではないうんですけど、家の近所に大工さんがいて、すぐに近所の家々にブルーシートとかを手配してあげていたんです。職業を生かしたととてもすばらしいことだと思いました。



ご近所みんなで助け合えた

柏崎市 40代 女性

電気は翌々日で、ガス、水道は8日後に復旧しました。夏だからやっぱりお風呂とかに入りたいじゃないですか、でも水も何も無い。そんな時、近所に引っ越してきた人が、「水が使えるから、お風呂に入りに来なよ」と言ってくれました。

1週間水が出なくて、洗濯が大変だったんですが、近所の人から「私の実家は水が出たよ」と言って、洗濯物を持って行って、全部洗濯機で洗ってくれて、後は干すだけにして戻してくれました。ほんとうに有り難いと思いました。

それから、うちは市内でもすごく復旧が早いほうだったので、子供の部活の友達が、帰りにシャワーを浴びに来たりしたこともよくありました。隣が「カップラーメンはいっぱいあるんだけど、火がないんだよね」と言えば、うちのカセットコンロを貸してあげたりしたこともありました。

何か、地域みんなが、ほんとうに助け合ったなって思います。



おとなりの井戸水もらえて大助かり

トイレの「ジャー」は、バケツ3杯分

柏崎市 30代 男性

水が出ないのが一番こまりましたね。うちは田舎なので家に井戸があって、これは助かったなと思ったんですけど、地震で井戸水のほうのパイプがやられてしまって、井戸水をくみ出すことができませんでした。で、何日間か、水道が出るまで、おとなりから井戸水もらってしのぎました。

でも、いつも何となくやっているトイレの「ジャー」は、バケツ3杯も運ばなきゃだめなんですよ。

いつも洗濯に使う風呂の残り湯は、大きな揺れで、ガシャンガシャンと台所まで飛び散っていて、もう3分の1ぐらいしかありませんでした。

何が困ると言ったら、やっぱりトイレの水が一番で、おとなりから井戸の水をいただいたのは、すごくありがたかったです。



すぐ外に出てヒヤリ

柏崎市 50代 男性 会社員

会社は4階建てでして、その日はちょうど3階の製造の現場で新しいラインの工事をやっていたんです。私もその手伝いに来ていて、地震が起きたときは1階で作業をしていました。

かなり大きな揺れだったので、「地震のときは、上からものが落ちてくるから周囲をよく見なさい」とかいう話をよく聞きますが、そのときはとにかく「何が起こったのだろう」と思って、いきなり外に出ちゃったんですよね。

緊急時には必ず駐車場側に来るということになっていますので、外を回って建物の反対側へ行くと、西側の4階の窓のガラス戸がフレームごと下に落ちて中の棚がガサッと外につきだしていたり、厨房の大きななべが2階から吹っ飛んでいて、ゾーっとしました。

たまたま自分は反対側だったから良かったけれど、場所によっては危なかったと思います。やっぱり、地震のときはあわててすぐ外に飛び出してはいけないと思います。



ヘルメットを取りにいく余裕もなく

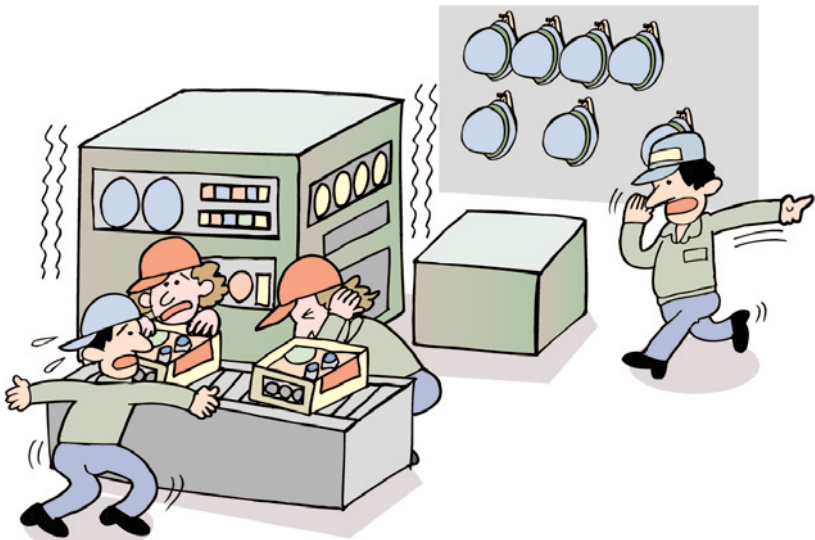
上司の「落ち着け！」で冷静に

柏崎市 40代 男性 会社員

あの日、私は休日出勤で、3階のフロアーで製品をお客さんに届けるための作業をしていました。作業の方々は全員で30名ぐらい。あとは新しい製造ラインをつくるということで、10名ぐらいいたかと思います。

まさに午前10時13分ごろ、初めは、「あれっ？地震かな」程度でしたが、その後すごい揺れで立ってられなくなり、ラインにしがみついていた。みんなカー、カー悲鳴をあげていて、実際はそんなに長くはなかったと思うんですけども、すごく長い感じがしました。

職場には、3年前の中越地震の教訓から、ヘルメットとかをすぐ近くに置いていたのですが、それをとりに行く余裕もないぐらいにみんな動揺していましたね。近くにいた管理職の人たちが「落ち着け！」と言ってからは、自分もけっこう冷静に動けたんじゃないかなと思います。



電話連絡網を使って部下の安否を確認

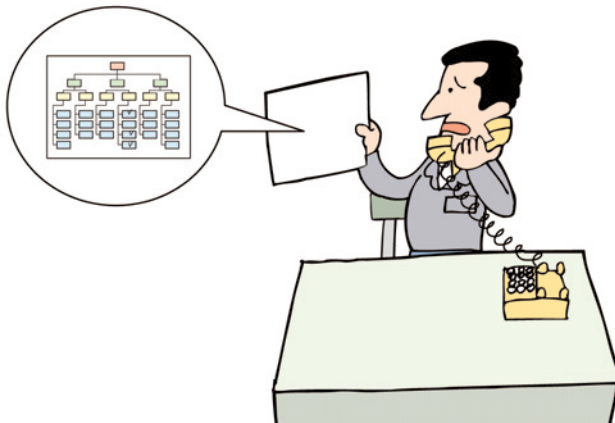
柏崎市 40代 男性 会社員

「ひとまず自宅に戻りなさい」という会社の指示で、道が傷んでいる部分に気をつけながら帰ったのがお昼ちょっと前だったと思います。家のほうは食器やテレビが落ちていて大変な状況でしたが、家族は無事でケガもしていなかったので安心しました。

その後、部下の安否確認をしなきゃいけないということで、会社に戻りました。守衛所には発電機がありますので、テレビが映っていました。「おっ、こんなにすごいのか」と、ほんとうにおどろきましたね。

安否確認は、携帯電話は当然つながらないと思って、部下の自宅あてに電話しました。避難所に行った人は夕方5時、6時にならないと電話に出ないので苦労しましたが、その日のうちに8割ぐらい、翌日には何とか全員と連絡をとることができました。

携帯電話があるご時勢とはいえ、やはり、ふだんから、電話連絡網をきちんと整備しておかないとなと思いました。

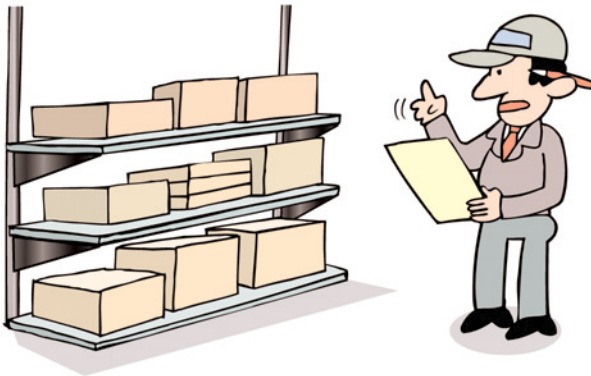


地震の反省を生かし工夫

柏崎市 40代 男性 会社員

会社の反省ですが、4階に背の高い棚がいっぱいありましたので、この地震を機に棚の高さを1.5m以下にすることに決めました。

棚は以前から固定していたのですが、地震の衝撃で壁ごと倒れてしまったんです。そこで、地震後の対応としては、柱と壁がかたいもの同士なので、部屋の角の柱と壁の間を柔らかいクッション材みたいなものでカバーしたり、多少揺れても落ちないように天井のボードとボードの間に少し余裕を持たせたような感じにしたりして、新たな工夫をしました。



上司の配慮で、有給休暇扱い

柏崎市 30代 女性 会社員

地震当日に会社に様子を見に行ったときは、会社から「明日はとりあえず来られる人は来てください」という話がありました。

うちは二人子どもがいて保育園と小学校に通っているのですが、小学校は避難所になったため休校になり、そのまま夏休みに入ってしまった。しかたなく、保育園が再開するまでの間、仕事を休みました。

他にも小さな子どもがいる人はかなりいますし、たぶん私と同じように有給休暇扱いで休んでいた人もたくさんいたと思います。

上司からも身のまわりの事情を優先するようになってもらったので、休みづらいということはありませんでした。これは有り難かったですね。



「あ、地震だな」とは思ったけれど

すぐに机の下にもぐるべきだった

柏崎市 40代 男性 会社員

休日出勤をして自分の席にいました。突然ガタガタガッと揺れて、「あ、地震だな」とは思ったんですけど、あそこまで大きくなるとは思っていなくて、そのまま椅子にすわっていました。でも、そのうちどんどん揺れがでっかくなって、最後は机にしがみつくなかったです。

会社として、前回の新潟県中越地震以降、避難誘導では、各自ヘルメットをかぶって、まず2階のメンバーを集めて、一緒に下までおりて外の駐車場に避難するということになっておりました。それで、当時2階にいたメンバーに、「ヘルメットをかぶって下におりるぞ！」と叫ぶのですが、腰がぬけたのか、なかなか来ないんです。だんだん叫ぶ声だけ大きくなって、「もう！」っていう感じで待って、そのメンバーと一緒に避難しました。

揺れている時間は結構長かったと思います。今思えば、落下物から身を守るためにも、すぐに机の下にもぐらないといけなかったですね。



「こりゃ、仕事にならないな」

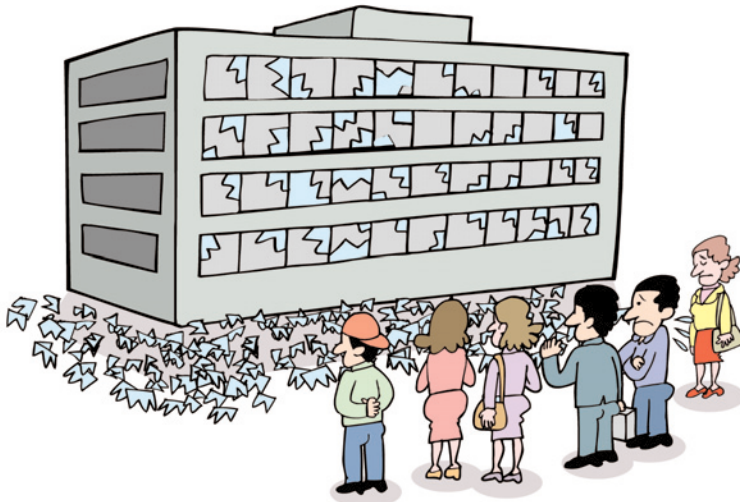
先に自宅の後かたづけを

柏崎市 40代 女性 会社員

私の家も会社から近いので、地震が起きたその日の夕方に、会社までちょっと様子を見に行きました。どうなっているだろうと心配で来てみたのですが、うちの会社もそうだし、まわりの会社も、窓ガラスが割れていたり、大変な状況でした。

もちろん会社の中に入ることはできませんでしたが、直感的に「こりゃあ仕事にならないな」と思いました。

だから、その日に上司から私の携帯に電話が来て、「会社もひどい状態だし、家のほうも大変でしょうから、あしたは出勤しないで、うちのほうの片づけをされていていいですよ」と言われた時に、「じゃあ、私、あしたは休みます」とはっきり言いました。



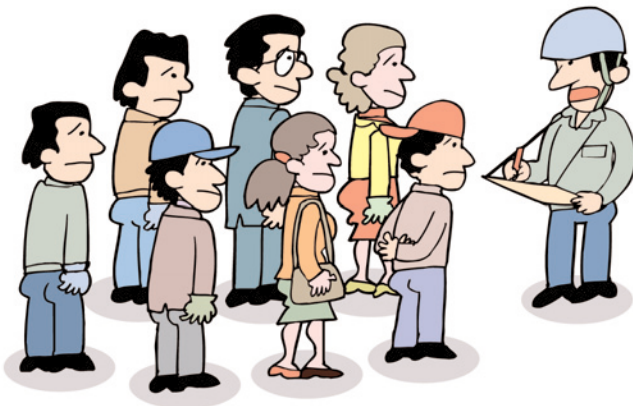
ひとまず「解散」

会社の指示はきちんとしていた

柏崎市 40代 男性 会社員

地震の翌朝、正門の前に社員が集まりました。部長が点呼をとって安否の確認をしたり、「いつからなら会社に来られそうですか」というようなやりとりをしたあと、「対策本部の人や片づけ処理をする専門の人以外は、危険だから安全が確保されるまで建物の中に入らないように」という指示が出ました。それから、たしか午前11時過ぎでしたね。もう、電気や水道もだめだし、すぐに一般の社員が中に入ってどうこうという状況にないということで「解散」の指示が出ました。

そして次の日には、上司が従業員に対して、「自分の部署に行っている」、「ここは行っちゃだめ」、つまり、「まだ危険な場所」と、「入ってもいい場所」というように、被害状況を踏まえた具体的な指示を出して、わたしたちはヘルメットをかぶり、マスクと軍手をして、いっせいに後かたづけをしました。「脱水症に注意」、「単独活動は不可」、「安全に配慮」とか、会社の指示は、結構きちんとしていたので、混乱はありませんでしたね。



仮設トイレにも細かな気配り

全トイレに芳香剤、女性用トイレに生理用品

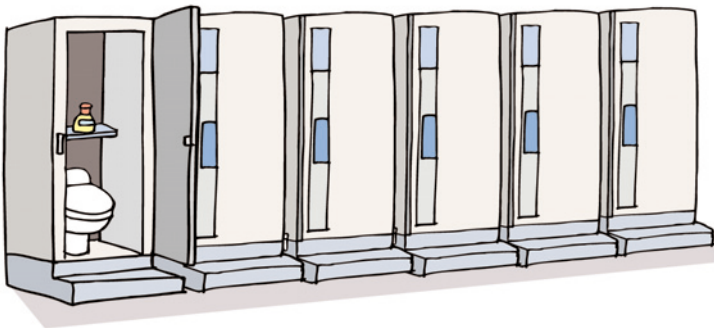
柏崎市 40代 女性 会社員

会社の対応はものすごく早かったですね。私が出社したときには、もう仮設のトイレに水が流れるようになっていました。当時、家のトイレは流せなかったから、「帰る前には会社でトイレに入って」みたいな、そういう感じでしたね。

女性用のトイレと男性用のトイレは離れた場所に設置されていたので、余計な気をつかうこともありませんでした。それに、女性用トイレには、生理用品とかもきちんと置いてあったし、芳香剤も全室に1個ずつ備えられていました。

清掃も業者がきちんとしてくれていたので、コミュニティセンターとかにある普通のトイレよりも使い心地がよかったぐらい。

担当したマネージャーが「柏崎一早かった」と言っていました。非常時に何が必要かというのをわかっているから、できたことではないかなと思います。



先ず生産ラインの復旧

ブレなかった指示系統

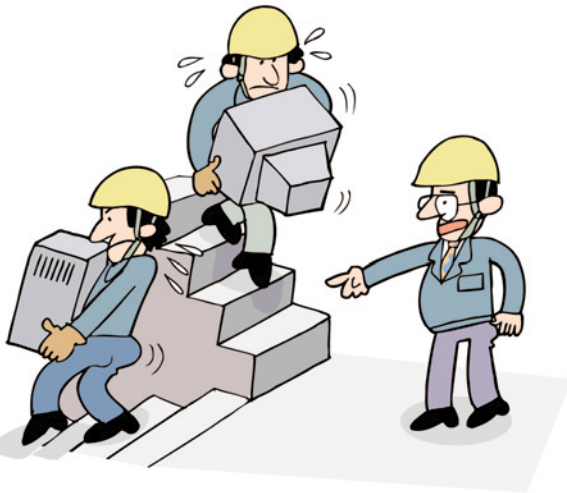
柏崎市 30代 男性 会社員

会社としてはまず生産ラインを復旧させるのが最優先でした。私は資材部でしたが、仕入れ先をもたないので後かたづけにまわりました。製造現場で部品の上にくずれた壁が落ちていたり、食堂では天井の壁がはがれていたので、男性も女性もかわりなく、とにかくやれる範囲で、現場に行ってガレキの袋詰めをやることになったのです。

仕入係は、仕入れさんからジャンジャン連絡が来ているし、何日間か動けない分の部品調達をしなければならないので、1階に仮設の事務所をつくって、対応することになりました。

マネージャー以上が3人ぐらい特定の人を決めて、その人だけがヘルメットをかぶって一番被害の大きい4階に行って、パソコンを1階まで運びました。パソコン自体は耐震対策がされていたので、生きていたものが多かったですね。

こういった復旧にあたっての指示系統というのは、よくできていたんじゃないかなと思います。



社員のために温泉施設を確保

柏崎市 40代 男性 会社員

当時、暑い季節で、会社に来て空調がないから汗だくで、何とかふろに入りたいと思って、あちこちに最近できた温泉みたいなふろ屋に行きました。一度長岡に行ったら、ものすごく並んでいて、「入らないで帰るぐらいなら」と、新潟まで行ったこともありました。

会社のために温泉施設を無料で貸してくれるところが出てきて、夜の11時半ぐらいまで社員が入れることになりました。ただ、会社の人と一緒にふろに入らなきゃいけないんで、それが嫌だという人もいるし、それこそほかの温泉施設はすごい人なのに、そこは全然人がいないから、残業してからでも楽々入れるからと毎日通っていた人もいました。

そこは会社がよく利用するホテルで、普段のつきあいから好意で開放してくれたようですが、会社がそこまで準備してくれたのはすごいことだなと思います。



水は2リットルと500ミリリットルの使い分け

柏崎市 40代 男性 会社員

水道が止まっている間、本社から、ペットボトルの水がどんどん送られてきました。で、ぜいたくな話ですが、掃除用や手洗い用にも使わせてもらいました。

当然、飲み水としても使うんですけど、「必要なら持っていいですよ」と言ってくれましたので、家庭用にもらって帰りました。

しまいには、「掃除用には2リットルの大きなボトルでいいけど、うがいなどには扱いづらいから、500ミリリットルの方がいい」なんて、注文を出しました。



蓄積される災害対応ノウハウ

柏崎市 40代 男性 会社員

天井のボードを落したりする業務は専門じゃないとできませんから、いわゆる土建屋さんをとにかく最初に入れて、ある程度落としてから、落ちたものを片づける作業を従業員にやってもらいました。それも危険がないわけじゃないんですけども、十分に注意した上でということをお願いしました。

総務としては、片づけ作業に必要なゴミ袋やバケツ、ブルーシートの準備はもちろんです。断水で洗濯ができないので、毎日新しいものに取り替えられるよう、マスク、軍手、タオルなどは大量に用意しました。

初日に業者さんに何百人と入ってもらえたのは、やっぱり工務のほうで日ごろのいろいろなつき合いの中から、連絡が常にとれる業者というのをある程度把握していたからだと思います。

また、簡易トイレを50個用意したのですが、ちょうどあの時期は夏祭りなどのイベントが多く、大多数が押さえられているんですよ。ですから近隣の長岡市とかではまず無理だということで、すぐに新潟市の業者に電話をしました。

こういった段取りなんかは、先の新潟県中越地震の経験がベースになっていることは確かだと思います。



厨房の漏水でヒヤリ

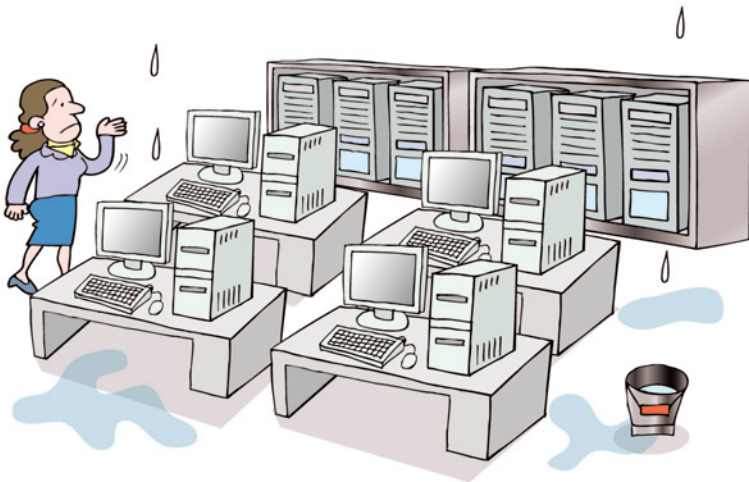
柏崎市 40代 男性 会社員

被災後まず着手しなければならないのは、福利厚生面の復旧ですね。特に、食堂が使えなくなりましたので、約1ヶ月の間、毎日600食から700食を手配しました。夏場で食べ物が傷みやすい時期でしたので、食中毒等にも神経を使いました。

主要な設備については、耐震対策ということで、揺れないようにしっかりと固定されていたので、被害というのはほとんどなかったのですが、今回被害を受けた厨房の下の階にコンピューター室がありましたので、厨房の破損した配管から水が漏れてしまったのです。

かなりの量の水がコンピューター室に落ちてきまして、もしコンピューター機器に直接水がかかっていたら、3日で生産を開始することはできなかっただろうと思います。他がすべて整っていてもネットワークというインフラのサービスの復旧がなければ操業は無理ですから。

これがきっかけで、耐水対策にも取り組むことになりました。



必要最低量の水を毎日被災地に

東京都 40代 男性 会社員

当時は暑い盛りで、電気や水道もストップしてしまいましたので、本社としては、まず水の絶対量を確保しようと思えました。で、現地の従業員の総人数から、飲料水と手洗いなどの生活用水にかかる1日当たりの必要最低量を割り出すと、500ミリリットルで、およそ5万5,000本になりました。

そこで、継続的に供給できる取引先を決めて、ほぼ毎日のように注文を出し続けたわけです。当初は、ミネラルウォーターのみ。その後、時間がたつにつれて、やっぱり甘味のあるものが欲しくなるだろうということで、ジュースや炭酸飲料水も送りました。

確かにコストはかかりましたが、結果として、簡易トイレを使用する際の洗浄も、そのペットボトルの水を移しかえながらやっていたということで、まあ、必要かつ十分というか、「水が足りない！」という声が聞かれなかったのが、非常によかったなと思いますね。



「サバイバルカード」も社会貢献に一役

東京都 50代 男性 会社員

うちの会社は、日本国内3万数千人の従業員ひとり一人に、「サバイバルカード」を持たせています。実際、一般社員にとっては、でっかいマニュアルなんて役に立たないですからね。折り畳んでポケットに入る大きさ（約横5センチ、縦7センチ）にしています。

そして、新潟県中越沖地震の経験を活かして、カードを改訂し、第2版としました。「帰宅困難者は、夜間の行動は避けること」、地方の車通勤者については、新潟での教訓ということで、「屋外に避難したら、クルマのキーをロッカーに取りに行けなくなるので、キーは常に身につけておくこと」、「クルマは緊急時のシェルターになる」ということを新たに加えました。

カードは10万枚刷りましたが、もう5万枚はけましたよ。「ご自由にお使いください」ということで、会社のロゴを除いたワードファイルをそのままお客様にも差し上げているんです。今まで、数百社に差し上げていますが、皆さんにとっても喜んでもらっています。



いざという時には危機管理のメンバーで判断

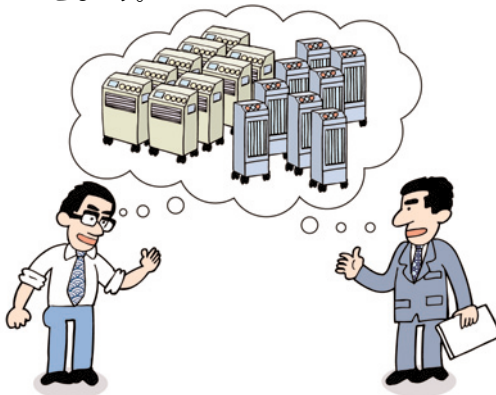
東京都 40代 男性 会社員

被災したグループ会社から、とにかく暑くてかなわんと、暑さで仕事にならないので、水道が回復してクーラーが作動するまで、できればスポットクーラー*を100台ぐらい送ってほしいという意見がありました。しかし、それは1台何十万もするものなので、ちょっと難しいと。で、まあ、似て非なるもので、力は小さいけど、家庭用の少し冷たい空気が出る除湿器を兼ねたものをすぐ手配して、100台送り込みました。

そういうリクエストに対しては、一応リスク管理のメンバーで、応えられるかどうかを話し合いますが、会議体に諮って、役職者の決裁を受けてなんていうことはやりません。どうしても必要なものということならば、仮に会社のルールからはずれたものであったとしても、それを送ることが今回の対策の重要な部分だということを、あとで上司に説明すればよいという考えをみんなが持っています。もちろん、予算を念頭において。

権限というところちょっと大げさかもしれませんが、危機管理を担当する我々がそこを判断して、現地の要望ですから、やっぱり全面的にこたえたいということでかなりやっつけてしまいますね。もちろん、上にはきちんと報告を入れます。

*スポットクーラーとは、移動型の非常にコンパクトなクーラーのこと。スポットエアコンともいう。



地震が来たら、すぐテレビで情報収集

東京都 50代 男性 会社員

わが社では、震度5強以上の地震が日本全国どこかで起こったときには、休みであってもある程度情報収集をしようということにしています。もちろん、休みで出かけてしまうときはあるんですが、可能な限り、初動の対応ができるような体制になっています。

新潟県中越沖地震が発生した時、私はたまたま外出中でした。地下3階にいたんですけど、揺れたんですね。娘の運動部の大会だったのですが、隣にいたお父さんが、「揺れましたね」と。

その方は、市役所の防災担当の方なんですよ。で、二人してそのまま階段を駆け上がって、携帯電話でテレビニュースを見ながら、「あっ、震度5強。かなり大きいな」と。立場上、地震が来ると、テレビを見ざるを得ないんですよ。

で、すぐに会社に向かいました。そういうところは、会社からは一切指示はなく、私たち危機管理担当の間で取り決めているものです。

オフィスに駆け込むと、すでに数人の仲間が来ていました。



工場復旧に一苦勞

東京都 40代 男性 会社員

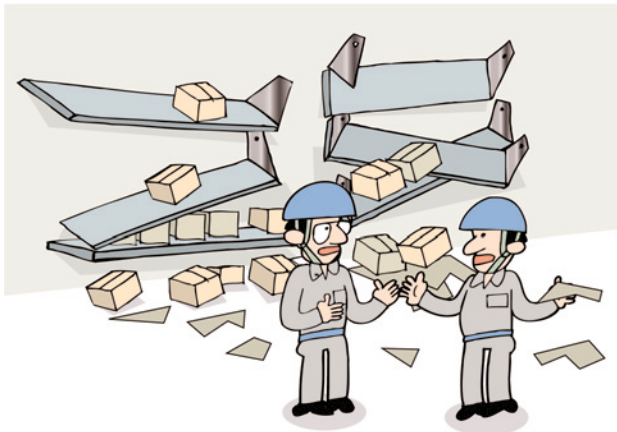
時間の経過とともに、災害対応の中身は変わります。今回、わが社は、初めて生産拠点の工場が被災しまして、商品の製造がストップせざるを得ない状況になりました。

何と言っても関係者の安否確認、これが最優先なんです、それが済むと、今度は、工場機能に、どれほど支障をきたしているのかというのが関心事になります。

その段階で、いろいろな切り口のリソース*の供給が必要になるんですね。例えば、建設業者を入れて、工場の中を少し片づけないと、被害状況もわからないということですから、特定の業者さんとうまく連携をとって、社内にいる専門家を現地に派遣して、一緒に改修工事もしました。

それから、原材料の供給については、ほかの工場から手配できるかなど、工場を管理・統括する組織で、会社全体をにらんで検討しました。やっぱり工場機能を復活させるのに、非常に時間がかかりましたね。

*ここで言うリソースとは、生産活動のもとになる物資、労働力などを指します。



役立つ日ごろの訓練

東京都 50代 男性 会社員

今回は、安否確認システム*を導入していたものの、残念ながら訓練がいきとどかないうちに地震がきてしまいましたので、うまく使えませんでした。

とにかく、企業としては、災害が発生した場合、どこでどのような被害がでているかを、早く、正確につかむことが大切です。すから、専用の電話線や無線、携帯電話、メールなどいろいろな通信手段を用意しています。

無線の訓練は、ときどき抜き打ちでやっています。本社から各工場へ打合せなしに無線をかけるのですが、「ピーピー無線機が鳴っていますが、どうしたらいいんですか」と電話で聞いてくるところもあります。

本社と工場がいっしょに訓練を行うことで、お互いの特徴を知ることができますし、こちらから対応策を提案することもできます。やっぱり、日ごろの訓練の積み重ねが大切ですね。

*安否確認システムとは、災害時に各地に点在する社員とその家族の安否確認を迅速かつ正確に行うことなどを目的とし、社員が自宅の電話やパソコン、携帯電話などから、会社に安否を伝えるしくみです。



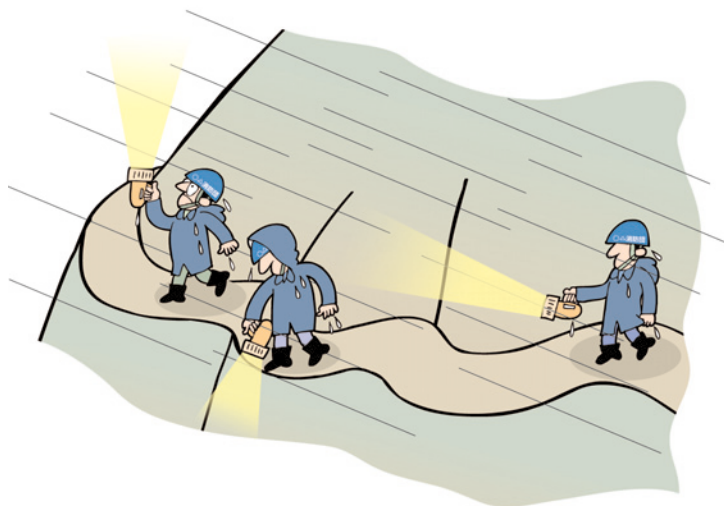
道路寸断で消防団員の出番

徳島市 60代 男性 消防団員

朝の10時前ぐらいかな、ポンプ車に乗ってパトロールに出かけた時には、橋を越えた付近でポンプ車のちょっと大きめのタイヤ半分がもう水に浸かっていました。で、水に浸かるのは時間の問題だということで、すぐに警察署へ連絡し、その橋で車を止めてくれるよう頼みました。

消防団の詰め所にいると、ふだんめったにかかってこない電話が、どこで調べるのか分かりませんがボンボン入ってくるんですよ。裏の山が崩れそうだという連絡が入った時は、まず消防局に報告してから、道路は通れなくなっていたので、歩いて山から回って見に行きましたが、幸い何ともありませんでした。

当時、道路がどこも寸断され、通行不能になってしまったので、救助活動などは、すべて地域の消防団員が対応することになりました。50人近い団員は自営業が中心で、親子で入っている家もあります。自分たちの家も被災している状況で、みんな良くやったと思いますね。



上からと下からの水が鉢合わせ

あっという間に水位上昇

徳島市 50代 男性 消防団員

このあたりは、上流から水が流れ落ちると同時に、下流から泥水がそ上してくるといった感じ。泥水が上と下両方から鉢合わせして、水位がグーっといっぺんに上がってきたという状況でした。1時間で1mぐらいの水が増えたと思います。

消防団が動き出す前に、「家が床下までつかっているから助けてくれ」という連絡があり、消防局に救助をお願いしたのですが、それからほんの10分ぐらいの間に道と側溝の境がわからないほどに水が上がってきました。きっと消防局の車も帰りは通れなかったはずです。それほど、想像を絶するほどの雨が集中的に降りました。

低い土地では、水位が3m以上になったところもありました。そうなるともう、ボートがなければどうにも動けません。救助はどうしても老人とか災害弱者が優先になりますから、コンビニの店長さんは首まで水につかりながら、長いことがんばっていたという笑えない話が残っています。



人に頼る避難より自主避難を！

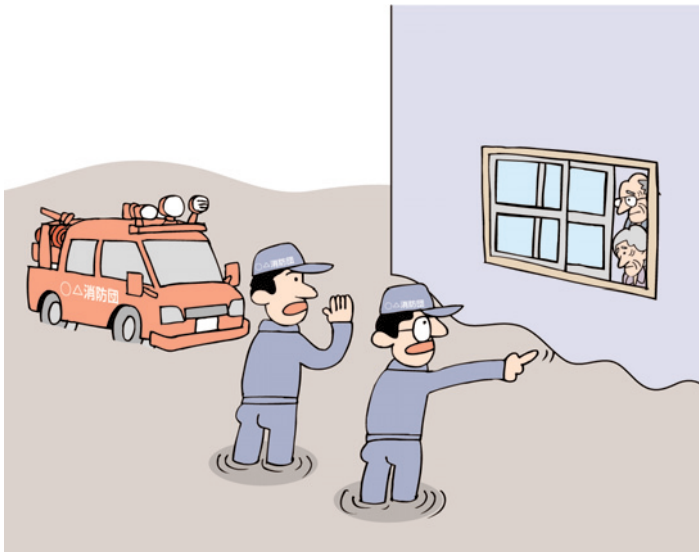
徳島市 50代 男性 消防団員

災害対応にあたっていると、避難する側の人の心構えが大事ななと思います。「犬を飼っているので、犬を連れていってもいいか」とか、「寝る布団はあるのか」、「食うものはあるか」とか、いろんなことを言う人もいました。

市営住宅の人たちを避難させに行ったときには、消防団が車で送り迎えしてくれるというような考えでいるから、なかなか自分から動かないんですよ。みんな乗用車を持っているんだから、各戸で誘い合って乗っていったらいいのに、悲しいかな、それができない。何度も車で往復しなければならず、時間もかかって大変でした。

それ以降、台風時などの出水については早目の避難ということで、住民の皆さん方には、早い形で自主的に避難をくださいというようなマニュアルづくりをしています。

これからは住民の皆さんが自主的に動く自主防災会のようなシステムをこしらえておく必要があると思いますね。



「いままで大丈夫だったから」は危ない

徳島市 60代 男性

ずっと昔、我々がちょうど小学校2、3年生のころに、今回と同じ川の堤防が決壊して、軒下まで水が来たんです。そのときに大きな被害を受けたので、地区の人たちの台風に対する備えや考え方は十分にできていたと思いますが、「40年以上たったから、もう心配ない」というのがどこかにあったのではないのでしょうか。

平成16年は台風が特に多かった年で、5回台風が来てもなんとかなっていたものだから、6回目の台風23号の時には、「避難しろ」と言っても、なかなか言うことを聞かなかったということなんですよ。

それで大変な被害を受けたものだから、あれから、台風がくるといえば、みんな、車とかを高いところに上げています。それがいつか、「上げたけど心配なかった」になり、「もう上げなくてもいい」というようになって、危機感がだんだん薄れていかなければいいのですが。今回の水害で、『災害は忘れたころにやってくる』ことを実感しました。



地元の人間話をよく聞いて！

徳島市 60代 男性 消防団員

よくテレビでは、冠水している場所でもかまわず車を走らせる光景が映っているけれど、水の中を走ればブレーキが効きませんし、しまいには車がエンストを起こしてしまうんですよ。

あと、僕らが「この道は通行止めですよ」と言っても、「大丈夫。だれにも迷惑をかけないから」と言う。そうになると、我々には止められませんのでね。そのまま進んで行って、そのうち車はストップして、いろんな人に迷惑をかけることになります。

状況がわかっている地元の我々の言うことを聞かなければ、命を落とす確率も高くなりますよね。

やっぱり、外からきた人は、被災地に入ったときには、地元の人のお話をよく聞いてほしい、協調性をもって行動してほしい、そう思います。



気がつかない人に知らせる電話連絡網

徳島市 40代 男性

時間雨量にして80mmは降りましたね。何百年と続く家が、はじめて水に浸かったほど、集中的にこの山沿いに降ったんです。

昔からこの辺りは水が出やすいところですから、みんな台風が来るとわかったら、すぐに車を堤防の上へ上げたりしていました。台風の大きさには関係ありません。前もって高いところへ上げておかないと。来てからでは遅いんです。夜、寝静まったところが風雨のピークになることもありますから。

この災害をきっかけにして、寝ていて気がつかない人がおるといかんというので、半年ぐらい前にここら辺一帯の連絡網みたいなものを作りました。みんなの電話番号を知っておいて、お互いに連絡するようにしようということですね。

一番早く、ちょっと危なさそうだとわかった人が、連絡してあげるといことです。



仕事の大事なデータが水の中へ

バックアップをとっておけば良かったな

徳島市 50代 男性

自宅に2階のある人は、水が来るとなったら荷物を2階へ上げますけれど、うちは平屋なんです。しかたがないから、あの時は、イスの上に建具みたいなものを置いて、その上に荷物を置いていました。

水が入ると、いろいろなものが浮いてしまうんですね。床からヒザまで水がきましたから、台そのものが傾いて、上にのせてあったフロッピーやらが、ひっくり返ってしまったんです。パソコンは何とか無事でしたが、水にぬれた仕事関係のデータはぜんぶダメになりました。

データがいったい残っていませんから、途中だった仕事も一からやり直さなければなりません。仕事のデータだけでも、バックアップをとっておけば良かったなと思いました。



危機一髪、家を出た後に土砂くずれ

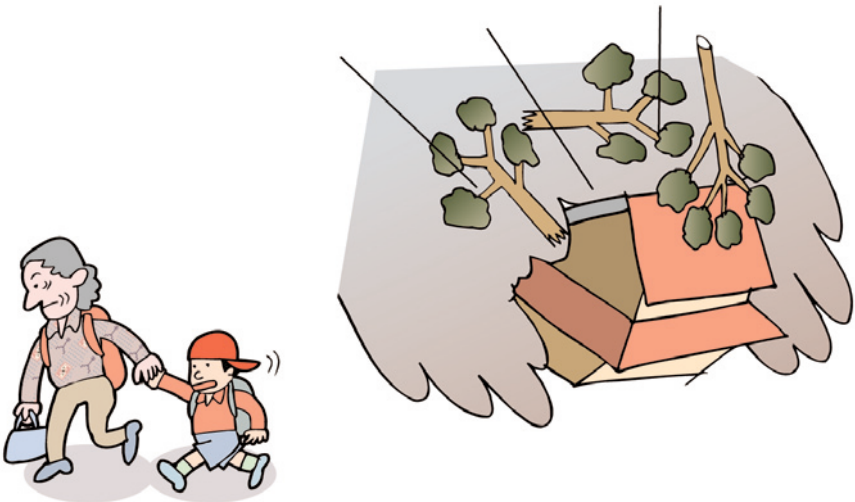
宮津市 30代 女性

その当時、上の子が幼稚園で、下の子が保育所に通っていました。私は仕事だし、家族みんなが川を挟んでばらばらのところにいたわけです。

上の子は幼稚園が終わって実家のほうに預かってもらっていましたが、実家に迎えに行こうにも川を渡らなければならないのです。

で、実家のほうに、「雨がすごいし、川の水があふれてきているみたいだから、私の家のほうに行っといて」とお願いしたんです。それから保育所のほうは主人に引き取りを頼みました。

結局、母が家を出た何分後かに土砂崩れがあって、家は全壊しました。実家は一番山側にあって、その年は結構雨がが多く、何回か近くのがけが崩れていたもので、何となく「怖いな」と思っていました。早く移動してもらって、ほんとに良かったなと思っています。



「立場なくなる」との説得で、母がやっと避難に同意

福知山市 50代 男性

水害当時、私たちの自治会は、自主防災を立ち上げたばかりでした。連絡網など、ある程度かたちはできていましたが、基本的には何もできていないといった状況でした。

取り敢えず自分たちが避難しなければならないということで、私たちの避難先である、うちから200mぐらい離れた市の指定の避難所へ行くことになりました。

ところが、自分の母親が「行かへん」と言っていてきかないのです。うちに居たい気持ちは分かるけれど、これには参りました。

最終的には、僕自身がそういう役をやっているわけやから、そのお母さんが家におるといというのは非常にまずい、つまり僕の立場を理解して、ようやく腰をあげてくれたわけです。

今思えば、なぜ避難する必要があるのかを、年寄りにも分かるように筋道をたてて説明できるようにしておくべきだったと思います。



避難の準備をする間、ジャーのごはんをおにぎりに

福知山市 50代 男性

当時、避難所の毛布が足らなかったという話をよく耳にしました。だけど、あのとき、週末でお父さんたちも家にいたのに、何で自分らの毛布一つ持っていかなかったのか、行政に対してものを言う前に、「じゃあ、自分はどうだったの？」と思うのです。毛布は2枚あったほうがいいし、3枚あったほうがもっといいわけです。

それから、避難の準備をするときには、ジャーの中のご飯を出しておにぎりを作るとか、冷蔵庫のソーセージを袋に入れるとか、いろいろ考えられますよね。

市のほうが人数分きっちり用意したとしても、それを運んで来られない場合もありますから、常に自己防衛策を頭のすみにおいておくことが必要だと思いますね。

毎年9月に地域の防災訓練があって、避難訓練をやっていますが、うちの自主防災としては、できるだけリアルに、必要な荷物を持って逃げる訓練に参加してくれる人を増やしていきたいと思っています。



走りながら仕組みをつくるのは、民間ならではの

宮津市 40代 男性

住民のニーズを集めて、ボランティア活動の希望者に伝える仕組みがある「ボランティアセンター」を立ち上げる前に、実際にボランティア活動のニーズがどれくらいあるのか、被害が比較的少なかった地区からボランティア希望者を募ることができるといったことが知りたかったので、市が緊急連絡で各戸にチラシを配布する際に一緒にチラシを入れてもらい、情報を集めました。

みんな初めてのことで、ある程度走りながら運営方法を考えていかなければなりません。多分、こういうことには行政よりも民間のくふうが役立つように思いました。

ボランティアを受け入れて、現場からのニーズと突き合わせて、どこへ派遣するかというのを決める仕組みにしても、「あっ、こういうことなのか」と、自分で現場に行って初めて気がつく点などがあり、走りながら仕組みをつくっていくということが効果的でした。



掃除しながら「こんなんしていいん？」とボランティアセンター立ち上げ

宮津市 30代 女性

福祉センターの掃除をしながら、何かアクションを起こしていかなければと 思っていました。上司を通じて市長に話をしてもらいましたが、行政のほうもまだどういう行動をとるかの方針が決まっていなかったみたいでした。

私は仕方なくセンターの掃除を続けていましたが、何かだんだんイライラしてくるんですね。何でこんなところで掃除してなきゃならないのかって。

で、思い切って「局長、ボランティアセンターというのを作らなくちゃあかんのと違いますか」って言ったのです。すると、「今度はおまえも一緒に行って説明せい」と言うことになって、市の部長クラスの人のところへ話をしに行きました。

行政のオーケーが出たのはいいけれど、やるって言ったものの、資材もないし、人もいない。「どうしよう」と思いましたが、いろんな人に協力してもらって何とかボランティアセンターを立ち上げることができました。



「要援護者」以外も助けが必要

宮津市 50代 女性

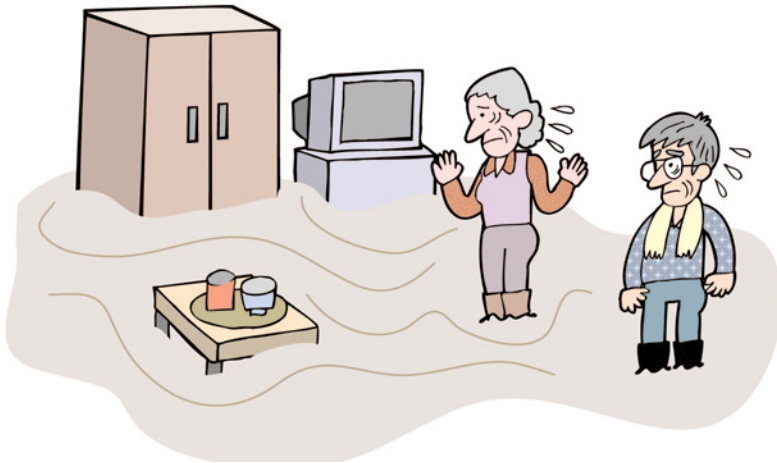
私もじきに高齢者の部類に入るんですが、常日ごろ元気で、高齢者とも思えないような方のことは民生委員*さんや自治会の役員もあまり気にとめていないんです。

だけど、いつもは元気な人たちも、水害後の後かたづけは力仕事なのでお年寄りには大変だったという話をよく聞きました。

今まで気がつかなかったのですが、「要援護者」のボーダーラインっていうか、元気なひとり暮らしとか、夫婦で元気に暮らしている家庭も災害時には助けがいるのに、「援護が必要な人」というくくりから抜け落ちてしまっているんですね。

今回の水害で、そういう人たちのケアをどうするかも、考えなければいけないなと思いました。

* 民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



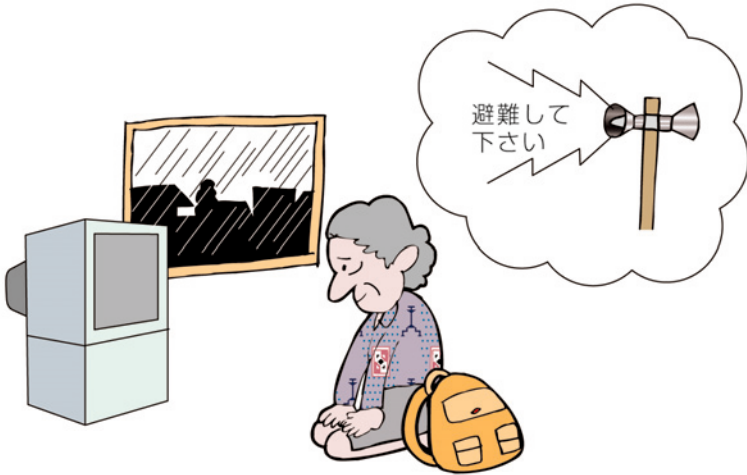
いきなり「逃げろ」といわれても、どうしていいかわからない

福知山市 60代 男性

ほとんどの人が火災のときぐらいしかサイレンを聞いていないので、サイレンを鳴らしても、漠然と水が出ているらしいということはわかって、どういう状況かは理解できていないのです。

だから、「雨が強く降っていますよ」、「水が異常に増えていますよ」、「消防団が警戒を始めましたよ」、「一部の方が避難しましたよ」、「どんどん水が増えていますよ」、「山崩れも起きましたよ」というお知らせの後に、「逃げなさい」言うたら初めて逃げる。

いきなり「逃げろ」と言われて、逃げる者はやっぱりいないなと思いました。これは非常に大きな反省点です。



前例のない豪雨で高齢者の経験が逆作用

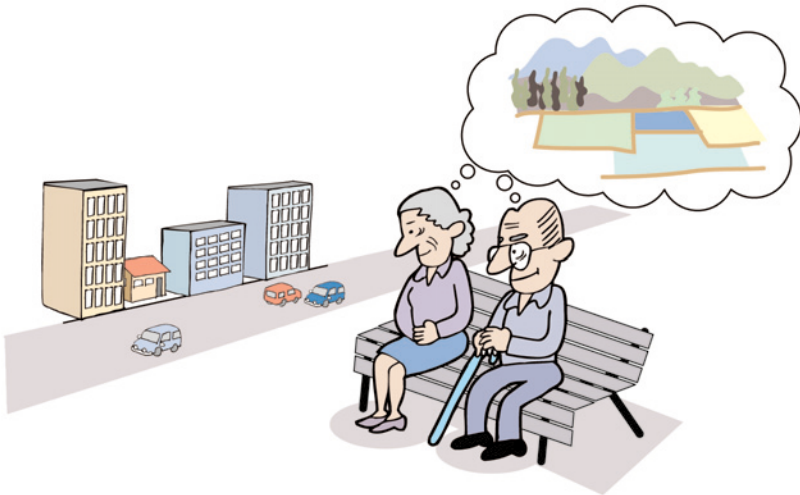
福知山市 50代 男性

お年寄りの中には、「水がつく前には土のにおいがしてくる」とか、「どこそこの田んぼの横の小川の水がここまで来たら危ない」とか、「どこの水路の水があふれ出したら危ない」とか言って、上流の観測による今後の見通しや、ダム放流に伴う増水など、説明に耳をかさない人たちがいます。

実際、「これやったらまだ大丈夫や」と言って、逃げおくれた人がいました。

だから、近ごろは環境や気候が変化して、雨の降り方もかなり違ってきていることや、これまでの経験がそのまま通用しない状況になってきていることをお年寄りにもわかってもらう努力が必要だと思います。

いろんな経験を持つお年寄りが新しい情報や正しい知識を身につければ、鬼に金棒だと思いますよ。



気軽な自主防にと「クラブ」と名付け

安否確認や独居者の避難もスムーズに

福知山市 50代 男性

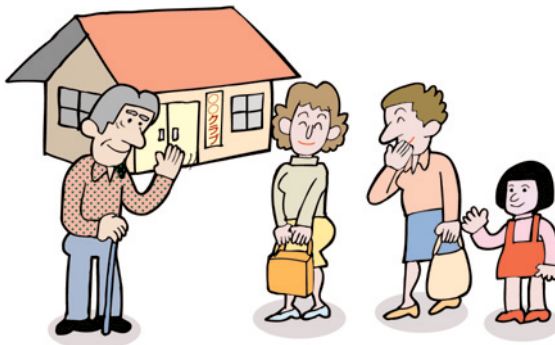
うちは、ふだんから楽しみながら防災のことを学んで、気軽にやっっていこうじゃないかということで、防災組織とかかたい名前ではなしに、「クラブ」という名前にしました。

クラブの上部組織である自治会も、北班、南班、東班、西班というふうに、緊急時に見渡せる範囲を一つの班にしています。そうすれば、ご近所同士で、状況判断をしたり走ったりすることもしやすいと思って、独自にやっています。

今回の水害でも、防災クラブのメンバーが中心となって動いてくれたお陰で、独居老人の方々も割合早く息子さんの家とか、ご近所のところへ避難することができました。クラブ内の緊急連絡網が役だったと思います。

結局、機材を買うよりも何を買うよりも、市民自体が自分で自分を守るという意識を持つこと、まずそれが一番だと思いますね。

それから、機材は一つのところにまとめて置いておくと、そこで何かあった場合にそれが使えなくなるから、例えばバールにしても、3本あれば、3軒の家に分けて置いておく。いつもそんな工夫をしています。



隣町の泥かきボランティアに参加

福知山市 50代 男性

休みの日に、隣町にボランティアに行きました。駅の裏側の広場で受付をすませると、スコップやらを渡され、車に乗り込みました。5人ぐらいが1組になって、1軒の泥かきをするのですが、とにかく泥、泥、泥。半日、ただひたすら泥出しを続けました。

親戚から何からみんな来て、畳を上げて、床下に入り込んでいる泥を外に出すわけです。それを見ながら、私は、「これはいつ乾燥するのかな」、「ふたをしてしまったら絶対乾かないだろうな」と思いました。

案の定、翌年の春になってもまだ、あの辺の家は戸を開けて乾燥させていました。いったん水がつくと簡単には元に戻らないから、非常にやっかいなんです。

「こんなものが毎年来とったらたまらんな」と、改めて災害に対する備えの大切さを実感しました。



川の様子に「まずいで」と言いながら腰上げす

宮津市 30代 女性

あの日、まさかそこまでとは思ってなくて、社会福祉協議会（社協）*に普通に出勤して普通に仕事をしていました。

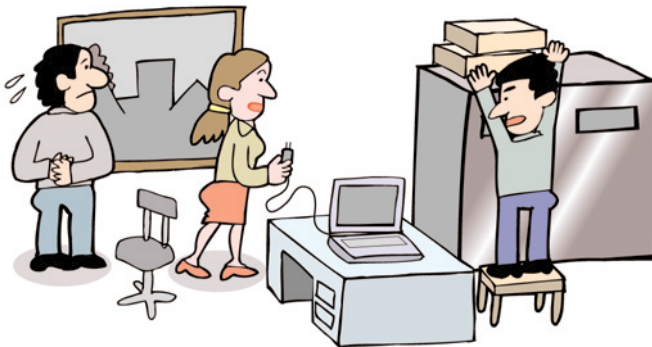
社協には介護保険の関係でヘルパーさんたちがおられるんですが、川の様子を見に出たりしていて、「結構まずいで」みたいな話をお昼ぐらいからしていました。

2時か3時ごろには、「もう川沿いの道は通れないね」というような話になっていましたが、社協としてはほんとうにぼやーっとしておって、「だから何するん？」みたいな感じでしたね。

それが夕方ぐらいになって1階でも雨漏りが始まったんですよ。鉄筋の2階建ての建物で、窓があいているわけでもないのに、「どっからこの水が入ってくるの」というように、建物全体から水がしみ込んできているようでした。

で、あわてて、パソコンや電気製品とかにカバーをかけたり、書類もできるだけ高いところに上げたりしました。もっと早く気づいていれば市民の方に対しても何かできたのにと思いました。

*社会福祉協議会とは、福祉サービスの提供やボランティア活動の支援など、地域の福祉の向上に取り組んでいる非営利目的の民間の組織です。



鳴り続けた電話が停電でパツタリ

宮津市 30代 女性 市役所職員

どんどんどん雨は降りますし、川の水位が上がってきたのが、役所からも見えました。「ひどいぞ、ひどいぞ」ということで、「川が警戒水位*を超えました。水位がいくらになりました」という町内放送が何度も何度も出されました。

私は、ずっと民生委員*への連絡とかをしていましたが、夜になると、今度は遠方にいらっしゃる市民のご家族の方からも、どんどんどん市役所に電話が入ってくるようになりまして、「うちのおばあちゃんちに見に行ってください」、「うちの親戚の家はどうなっていますか」というのが、台風の報道やお天気ニュースなんかに合わせて入ってきて、ものすごい状況でした。

それが、しばらくしたら役所も停電になり、電話が通じない状況になってしまったのです。

外はすごい雨なんですけれども、じゃんじゃんかかっていた電話が急に鳴りやんでしまって、一種異様な静けさになったのを今でも覚えています。

*警戒水位とは、出水時に災害が起こるおそれがある水位です。指定河川では、水位が警戒水位程度または警戒水位を超えると予想される場合に洪水注意報が発表されます。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



ベッドですぐめれのおばあちゃん見て気合い入る

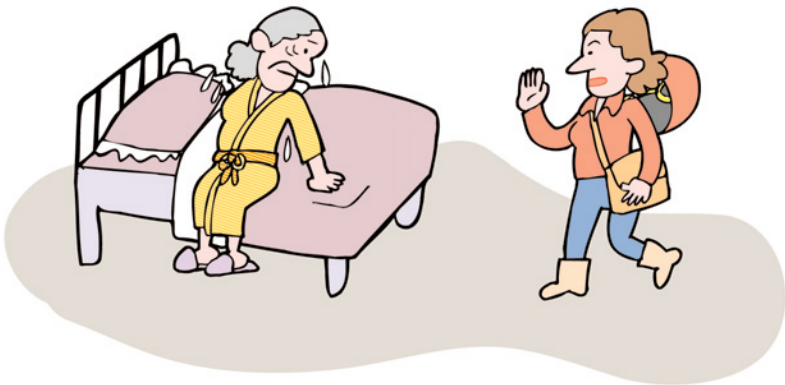
宮津市 30代 女性 市役所職員

台風もちょっとおさまった夜の10時から12時ぐらいにかけて、福祉の職員2、3人でグループをつくって、特に心配なひとり暮らしのおうちですとか、親戚の方などから連絡があったところを、長靴をはき、歩いたり自転車に乗ったりして、見回りに出ました。

私たちが行けたところは役所近くの家だけだったのですが、ある家では、畳の部屋も泥だらけだったので、「長靴のままお邪魔します」と言って、そのまま上がらせてもらいました。

すると、雨が家の中に吹き込んでいて、上も下もびっしょり濡れたおばあちゃんがひとり、真っ暗な中、ベッドの上におられました。

そのおばあちゃんの姿を見て、私はそれまでも市役所の職員として災害対応に携わってきていましたが、「もっとがんばらなくちゃいけないな」と、スイッチが入ったような感じでした。



119番通報パンクでお手上げ

福知山市 50代 男性 市役所職員

台風の影響で雨風が強まっていました。私は市役所の消防本部につめていて、119番通報されてきた方の電話番号を消防署からボタンタッチして受け取って、その人に電話するというのをやっていた。ある時を境に、消防署への通報がパンク状態になってしまったからです。

私が「もしもし」と言った瞬間に、「助けてください！」という声が出て、「今どちらですか？」と聞いたら、「どこかわからんけど、とりあえず電柱にしがみついとる」と。仕事で車を走らせていたら急に水が出てきて、車の屋根に逃げたけれど、どんどん水が増えて、車は流れていってしまったと言うのです。

「もう少し上へ上がれますか？」と聞いたら、「まだもうちょっとあるので上がれます」と。その頃は増水中でしたので、「できるだけ上へ上がって頑張ってください」というほかに、後で、消防隊に連絡を取り、大体の場所を教えて何とか救助してもらいました。

一日そんなやりとりばかりしていたのですが、車の上に取り残されたまま連絡がとれなくなった人のことがずっと気になっていた。明るくなる日、上司に頼んで、1隊編制してもらい、警察官の方と一緒に捜しました。

ようやく捜しあてた時、その人はずぶ濡れで、農家の土間のあがり口で休んでいました。「大丈夫ですか」と言ったら、「うん」と。それでやっと、「ああ、助かったんだなあ」と胸をなでおろしました。



日頃から携帯電話の充電器を持ち歩く

福知山市 60代 男性 市役所職員

隣町の消防から「今、役場が浸水しとるんや！」と電話がかかってきました。あっという間に水があふれてきたので、あわてて書類とかを机の上に上げているところだということです。それに、防災行政無線等の電源も全て1階にあったので、全部ダメになってしまったとも。

夜中に、「これが最後の通信になると思います。もう携帯電話の電池がありません」という連絡が入って以降通信が途絶え、その役場は孤立してしまったのです。

携帯電話というのは、電源さえ確保できれば、非常に頼りになるものなんですね。あれから、職員はみんな携帯電話の充電器をかばんの中に入れて持ち歩くようになりました。水害を経験して、少しは自分たちの意識も高まってきたのかなという気がします。



家を選ぶときは地形に注意

杉並区 60代 男性

水害があった後、娘が結婚して家を買うと言うので一緒に行きました。その場所を見てみると、どうも地形がおかしいんです。

不動産屋さんに「地形的に見て、この辺は水が出るんじゃないですか」って聞いたら、「私たちの知っている限りでは災害はありませんけれども」と言っていましたけど。

結局娘はその家を買ったのですが、この間その辺りに水が出たそうです。前の家のところまで水が来ちゃったけど、娘の家はちょっと上がったところに建っていたから大丈夫だったと言っていました。

やっぱり一度水害の現場を見ると、ふだんの生活の中でも、地形を気にするようになりますね。



犬用の古いバスタオルで大助かり

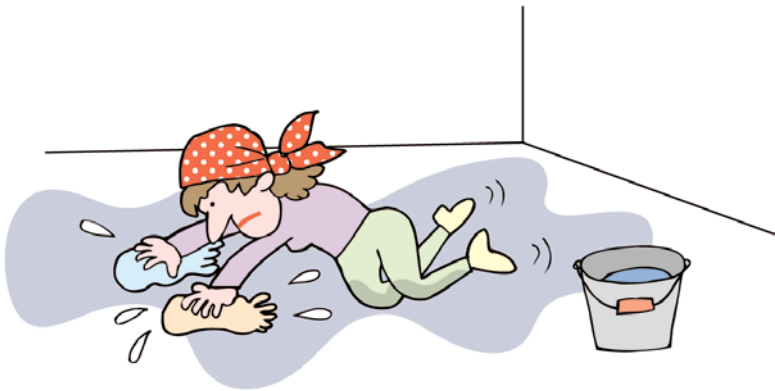
杉並区 70代 女性

地下室の水は、染み込んだものが浮いてくるのか、下から上がってくるのか、かき出してもほんとうにあっという間にまた入ってきちゃうんです。

水がたくさんあるうちは町会の災害用バケツでかき出して、その次はクリーン大作戦でいつも町の大掃除をするときに使うものや、お祭りでお茶を配る時に使うひしゃく、小さなちりとりなどを使いました。水の量に応じて、役に立つ道具がかわってくるんです。

水がじわじわ染み出てくるようになってからは、ワンちゃん用にとっておいた古いバスタオルに水を吸い込ませました。何度も何度も大きなタオルを絞ったので、絞る手が痛くなりました。

町会の役員をしていて、災害用のバケツやらを預かっていたし、犬を飼っていて古いタオルがたくさんあったから良かったのですが、バケツやタオルがなかったら、どうしたかなって思いますね。



大切な着物が泥水で台無し

杉並区 70代 女性

めったに着物は着ないし、居間で着ると犬が鼻をくっつけたりするので、地下室に大きいビニールを二重にして帯から草履までひとまとめにして置いていました。

その中には、16のときに、有名な神楽坂の三味線のお師匠さんからいただいた着物もありましたが、水をかき出すことに夢中で、それが地下にあったこともすっかり忘れていたんです。

気がついた時には10日も経っていて、もう着物も帯も使えなくなっていました。結局、着物も帯もみんな捨てることになりましたが、水を含んだ着物は重くて、ひとりでは持てませんでした。

大切なものは、もう絶対地下室には置きません。



夏でも役立つ使い捨てカイロ

杉並区 70代 女性

一生懸命地下室の水をかき出していたら、お腹が痛くてどうにもなくなりました。水の中にずっといたので冷えてしまったんですね。それで、しばらく上へ上がって、いくつもいくつも使い捨てカイロを貼っておなかを温めました。

冷え切ったおなかは急には温まらないんですよ。主人が一生懸命やっているのでも、自分だけ、おなか痛からって、上へ上がってきちゃっていてもやっぱりいけないと思って、カイロを巻きながら、また下へ行って水を汲み出す作業を続けました。

たまたま家に使い捨てカイロがあったから助かりました。たとえ暑くても、真夏でも置いとくべきだなと思いました。



水圧でドアが開かない

地下室のドアはいつでも開けておく

杉並区 60代 女性

うちもギリギリだったんですが、坂が窪地みたいになっているところの1階の方たちは、一晩腰までつかりっぱなしですから、もう悲劇的でしたね。床下、床上浸水でも、2階のある方は2階に行きました。

ご近所では、楽器の練習をしていたご主人が知らないうちに地下室に閉じ込められてしまいました。奥さんが外から押しても全然だめで、しょうがないからドアを壊すしかないかとかやっているうちにも、水がどんどん増えてきてしまったんです。

水圧がすごくて、全然動けない。必死になってもがいているうちに、水が引いてきて助かったのですが、結局ドアのちょうつがいを壊したんです。道に水がたまって、救急車も入ってこれないから大騒ぎでした。

その方はいつも防音のために地下室のドアを閉めていたのですが、今回そういう経験をして、いつもドアは開けておかなきゃいけないんだということがわかったようです。



川があふれる可能性はあったと後から思う

杉並区 30代 男性

水害の後、何であそこがあんなに冠水するんだろうと不思議でたまりませんでした。

当時はこの地域の雨としか見ていなかったんですが、地面の中は実はつながっているんですね。行政は多分水系全体で考えて、どこそこがいっぱいになったらどこそこに放流するというをやっているんでしょうけれども、普通に生活している私たちはそこまでは知らないんですよ。

あの日はけっこう上流のほうも降っていたから、それも追い打ちをかけるようにこっちに来る。今思えば、確かに川があふれる可能性はあったなと。

近くの川も、よく見ると護岸のほうが高く、周りの道路がちょっと低いのです。いったん川があふれれば、水は低いほうに行くから、当然道路沿いの家も水につかってしまいますよね。

やっぱり、都会では自分の住む地域の自然環境をもっとよく知っておく必要があるなと後から思いました。



2階のトイレから水が噴き出す

洪水時の外出は危険

杉並区 40代 女性

川が増水すると下水が逆流してトイレから水が噴き上がることがありますが、今回の水害では、2階のトイレから水が噴き出した家もありました。そういう時には、ビニール袋に水を入れてポンとふたをしておけばある程度防げるそうですが、ほんとうにビックリしました。

マンホールの蓋が持ち上げられて水が噴き出している箇所もあったので、あの時道路を流れていた水は汚水が混じていたはずなんです。なので、子供たちが感染症にならないか心配でしたね。

臭いもきつくて、洗ってもどうにもならないので、あの日履いていた靴は捨てました。夜でありよく見えなかったから、いろんな危険な漂流物があるところを、平気で膝ぐらいまである水の中をジャブジャブ歩いてたけれど、ずいぶん危ないことをしていたんだなと思います。

マンホールに落ちたり、感染症にかかる心配もあるだけに、洪水時に外出するときには気をつけないといけないですね。



お年寄の「ありがとう」に疲れ吹き飛ぶ

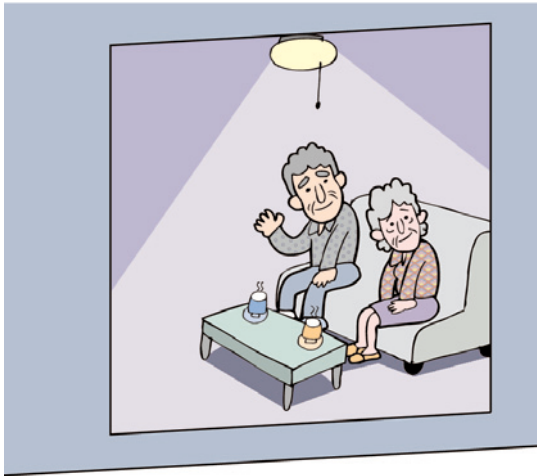
杉並区 60代 男性 消防団員

上流の現場に向かって護岸を歩いているとき、電気がこうこうとついている家がありました。中を見ると、80歳は超えていると思われるお年寄りが二人でソファーに座っているんです。

体調が思わしくないのか、足腰が弱いのかと心配になって、「大丈夫ですよ、雨もやんでいますし、もう水も引き始めていますよ」と声をかけると、「表はどうですか」というので、「水が出ているところもありますけど、大事には至らないですよ」と答えました。

帰りにもう一度その家の前を通ったら、「先ほどはありがとうございました」と声をかけられました。きっと、二人きりで心細かったんだと思います。

私は、そのありがとうの言葉ひとつで、疲れが一気に吹き飛んだような気がしました。



うちも、うちもと、地下室の被害

杉並区 60代 男性 消防団員

住人が舟で救い出されたマンションは、昭和57年にも台風で水が出ているんです。われわれ消防団も連絡を受けてすぐポンプ2台を持って駆けつけましたが、もうテレビ局が10社ぐらい来ていました。以前に水が出たのを知っていたんですね。

地下部分は水が胸ぐらいまでできていました。地下にあった変電機が水に浸かって使えなくなっていたので、私たちは雨が止むのを待ってポンプで水を汲み出しました。

ただ、「自分のところもやられているのに、何でそのマンションだけ先に水を出すんだ」という苦情が周囲から出ましてね。うちもうちもと地下室がある家から何十軒も、紙に番地を書いて、「次はうちへ来てください」って頼みにくるんです。優先順位をつけるのに苦労しました。

昔からそこへ住んでいる人たちなら、地下室は多分作らないと思うんですが、よそから来た人は何も知らないから、便利だからと地下室を作ってしまうんですね。川から離れたところでも、土地が低いところにある地下室には下水があふれて水が出てしまうんですよ。



外出時のご近所の電話番号を携帯

杉並区 70代 女性

水害にあつてからは、以前より雨の量や音を気にするようになりました。ニュースもよくチェックしています。

それと、私は日ごろ外出することが多いので、急に天気が悪くなった時に、自分の家が大丈夫かどうか見てもらうために、近所の人電話番号を持って歩いています。

天気予報である程度わかっても、果たして自分の住んでいる地域にどれほどの雨が降るかってことは誰も把握できないし、場所によって雨の量が少しずつ違ってきますからね。

1軒や2軒の電話番号じゃつながらないこともあるから、近所みんなの電話番号を携帯しています。雨が急激に降ってきた時に誰に連絡しようかなんて、あらかじめ準備しておかないと思ひ浮かばないと思うんです。



思い浮かばなかったSOS

杉並区 70代 女性

自分の家が被害にあったんだから自分で処理しなくちゃって思っていて、行政に連絡したり、近所の人に助けを求めたりすることは全く思いもよりませんでした。

とにかく地下室の水を汲み出さなければと、どしゃ降りの中、バケツを2つ持って、離れたよその家の角っこの雨水マスまで水を捨てに行くんです。それでまた、空っぽになって帰ってきたら、入ってきているほうが多い。焼け石に水なわけです。

それがバカだったってことに後で気がつきました。突然のことでビックリしちゃって、冷静に考えられなかったのです。

たまたま電話がかかってきたので、うちが浸水していると言ったら、その後すぐに、区役所の人が土のう*を持ってきてくれたり、薬局で消毒薬を無料でもらえるように手配してくれたり、どんどん手を打ってくれました。

後になって、「何で早く行政に知らせなかったんですか」って怒られてしまいました。自分のことは自分でということも大切ですが、自分でできないことだっていっぱいあります。声をかければ近所の人みんなもきっと嫌な顔しないで来てくれたと思いますね。

*土のうとは、布袋の中に土砂を詰めて用いる土木資材のこと。適宜、土砂を詰め、袋を縛り積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができることから、堤防の水止めなどに使われます。



防災訓練はどこかで役に立つ

杉並区 70代 男性

9月4日の8時ちょっと過ぎに、ものすごい雷雨、まさにバケツをひっくり返したような雨ですよ。そのぐらいの激しい雨。1時間に120mmですから、予想外の雨が降っちゃったわけです。

あそこで警報を鳴らしたとしても雨の音で聞こえない。何言っているのか、さっぱり聞こえませんよ。

護岸を直してから、もう35年ぐらいたっているのかな。しばらくそういう経験がなかったから、区役所にしてもどこにしても、その対応を考えていなかったと思うんです。

ただ、4、5年前に水防訓練というのをやったんですよ。だから、水がヒザまで来ると部屋のドアが開かないよと、2人でやっても開かないよという体験を実際にしている人が何人もいると思うんです。

それはあくまでも水防訓練ですけれども、そういう事前の訓練というのは、急場において非常に役に立つんじゃないかなと。例えば、どこまで水が来たら開かないよというのが事前にわかると、そうならない前に何をすればいいかという 物事の判断ができるわけです。



ポンプの口にゴミがつまって吸水できず

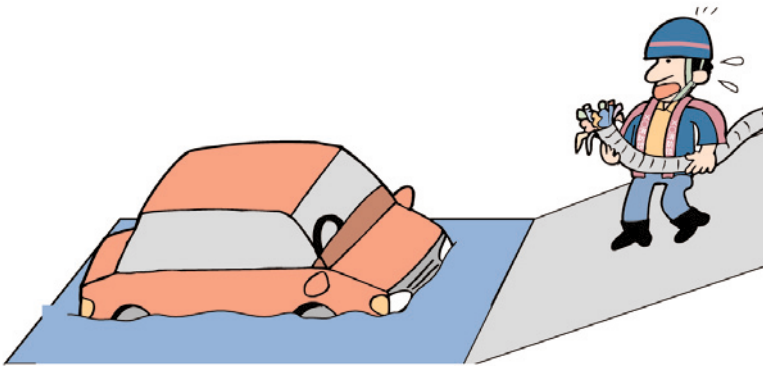
杉並区 70代 男性 消防団員

私たちの町会では、町の中に電気ポンプというのを4台備えてあるんですよ。

ただ、実際あれで排水しようとした場合に、吸水するところに、災害時にごみが入っちゃって役に立たなかったのです。通常はため池から出しますので、ごみが入ってないわけです。

フィルターみたいなのを付けずに、ダイレクトにやっちゃうと、水害のときはいろんなものが浮いているので、口のところで詰まっちゃって吸水できないんです。

だから、水を早く取り除かなければならないときのポンプの使い方、それを考える必要がありますね。



毎年1回、震災訓練の日に水害の記憶がよみがえる

杉並区 60代 女性

9月の第1日曜日にやろうと区長の呼びかけで始めた第1回目の震災訓練のその日の夜に水害にあったから、去年やったときも、「ああ、そう言えば去年の今ごろだったんだね」ということになりました。今年も、「ああ、あれはもう2年前なんだ」ということになるから、みんな絶対忘れないんです。

あの時は、低気圧が異常に発達しちゃって、ドカンと来たわけです。天気予報を聞いて、ある程度予測していたけれど、あれだけのものが来るとは誰も想像できませんでした。で、それがトラウマ*になって、今でも雨が強く降るとすぐ心配になります。

「災害は忘れたころにやってくる」と言いますから、毎年1回、訓練の日にあの日のことを思い出す、水害があったことを忘れないということは、とても大切だと思います。

*トラウマ(心的外傷)：個人に心理的に大きな打撃を与え、その影響が長く残るような体験



震災訓練の後にやってきた集中豪雨

ラッキーではなく、タイムリー

杉並区 40代 男性

うちの小学校では、12年前ぐらいに「おやじの会」というのが作られて、それからずっと毎年夏に防災をテーマにした形のキャンプをやっています。そのほかにも、地域の方々と合同で防災訓練等を企画していますが、どちらかというといふと火事とか地震がテーマです。

「防災倉庫の中には何がある？」から始まって、「倉庫の中にテントがあるからそのテントを借りてキャンプをしよう」、「キャンプをするときのテーマを何にしようか」、「自分たちで火を起こしてみよう」、「水をろ過してみよう」というように、いろんなことをちょっと遊び感覚でやってきました。

集中豪雨のあった日も、朝から校長先生たちと打合せをしたり、簡易トイレやリヤカーの組み立てを「こうやれば簡単にできるね」とか、「ここは問題だろう」なんて言いながらやって、訓練に備えていました。

で、訓練が無事終わった後は、ただのおやじに戻りまして、「お疲れさま！」でもって、みんなでお酒を飲んでいたわけです。まさかその日に水害に遭うなんて、だれも思っていませんでした。ラッキーではなくてタイムリー、そういう感じですね。



駅前はいつもと同じ、川の氾濫想像できず

局地的豪雨の恐ろしさを感じた

杉並区 30代 男性

駅の近くで食事をしていました。確かにものすごい降り方でしたが、川が危険な状態になっているなんて全く想像もしていませんでした。

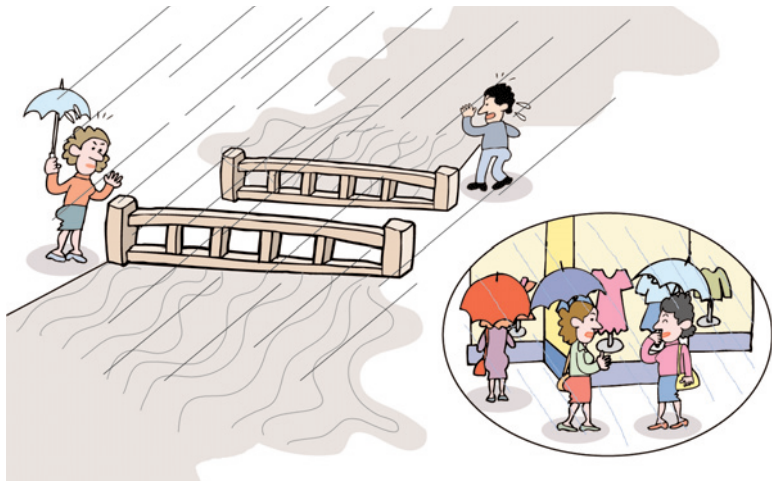
「ちょっとこの雨ひどいね」、「傘がないからもう少し待とう」と店に居続けたのですが、いっこうに止む気配がありません。

「もういいかげんに帰らなくちゃ」と思っていたときに、携帯電話が鳴って、「今、川がすごいことになっている」という連絡が入りました。「どこが?」と。まさか自分たちの街の川があふれ出しているなんて想像もできませんでした。

普通に電車も走っているし、駅のまわりの店には明々と電気がついていて、街の生活のどこかが不自由になった印象は全くありませんでした。

川の近くに住んでいた人たちはすごい大変な思いをしているけれども、ちょっと離れたところでは、「えっ、川があふれているの?」という、のんきな声が次の日でも聞こえました。

都市部特有の局地的豪雨の恐ろしさを思い知らされた気がしました。



お嫁に来てから初めての体験

ご近所の方の連絡で気づく

杉並区 40代 女性

私の家は、川に一番近い通りに面しています。近くには橋があって、ちょうど土地が低くなっているところです。

主人の母なんかは過去に1回あったかなと申しておりますが、私がお嫁に来てからもう何十年になりますが、水害の経験は一切ありませんでした。だから、すごい雨だなと思ってはいても、あそこの川があふれるという認識はまったくなかったんです。

しばらくして、川側にあるお向かいさんから、「今、川があふれて、うちの裏にも水が来ている。どうしよう」という電話がありました。私はずっと学校の役員などをしてるので、気をきかせて電話をかけてきてくれたんだと思います。

「えっ？」と初めてそこで窓を開けてみたら、橋の上に水がわんわん来ていたんです。「これはうちもやばいじゃん」と、傘もささずに着のみ着のままで外に飛び出してみると、我が家のガレージにも水が入っていました。

それにしても、私はたまたま学校の役員をして、知らせてくれる人もたくさんいたので、早めに気づけたんですけれども、そうでなかったら大変なことになっていたかもしれません。



「川があふれてます！」と必死で玄関のチャイム鳴らす

緊急時には、声をかけあって

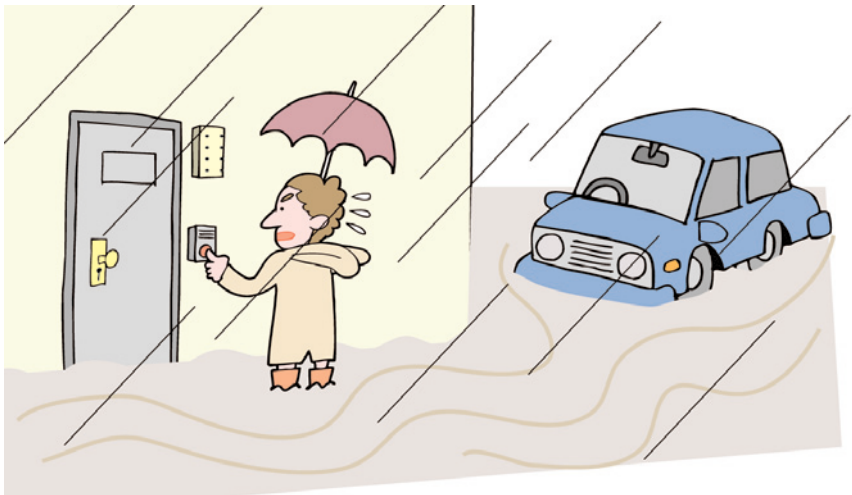
杉並区 40代 女性

とにかくすごい雨音だったし、みんな雨戸やシャッターを閉めているから、外がどうなっているのかわからないんですよ。私も外に出て初めて大変な状況になっていることに気がつきました。

私は膝ぐらいまで水につかりながら、うちの前の通りを端から1軒1軒ピンポンを押して、「今、川があふれています。ガレージの車をとにかく早目に上げたほうがいいですよ」と言って回りました。

あの時ほど、スピーカーが欲しいと思ったことはありませんでしたね。私が玄関でワーワー言っていると、何かと思って雨戸がガラガラとあき、「おーっ」と初めて状況がわかったというお宅が何軒もありました。

今は住宅の防音も良いので、やはり、緊急時には、となり近所に声をかけあわないと、大変なことになると感じました。



街の灯り消え、警備灯もって交通整理

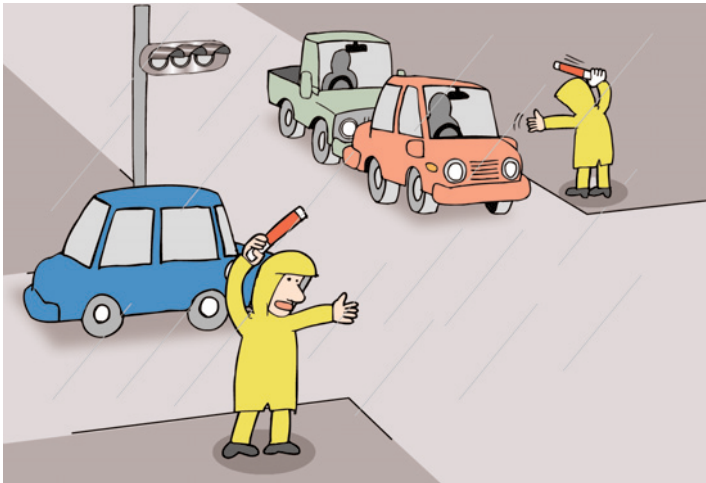
杉並区 40代 女性

停電で信号が消えてしまったので、仲間と手分けして、「ここは今通れません」とか、「そっちに行ってください」とか、交通整理をしていました。

実際、道路に水がたまっているのを知らずに入り込んで、乗り捨てられた車が何台もあって邪魔になっていました。

でも、車を運転している人はそんなに深刻だと思っていませんよ。その頃は雨もそれほどではなくなっていましたから、警備灯を持って指示をしている私たちに、「何の権限でやっているんだ」と言う人もいました。要するに「何をそんなに大げさなことを言っているんですか」みたいな雰囲気もちょっと感じました。

警察も消防も要請があれば行かなきゃならないけれど、今回のように狭いところに被害が集中した時は、対応しきれなくなると思うんです。やっぱり地域の力が必要だということを、もっとたくさんの人に知ってもらえたらと改めて感じました。



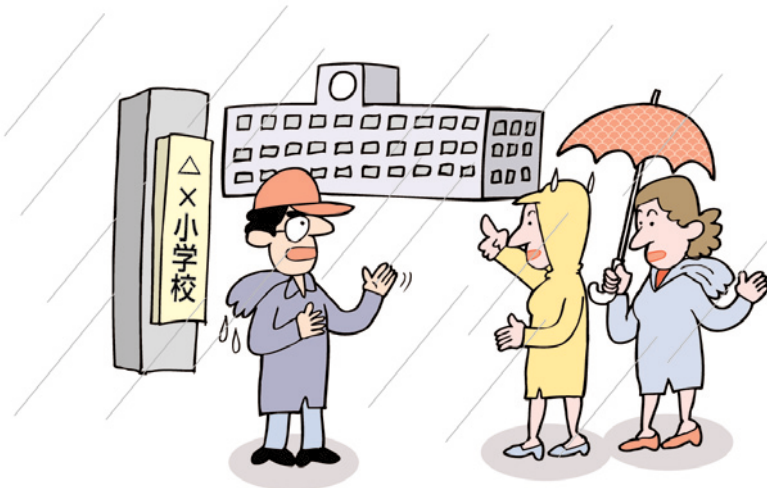
PTAと「おやじの会」の連携で避難所開設

杉並区 40代 女性

私たちPTAの役員とお父さんたちの「おやじの会」は、日頃から情報を共有していて、何かあったらすぐに連絡しあえるネットワークができていました。

あの日、川の水位がどんどん上がってきていたので、これはどうにかしなきゃいけない、とにかく小学校を開放しようということになった時、PTA会長が副校長先生の許可を取り、鍵を預かっている「おやじの会」の会長が鍵で機械警備を解除してというように、連携は見事でした。

やはり、いざという時にこそ、ふだんからの顔の見える関係が重要なのだと思います。



避難所は恵まれた場所とは限らない

まず各家庭で、備えをしておこう

杉並区 40代 男性

小学校を避難所にするということに決めて、防災倉庫を見に行ったとき、まず「足りるかな」と思ったんです。初めてのことで、何人来るかわからなかったから。

毛布も一部は置いてあるんですが、ほとんどは川の向こう側にある災害備蓄倉庫にあるので、このまま雨が降り続いたら、実際どうやって取りに行こうかと思っていました。

学校の体育館と言え、夏は暑く、冬は寒いというところですから、避難所に行けば安心できるかという、気持ち的にはみんな一緒に心強いという感じはあっても、物質的には決して恵まれている状況ではないんですよ。

それをみんながちゃんとわかってきていない。前もって、自分たちの家で備えておかなければならないこと、それから、こうなったときには自分たちはこういうふうな対処をするんだという心構えというものを各家で決めておいてもらわないと、いざという時にパニックになっちゃって、受け入れるほうも受け入れられないという状態になっちゃうのです。そういう認識をまず各家庭で持っていないといけませんね。



サラリーマンに避難場所を覚えてもらうには

杉並区 40代 男性

地域でよく活動している人は別にして、ここいらは都市部なので人の入れ替わりも激しいから、「学校に逃げろ」と言ったら、学校がどこにあるのかもわからない人もすごく多いと思います。

普通のサラリーマンは、家と駅の往復だけで、子供がいなければ学校がどこにあって関係ないという感じでしょう。案外そこが盲点だと思います。防災倉庫がどこにあるのかは、なおのこと知らないだろうし。

駅には避難所の場所を示す看板が設置されていますが、それを日頃意識して見ていらっしゃる方がどれほどいるかということですね。

なので、大きな電光掲示板など、目立つようなもので、地域の防災地図をアピールしてもいいと思うんですよ。



補充忘れて、大よわり

杉並区 40代 男性

小学校を避難所として立ち上げてすぐに停電になってしまいました。あわてて倉庫に行ってみると、燃料缶にはガソリンが4分の1ずつしか入っていませんでした。

実は、偶然にも水害にあったその日に震災訓練があり、学校の防災倉庫にあった燃料を使ってやったあと、補充をしていなかったのです。

なんとか残っていたガソリンで、発電機を回して、どうにか電気をともしたわけですが、停電がもっと長引いていたらお手上げだったと思います。訓練で使って本番になかったなんてシャレにもなりませんね。

やはり、非常用の物資はすぐに補充しないとイケないんだなと思いました。



災害のときには、子どもたちも大活躍

杉並区 40代 女性

小学校が避難所になったとき、上の子に「小学校が避難所になったよ」って、近所の友達で、危なそうなところに住んでいる子にメールをさせました。

下の子には、「ママは雨がひどくて携帯を持ってられないから、あなたは玄関にいて携帯を持っていなさい」と言って、外を見回っては家に寄って電話をしていました。子どもは言われたとおり玄関にいて、その間に私にかかってきた電話の内容を伝えてくれました。

上のお姉ちゃんは中学3年生で、下が小学校3年生。中学生のお友達の中には避難所の手伝いをしてくれた子もいました。

そんなふうに、災害の時は、けっこう子どもたちも頼りになりますね。



やっぱり帰ってきてよかった家族一緒

島原市 50代 男性

避難所の集団生活は、プライバシーがないから、神経がつかれて、2、3日で頭がキーキーいう感じになりました。

ようやく自分の家に帰れることになって、ようすを見にいくと、家の中は火山灰がどっさり積もっていて、とても住める状態ではありませんでした。

噴火が始まって5年目に、家のリフォームをしてから、長男やよそに避難させていたおばあちゃんを呼びもどしました。「お母さん、もう大丈夫だよ、ここにずっと住むからね」と言って、その晩は、家族がまた一緒に生活できるようになったことを喜びあいました。

やっと戻れた自分の家だから、もう、よほどのことがないかぎり避難したくないと思いました。



足りなかった心構え

自宅から火砕流*見物

島原市 70代 女性

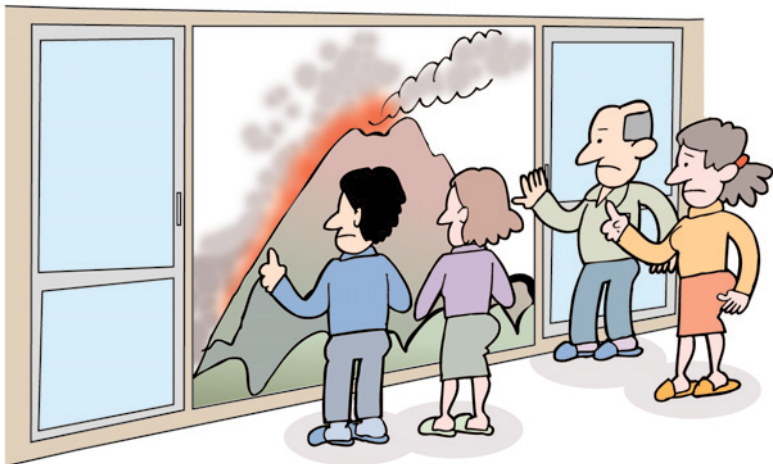
うちの居間の戸を開けると、火砕流が見えるんです。ぱっと赤くなったら、電気を消して、真っ黒い空に真っ赤な明かりが下って行くのを、「今、2回目」なんて言いながら、まるで花火見物でもするように見ていたんです。

親戚なんかも、「ちょっと遊びに来ん？このごろはきれいかよ、うちの茶の間から見えるから」と言ってきてね。

実は、火山の知識のある息子から、「そろそろあぶないから、お母さんたちは逃げる用意をしときなさい」って言われていたんですよ。「家族と東京に行くから、避難するときは長崎の家を使っていいよ」とカギまで送ってよこしてね。

でも、わたしは、「何を言っているの？」と、耳を貸しませんでした。火砕流のほんとうの恐ろしさを、想像することもできなかったのです。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



避難所の消灯時間早く困った試験勉強

諫早市 30代 女性

当時、一番困ったのは、避難所の消灯時間が早かったことです。商業高校に通っていたんですが、毎月のようにある検定にそなえて勉強しようにも、夜の時とか10時に電気が消えてしまい、本を読むこともできませんでした。

仕方がないので、消灯時間前に一生懸命やって、試験の前には、友達のうちに泊まりに行って、勉強させてもらいました。

学校では、避難している子どものほうが少なく、宿題も差別することなく同じように出ていたので、きちんとしないといけないと、わたしなりにがんばりました。

避難所の生活は、とにかく不自由でしたが、家族と一緒にいられたので、子どものわたしは、それほどつらいとは感じませんでした。



避難所や仮設を転々、引越しのベテランに

諫早市 30代 女性

避難している間、避難所から仮設住宅に入るまで、あちこちの体育館などを転々としました。それから、仮設に入った後も、シロアリがでたとかいろんな理由で、別の仮設へ4回も移動しました。

仮設住宅は狭いですが、冷蔵庫や洗濯機、机など、けっこう荷物が多いんですよ。いついつまでに移動となると、いっせいにウワーって片づけました。

最後のほうは、父の指示にしたがって、さっと引っ越しできるぐらいじょうずになりました。食器を割れないようにするにはどう包めばいいとか、最後まで出して使う可能性があるものは、部屋の手前に置いておけとか、コツがあるんですよ。

引越ばかりでたしかに大変でしたが、災害にあって自分の家に住めないとなったときに、避難所だったり仮設住宅だったり、自分がいられる場所があったこと自体すごくありがたいことだったんだと、今、おとなになって思います。



幼稚園の避難訓練きっかけに話した被災体験

諫早市 30代 女性

当時は高校生だったのですが、大人になって2人の子どもの親になって、もし、今同じような状況になった場合はどうだろうと考えると、見方が違ってきますね。

災害のニュースを見たりすると、子どもが幼稚園や学校に行って、主人が仕事で出かけている間に災害が起きたときにどう集合するかとか、普段からきちんとしておくべきだなと感じますね。

当時は、学校に行って勉強するだけで精一杯だったんですが、避難所には妊婦さんもいれば、お年よりの方もいらっしゃるし、生まれたての赤ちゃんをダッコしている方もいらっしゃって、今になるとその人たちの苦労というか、大変さがよく理解できます。

子どもから、「幼稚園で、お山が燃えていますよという放送があって、避難訓練をしたよ」と言われた日には、自分の体験を聞かせたりしています。



家族4人でブルーシート

島原市 50代 男性 市役所職員

避難区域は、どこかの道路で線を引くわけです。そうすると、道路を1本へだてて向かいは避難区域、こっちは大丈夫ということになるんですが、「じゃあ、道路1本へだてただけで、ほんとうに安全なのか」と、みんなが思う。だから、避難区域ではないけれども、ここら辺は危ないだろうと避難所にくる人もいました。

だれも火山災害の経験がありませんから、これからどうなるのかという不安でいっぱいだったんですね。市の職員が家庭の事情で地域を離れても、「市の職員も逃げた」といううわさが広がって、まわりの人がバツと逃げるとような状況でした。

わたしも市の職員としての責任を感じながら、ほとんど家に帰らずに災害対応に追われていました。家は警戒区域にありましたが、家族のことを考える余裕もなかったので、とりあえず実家に避難させました。

1カ月ぐらいしてから、わたしのおばあちゃんが住んでいた市内の家に移りました。それこそ何もないんですよ。で、ブルーシートをもらってきて、それに親子4人がくるまって寝ました。その時が今までで一番「家族的」だったと思います。



話し合っておくべきだった避難先

島原市 50代 男性

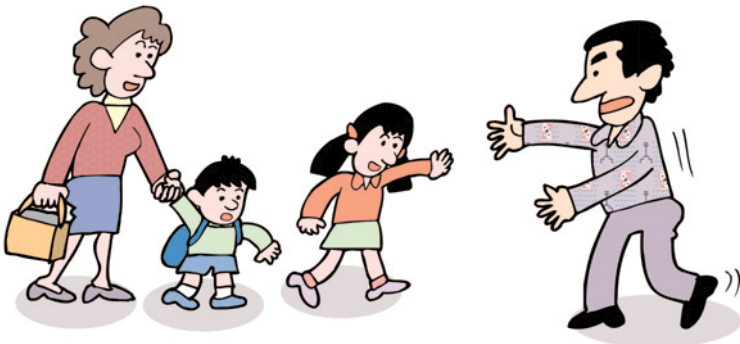
大火砕流*の際、市外にいたので、「家族は大丈夫だろうか」ということで頭がいっぱいでしたね。避難場所に指定されていた近所の中学校の体育館には、避難できないという情報が入ってきましたので、「そしたら避難場所はどこだろう。どこに行けばいいんだろう」って、車を走らせながらずっと考えていました。

で、とりあえず、市の体育館に行ってみたんです。でも、ここにも家族は見あたらなくて、あわてました。子どもは小学生だし、一番下の子はまだ4歳ぐらいでした。どこでどうしているのだろうか、心配でたまりませんでした。

それから、交通規制がしかれていないところに親戚があったので、そこに行ってみると、家族全員がいたわけです。ほんとうにホッとしました。

噴火に限らず何かあったときには、どこに行くことにするよとか、家族で避難経路についてよく話し合っておくべきだなと、そのときつくづく感じましたね。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



すぐ終わると思った体育館の避難

島原市 50代 男性

平成3年の6月に大火砕流*が起きて、体育館に避難したものの、「いつきたてば終わるだろう」と思っていました。

しかし、わたしたちの地域が警戒区域（立入制限区域）に設定されてからずっと延長、延長でね。「8月のお盆には」と思っていたのにダメで、「それなら正月には帰れるだろう」と思い直したけれど、それもかないませんでした。もう、その時点で、なかばあきらめましたね。

警戒区域さえ解除になれば、家の荷物でも何でも持ち出せると期待していたのだけれど、そうこうしている間に、今度は土石流*が起こって被害が拡大していきました。

自分の仕事をしたくても、建築資材や道具をとりに帰ることもできない。長引く避難生活で、そのときの経済的なダメージが今でも残っています。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。

*土石流とは、谷に積もった石や土砂、火山灰などが長雨などによって大量に流出するもの。数十トンもある大きな岩でさえ石ころのようにおし流してしまうほど大きな破壊力をもっています。



悲しかった小学校の焼失

南島原市 20代 女性

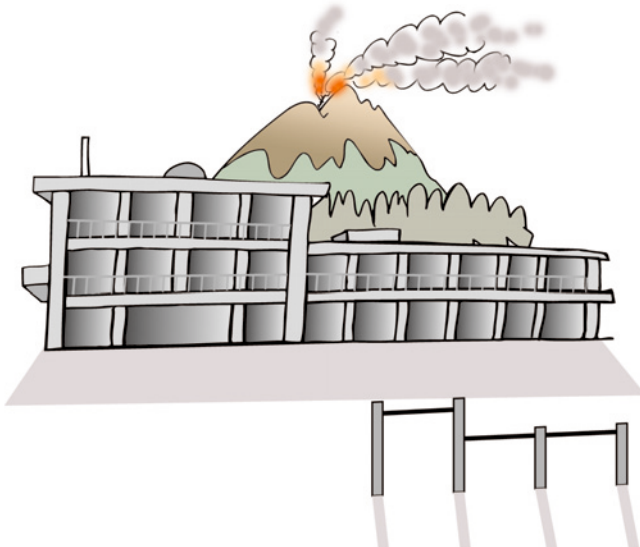
当時わたしは中学生でした。その日は休日だったので、お姉さんと一緒に船に乗って町に買い物に行きました。あのころは、噴火のために国道が通れず、市中心部への移動は船を使っていたんです。

で、帰る途中、乗っていた高速船が急に海の上で止まって、船の中の電気もぜんぶ消えて真っ暗になりました。止まっていたのは、10分か20分ぐらいだったと思います。何ごとかって感じでした。

船から陸のほうを見ると、何か大きいものが山から下ってくるのが見えました。それが火砕流*だったんです。

避難所にもどってから、わたしたちの小学校が、その火砕流で焼けてしまったことを知りました。大切な思い出がなくなってしまったようで、ほんとうにショックでした。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



見知らぬおじいさんたちと手紙で交流

改めてわいた感謝の気持ち

島原市 20代 女性

あのころ、わたしたちの中学校にも、救援物資がたくさん送られてきました。で、先生の指導で、みんなで手分けしてお礼の手紙を書いたんです。

そうしたら、返事が来ました。関東のほうの人で、年を取ったご夫婦でしたが、自分のことのように心配してくださっているのが、とてもよくわかりました。

うれしくて返事を書いたら、今度は梅干しが送られてきましたので、両親がお礼にカステラを送りました。おじいさんたちもわたしのような子供から手紙が来るとうれしみたかったですし、元気であるんだと安心されたみたいでした。

全国から救援物資がとどいて、だんだん当たり前みたいになってきたときでした。手紙のやりとりで、送ってくださる方の気持ちがよくわかり、ころから感謝するようになりました。



商店が元気出そうと「元気市」

被災者とはげまし合い

島原市 60代 男性

大火砕流*で亡くなった方もいらっしゃったので、われわれ商店主も「今年はまだ夏の土曜夜市はやめにしよう」という感じでした。でも、「やっぱりカラ元気でもいいからやろうよ」ということになり、土曜夜市を「元気市」という名前に変えてやりました。「元気を出そうよ！」っていうことでね。

当時、まだ仮設住宅がなくて、せまい体育館におおぜいの方が避難していました。避難所はプライバシーもなくて、みなさんちょっと精神的にきつそうにみえたものですから、いつも売り出しの時に配るお楽しみ券を「気晴らしに町に出てきて、楽しんでくださいよ」とって、持っていきました。

お楽しみのなかみは、縁日によくある金魚すくいとかですが、思ったよりたくさんの方が来てくれて、久しぶりに商店街にもぎわいました。

みんなの笑顔を見ていると、「元気市」をやって良かったなあと思うようになりました。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



必要だった火山の知識

噴火後からでも学習を

長崎市 40代 女性

記者としてほんとうに悔しいのは、平成3年の6月3日に大火砕流*が発生して、多くの方が犠牲になるまで、私自身、恐いと思ったこともないし、危機感が全然なかったということなんです。

実は、その数日前に、大学の先生に、「記者さん、マスコミが今いるあの場所は、もうほんとうに危ないよ」と言われたんです。そんなにきつい調子ではないけれど、「ほんとうに危ないから、下がりなさい」と。

その「危ない」という言葉を、「そこにいたら死ぬんだ」というふうに置きかえて理解できなかったのは、火山に関する基礎的な知識が不足していたからだと思います。平成2年の噴火以来、あれだけ時間があつたのに、私たちは火山のことを勉強していませんでした。

今なら、噴火前の煙があがっているだけの状態であっても、先生の忠告に耳をかたむけることができる、そんな気がします。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



やっぱり大切地元で商売

島原市 60代 男性

私たち商店主としては、噴火で被災された方のことも心配でしたが、まず「自分たちのこれからはどうなるんだろうか」ということを切実に感じていました。いつまでこういう状態がつづくのか、まったく先が見えませんでしたから。

真っ先によその町でお店を出すということを考えたんですよ。だけど、やっぱり、島原は自分が生まれ育った町ですからね。

商店街なかまの多くも、シャッターを閉めて商品を引き揚げようかというようなところまできましたが、もし引き揚げてしまったらどうなるのかを考えると決心が付きませんでした。

けっきょく、数は少なくとも町の人たちがいる間は、商売人は最後まで商品を供給しなきゃいかんということで、ここに残ったわけです。



災害中は開店休業

若手のイベント企画で人集め

島原市 50代 男性

火山灰の処理をするばかりで、お客さんも少なく、1日何もすることがないんですよ。で、商店街のなかまとグチを言い合いながらも、何かできないかなと話をしていました。でも、ある程度いい案が出て、具体的なところまで話がいっても、実行できないという状況がずっと続きました。

噴火災害は地震なんかと違って、どれぐらい時がたてば元にもどれるかがまったくわからないので、精神的にきついんですよ。

そんな時、有り難かったのは国の助成金でしたね。せっかくの援助を無駄にしないように、220店舗ある6つの商店街から3人ずつの若手を出して委員会も作って、なかまといろいろ話し合いました。

それをきっかけに、町の良さを見つけだして、自分たちで算書をつくって、企画書を出してということが行われるようになりました。災害から立ち直ろうと必死だったのですが、若手を育てることにもつながったように思います。



火山灰で商品にキズ

雨どいがないほうがいい

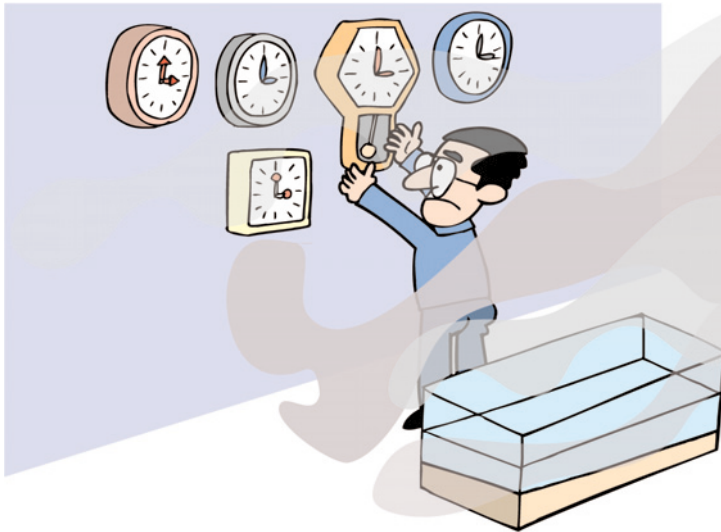
島原市 60代 男性

火山灰、あれはひどかったですね。農業、漁業、全部に被害が出ました。わたしたちの商店街も、風の向きによってはものすごい量の灰が降りましたので、そのたびに、店の商品にキズがつかないように奥にしまったりして大変でした。

店のつくり自体が、お客さんが入りやすいように広く開けてありますし、島原の灰は、アルミサッシでも入ってくるような、きめの細かい灰だったんですよ。

こまったことに、灰は雨にぬれると固まってしまうんです。だから、雨どいの中にたまった灰は、十何年たった今もまだ中にたまっています。

雨どいがつまっちゃうと、降った雨が変な方向に流れるから、火山灰が降るところは、かえって雨どいがないほうがいいんですね。経験してはじめてわかりました。



避難所はすべて一緒ではない

島原市 50代 男性 市役所職員

避難所とひと口で言っても、知り合いや家族が亡くなっている人たちがいる避難所や、家が燃えてしまった人たちがいる避難所もあれば、「まだ安全なんだけれども、もう少し範囲が広がるかもしれないから避難している」という人たちがいるところもあり、さまざまです。

わたしは、市の職員として地区の役員たちと一緒に毎日各避難所を回りながら、いろいろな情報を集め、苦情を聞いて、それを市役所に届けるという仕事をずっとしていたわけですが、避難所によって、温度差というか、その場のふんいきに大きな違いがあるのを肌で感じました。

避難生活が長引く中、火砕流*の恐ろしさを知っていたなら、もっと早く避難できたのという思いが日増しに強くなりました。当時、行政も、市民も、火砕流そのものの知識がなかったし、火山についての正しい情報も得ていなかったのです。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



誰の言葉信じていいかわからず

島原市 50代 男性 市役所職員

わたしたち市の職員は、一晩中避難所につめて、いろいろなお話をするという仕事をしていたんですが、「何月何日に大きな噴火があるらしい」というウワサが、何回も流れました。

科学的に根拠のない話が、あっという間に広まってしまうんですよ。恐怖感や不安感でいっぱいなときですから、何月何日というように、はっきりした日にちを言われると「じゃあ、注意しなきゃ」となるのだと思います。

実際には何もないわけですが、避難所の方たちは、そのたびに、恐怖におびえていらっしやいました。近くにいるわれわれも、どうすることもできませんでした。

わたしも、ある日、報道機関の人から、山が危険な状態だと聞いたのですが、火山に関する知識がまったくありませんでしたので、信じていいものかとも迷いました。もっと、正しい情報をみんなで共有できるしくみが必要だったと思います。



自主防災会にはお年寄りや子どもも参加

東松島市 70代 男性

今回はさいわい人身事故がなく、まだ救われましたが、災害が起きたときにはここに集まるとかいうものは、きちんと前もって決めておいて、それをみんなが守らなくちゃいけないと思いました。

例えば、災害時に市のほうから食料を持ってきてくれたときに、めいめいに届けてもらうわけにはいかないわけで、やっぱり、自主防災会をたちあげておいて、何か起きたときに、みんなの考えが同じで、同じ場所に寄れるようにしておく必要があるのです。

最近は自主防災会が増えていて、わたしたちのところも、今までの町内会をベースに自主防災会としての活動をはじめています。定期的にみんなと話し合ったり、おじいさんやおばあさん、子供たちにも防災訓練に出てもらったりしています。

この間も、防災訓練のときに、4年生ぐらいの子供に消火器を実際に使わせて、「ああ、オレでもできるんだ」ってやっているわけですけど、そういうふうなこともやってみればね、何かのときに役に立つ場合もあると思います。



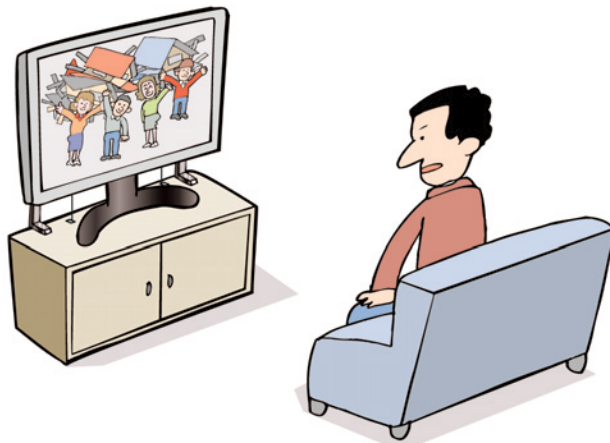
無事を知らせることも大事

東松島市 60代 女性

仙台にいる息子が、いくらかけても電話が通じないので、心配してこちらに向かったけれども、途中で車が混んで動かなくなっちゃったんですね。この辺の道路はみんなわかっているから空いている道を選んで、遠回りして午前11時ごろにようやくたどり着いたんです。

私は家を片づけるのに必死でその時は気がつかないのですが、近所にテレビ局が来ていたんですよ。で、息子に「お母さん、テレビ中継をしているときに顔を出してくれば、安心できたのに」と言われました。前のうちの奥さんとかは映ったというのです。

なるほど、被害状況を映すのも大事ですけど、この地区の人たちが無事ですよって、顔を見せるというのも一つのアイデアだなと思いました。遠くの親戚がそれを見て安心しますからね。テレビ局の方が「みなさん、集まって！」なんて声をかけてくれると出やすいななんて思います。



船頭さんは誰ですか

決めておくべきだった役割

宮城郡 50代 女性 行政職員

役場の中に「災害対策本部*」が設置されたらだれが本部長になるというのは、カタチ的には決まっていたんですけども、やっぱりこういう災害になると、いろいろな方面でいろいろな指揮をとる人が出てしまうので、「だれの意見を聞いたらいいの?」という感じでした。

船頭さんは1人じゃないと船は進みませんから、だれが船頭さんなのかと。そしてだれがこぐのか、だれがその船に乗るのかということなんです。

想定されていないことはいっぱいあるし、被害の大きさによって動きは変わるにしても、やっぱり最低限の役割分担を決める必要があったなと思います。

その後に、そういう反省もあって危機管理課という部署ができたんです。まだ、実際動くときにどうするんだということまでには結びついていないかもしれないけれど、担当部署がはっきりしていれば職員も動きやすいと思います。

*災害対策本部とは、災害が発生したときに設置され、被害状況の把握や応急対策を実施する組織のこと。



薬持ち出せず、避難所で大弱り

自分の薬は肌身はなさず

輪島市 60代 女性

年寄りの人がたくさんおるでしょう。避難所に行って感じたのは、お年寄りみんな常にお薬を飲んでいるから、どんなときも自分の薬は肌身はなさず持っていなければいけないということです。

夜中の2時ごろ、おばあさんが避難所のすみでちょこんと座っていたので、わけを聞くと、「リュウマチで痛くて眠られん」と言うのです。で、連絡すると、すぐにお医者さんが看護婦さんと一緒に来てくれたんです。それにはほんとうに頭が下がりましたね。

先生が「これを飲んで」と痛み止めの薬を渡していると、それを見て「私にも薬をください」と言う人がいっぱいいました。引き出しに置いていたから、とっさに持ってこられなかったという人が多かったですね。だから、前もって何かに分けておいて、いつでも持って逃げられるようにしておかなければいけないとつくづく思いました。



息子からのリュックサック、毎日枕元に

輪島市 70代 女性

私たちは上水道だけでしょう。やっぱりこういうときに井戸でもあればいいなと思いました。

避難所の横に給水車が毎日のように来たもので、バケツでもらったんですけど、重くて運ぶのがたいへんでした。

ここはそんなに地震もないし、火事があっても周囲が空いているから大丈夫やわと、ほんとうに安易な気持ちでおったけど、そうでないなと。

で、これからは非常用の食べ物とかはやっぱりちゃんと備えておかないやならないなと思っていたら、息子がリュックサックを買って送ってきてくれたもので、そこへ全部一通り詰めて、毎日枕元に置いて寝ています。



「端数クラブ」のお蔭で募金活動もスムーズに

東京都 50代 男性 会社員

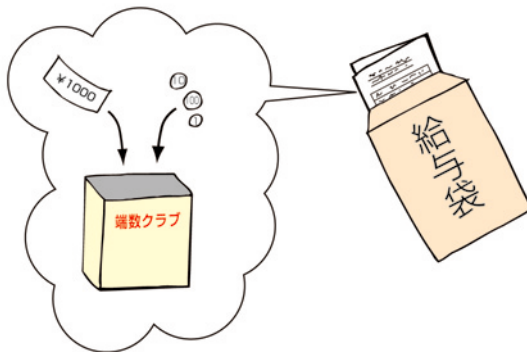
一定の規模の災害に対して、会社としてできる貢献のレベルをある程度決めているんですが、社内に「端数（はすう）クラブ」というグループがありまして、被災地にお金を送ったりするときの事務局的な役目をしています。

そのクラブは1990年にできたのですが、しくみは簡単で、我々の毎月の給料の端数を、1口99円単位で、5口とか、自分で決めて応募すると、それを会社が自動的に給料から天引きして、クラブの口座に入金するというものです。

それから、会社が社会貢献の一環として、その天引きした額と同じ金額を足してくれますので、お金が2倍たまります。

日ごろからそういう運営母体があるので、大きな災害があったときの募金活動もスムーズにできますし、新潟県中越沖地震でもかなりの金額が集まったようです。

一概には言えませんが、モノをもらうと現地サイドでは結構迷惑なこともあるようです。だから、被害を受けたところには、お金を送ってあげるほうが現地での活用度が高いのではと思っています。様々な視点で考慮しながら対応を決めることが肝心ですね。



やりがい求めるボランティアの調整しきれず

宮津市 50代 女性

ボランティアに来る人は、当然困っている人の家に行きたいと思っている人が多くて、ボランティアセンターとしてそういう人をどうさばくか、行き先をどう見つけるかが結構大変でした。

「もっとしんどいことをさせろ」とか、「こんなことをしにわざわざバスで来たんじゃないぞ」とみたいな声もありました。確かに、1,200人とかいうあまりにも大きな人数の団体を受け入れたこっちも問題で、調整し切れなかったということも事実です。

結局のところ手挙げ方式で、「うちに来てください」という人のところに行ってもらいました。行政や自治会のほうからも、「何かないですか」とみたいな声かけはしてもらいましたが、やっぱり自分から手を挙げた人のところに行ってもらうことがほとんどでした。

後で、参加した人から、「声を出した人だけでなく、ちゃんと行くべき人のところに行ったのですか」とみたいな手紙をもらいました。

そう言われる部分もあったかもしれないと思うこともあるけど、どういうやり方が良かったのかは今でもちょっとわからないんです。



悩んで決めたボランティアセンターの閉鎖

宮津市 30代 女性

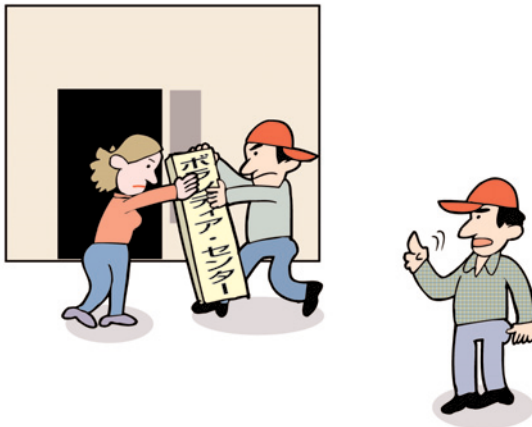
ボランティアセンターの立ち上げ当初から、「いつまでやるのか」が頭の中であって、だいたい10月一杯かなぐらいの感じだったんです。

最初はやっぱり人が足りないし、ニーズは増えるばかりなので、「ボランティアさんが足りないので来てください！」っていう呼びかけをがらがんしていました。

それが、1,000人規模で来てくれた日には、「人がこんなにて、仕事がないのにどうするの」みたいな話にもなりました。

ニーズがどれぐらいで片づくのか、まったく先が読めないんですよ。30日に閉めるのだったら、それをちゃんとと言わなきゃいけない。ニーズが全然減ってないように見える時に人数の調整をどうするんだというあたりが、ほんとうにしんどかったです。

そんな時、「必要になったら、また開けたらええやん」というアドバイスももらって気が楽になり、結局、11月3日に閉鎖することにしました。センターの職員の疲弊と地元の人のストレスということを考えると、結果的にはそれで良かったかなと思っています。とにかく、閉める時期というのは大事ですね。



反省をふまえて要援護者リスト作りが進んだ

宮津市 30代 女性

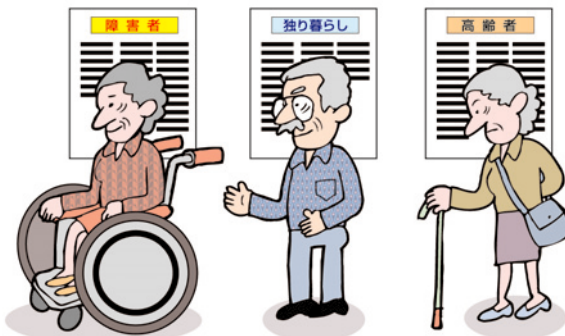
当時、市でも、高齢者福祉とか障害者福祉という係ごとに分かれておりまして、いわゆる要援護者リストというものが、きれいに整理できていない状況でした。

幾つの人だったら、障害何級の人だったら「要介護」という把握はできていたんですが、どういう生活をしておられて、どういう支援が必要かというところまで整理できていないというのが現状でした。反対に、社会福祉協議会(社協)*は、民生委員*を通じてひとり暮らしの方の名簿は持っているけれど、「要介護」のところはわからない。それぞれにデータを持っているところがバラバラだったんです。

ということで、あの時、主要機関のネットワークや災害時の要配慮者のデータベースがあったら、もっとスムーズな対応ができたんじゃないかということに。みんながそれに気づいたので、今では社会福祉協議会が中心となってネットワーク体制が作られています。

*社会福祉協議会とは、福祉サービスの提供やボランティア活動の支援など、地域の福祉の向上に取り組んでいる非営利目的の民間の組織です。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



非常時に必要なものは、きっちり整理

杉並区 70代 女性

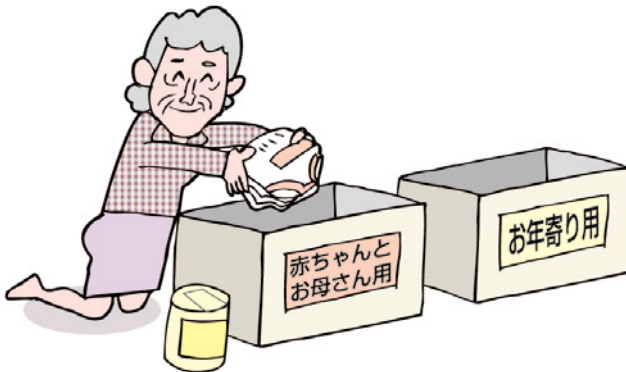
私はいつも緊急用の物資を地下室に置いています。今回の大雨で、地下室が水浸しになりましたが、幸い上の方の棚にいたので、難を免れました。

一口に非常時に備えると言っても、使う人によって必要なものが異なります。私は、「赤ちゃん・お母さん用」、「お年寄り用」というように区別して箱に入れ、中味が分かるように一覧表を箱の上に貼っています。

お年寄り特有のものとしては、入れ歯・入れ歯入れ、いたみ止め、虫めがねなど。赤ちゃん・お母さん用には、おむつ、防災ずきん、ウェットティッシュ等々55種類ぐらいあります。赤ちゃん用の非常食は賞味期限が短いのが困りものです。

あんまり準備がいいというので、春と秋の防災の日のイベントでは、消防署の人に頼まれてそれらを展示していますが、「参考になるからリストを下さい」と言ってくれる人もいます。

最初は、確かに大変でしたが、一度揃えてしまえば次の年からは賞味期限のせまっているものは使ってしまい、新しいものに交換すればいいわけです。「何が必要だろう」と考えながら箱につめるのも案外楽しいものですよ。



帰宅訓練のおかげで足に自信

杉並区 70代 女性

何でも体験できるのはいいチャンスだからと、帰宅困難者の訓練に毎年参加しています。

先日、電車に乗っている時に、人身事故で電車がストップしてしまいましたが、帰宅訓練で新宿から自宅まで歩いたことがあるという自信があったので、さっさと一番に歩いて帰ったんです。

訓練で体験していなかったら、そうはいかなかったと思います。途中ではぐれてしまった主人は、新宿へ戻って電車を待たらしいんですけど、私より1時間ぐらい遅れて帰ってきました。

ただ、私もまさかこんな状況になるとは思ってなくて、ヒールのある靴を履いていたから、かなりきつかったですね。若い人たちには、「会社のロッカーには必ず低い靴を置いておきなさい」って言いたいです。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

板橋区役所 鍵屋 一
防災リスクマネジメントWeb編集長 中川和之
日本YWCA常任委員 池上三喜子

一日前プロジェクト、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

災害における体験や被災経験を語り継ぐことが、災害体験者や被災者の皆さんには期待されています。そうした体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。ところが、こうした場やその方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうというのが実情です。ここでご紹介した一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

多くの皆さんは、災害体験・被災経験をお持ちではないでしょう。そうした「未経験者」だからこそ、一日前プロジェクトの場を設けて、聞き手やまとめ役になることをお勧めします。そこでは、被災された方々からさまざまな「思い」を読み取ることができます。同じエピソードでも、聞き手によって違った感慨をもたらします。

災害体験者や被災経験者の皆さんは、なかなか語り継げない本音の話を、一日前プロジェクトを活用して、残していくことができます。

また、一日前プロジェクトで作られた物語を、みんなで一緒に読むことで、体験から学ぶこともできます。ワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部に使うこともできます。文字だけでなく、気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともあるほどです。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法は、内閣府のWebサイト「災害被害を軽減する国民運動のページ」にまとめましたので、参考にしてください。

<http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html>

次ページでは、ポイントだけをご紹介します。

□物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2～4人集まっていたいただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出したり再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの話題から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話を切り分けるのは避け、一つの物語ごとに300字から500字時程度にまとめると読みやすいでしょう。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して、興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう?」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

この2年間、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りをしました。2年目は、防災や減災に詳しい人だけでなく、人から話を聞き出すことを仕事としているマスメディアの記者にも協力を得ることができました。地域でのイベントをきっかけに、10年以上前の災害の話聞く場を作ることができましたが、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すためにも、聞き取りの場はもっと増やすことが必要です。

すでに、被災地の人びとの言葉で語られた資料などから「物語」を拾い出すこともできるでしょう。それぞれの地元の災害でも、過去にさまざまな記録集が作られ、たくさんの身近な体験談があふれていることがあります。これらの資料から、物語を拾い出すことができれば、より多くの人が災害への備えや減災の実践の重要性を実感できるライブラリーになるはずです。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

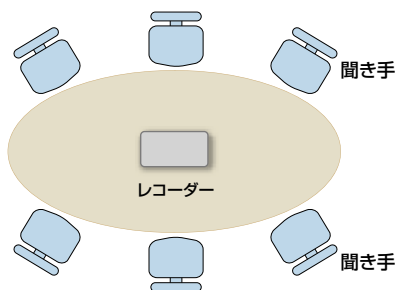
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当事を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集

※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

■発行

内閣府 (防災担当)

〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2 (中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>